筑波大学博士（文学）学位請求論文

陶淵明詩文論

宇賀神　秀一

二〇二〇年度

筑波大学博士（文学）学位請求論文

陶淵明詩文論

宇賀神　秀一

二〇二〇年度

目次

序章・・・

第二章　陶淵明の「集聖賢群輔録」を巡る一考察・・・

第四章　陶淵明の「詠史」詩と「擬古」詩・・・

結章・・・201
参考文献・・・207
一、陶集版本
二、和文
三、中文
初出一覧・・・217

序章

一　本論文の目的

本論文は、陶淵明の読書の具体的有り様と、淵明の読書の成果として表現された歴史的題材を扱う作品群に検討を加え、淵明にとっての読書と表現という営みが、いかなる意義を有するのかを明らかにする。

陶潛、字は淵明は、東晋の興寧三年（三六五）から劉宋の元嘉四年（四二七）を生きた文人で[1]、尋陽柴桑（現在の江西省九江市）の人である。現存する淵明の詩歌は、四言詩や五言詩、辞や賦などの詩歌が百三十首余り、記・伝・賛・述などの文章が二十作余り現存している。田園詩人、隠逸詩人として称される淵明の詩風は、素朴で平易とされており、郷里での生活に根付いた何気ない日常を表現の対象としたり、一方で虚構性が色濃い幻想的な作品も制作したりしている。また現実への痛烈な批判精神を持つ作品なども制作している。

そうした淵明の詩風は、劉宋期を牽引した謝霊運などとは一線を画しているとされる。またそれは時代を超越していたともされる。淵明の生きた東晋から劉宋期は、美文志向の時代である。そのような時代にあって、淵明も一定程度の読者を獲得してはいたものの、平易で素朴な措辞が時代の風紀にそぐわぬが故か、宋代に至り、蘇軾を始めとする文人たちに再注目されるまで、一流の詩人としての評価を得ることはなかった。もっとも逆からいえば、美文志向の強い措辞は、時代性が強く、時代が降れば降るほどに難解となる。一方で素朴な詩風は、後世に至っても理解しやすく、共感を呼びやすい側面もあるだろう。淵明の詩文が後世に至って再注目されたのは、

そういった意味でも必然性を持つのかも知れない。とはいえ、淵明の詩文には素朴で平易と単純化し得ない側面もあり、寧ろ、極めて複雑な側面があるのも事実である。

さて、従来の淵明の研究に関しては、日本と中国の訳注本が三十種以上が刊行されており、日本の論文に限っても百五十本以上を数える。これまで多くの研究者たちが様々な観点から論じてきたが、その中で主導的なものに絞って、淵明の先行研究を概観していくこととしたい[12]。

まず淵明研究において、最も基礎となるその伝本に関するものについてみていくこととしたい。淵明の伝本に関する早い時期の見解がみられるのは、清・陶澍の『陶靖節先生集』の「靖節先生集諸本序録」である[13]。そこでは、『靖節詩注四巻』『李公煥本』『何孟春本』『汲古閣本』『焦竑本』といった都合十二種の陶集の特色が端的に纏められている。

次に梁啓超氏は『陶集考証』において[14]、現行本に連なる十巻本を編纂した陽休之の「序録」や、『隋書』経籍志などの歴代の書誌情報に記されている陶集の情報などを整理した。それらの陶集の現物は、現在においては当然ながら目睹し得ないものの、梁氏はそれらの陶集がいかなる系譜のものであったのかという点などについても具体的に見解を述べている。

たとえば、陽休之の「序録」には、「其集先有両本行於世。一本八巻無序。一本六巻幷序目、編比顛乱、兼復闕少（其の集は先に両本の世に行わるる有り。一本は八巻にして序無し。一本は六巻にして序目を幷するも、編比顛乱して、兼ねて復た闕少あり）」（底本巻十。以下、底本から引用する場合は巻数のみを示す）とあり、最も初期の陶集として八巻本と六巻本があったことが記されている。また、『隋書』巻三十五・経籍志、集部・別集類に「宋徵士陶潛集九巻」とあり[15]、そこに注された梁代の書誌情報に「梁五巻、録一巻」とみられる。

梁氏はこの「梁五巻、録一巻」に関して、陽休之の参照した六巻本と同様のものと捉え、その内実についても本集五巻、目録一巻で構成されていたものと見解を述べた[8]。また、旧『唐書』巻四十七、経籍志・別集類には「陶淵明集五巻」と記されており[9]、これについて梁氏は「或即梁五巻而亡其録也（或いは即ち梁の五巻にして其の録亡ぶなり）」とも想定している[10]。梁氏の『陶集考証』は、分量的にはそれほど多くないにせよ、現在においても色褪せない卓見が随処にみられる。

次に橋川時雄氏の『陶集版本源流攷』を挙げよう[11]。その第一章は「論陶集自定本之有無」に始まる。ここに「自定本」とあるのは、作者が自分自身で別集を編纂したという意味である。つまり淵明が自分で自身の別集を編纂したのか否かという問題について論じたものである。これは、もともとは先に挙げた陶澍が、淵明の「五柳先生伝」において「常著文章自娯、頗示己志（常に文章を著して自ら娯しみ、頗る己が志を示す）」（巻六）と述べているのを根拠に、淵明が自身の別集を編纂したであろうことを指摘し、橋川氏は、それのみで自定本の説を主張するのは根拠薄弱として否定的立場に立ったものである。この点について、小尾郊一氏の見解を挙げておこう[12]。

実はこの「自定本」の問題は、淵明のみならず、漢魏六朝期に夥しく出現した別集、それぞれにも係わる重大な問題である。専集は別として、いわゆる別集を作者自身が編纂したかどうか、当時の他の別集についても検討を加えてみる必要があるが、先生は、既に早くこの問題を提起されたことは、注目すべきであろう。

小尾氏のいうように、淵明の自定本の存在の可能性は同時代の別の資料などの調査や、さらに多角的な観点か

ら論じられるべき問題であるが、現在においては殆ど等閑に附されている。なお、橋川氏の研究において、とりわけ刮目すべきは、第三章の「論北宋刊本紀要」から第六章の「明清刊各本紀要」に至るまで、橋川氏自身が目睹し得た陶集に関して、その編次や特色に関して細やかに解説を加え、さらには様々な陶集の伝本を体系的に系統付け、その祖本についても論じた点である。

さて、陶集の伝本に関して、最後に挙げたいのが、郭紹虞氏の『陶集考弁』である[11]。本書は「一、梁以前本」に始まり、「二、宋以前本」、「三、北宋本」といった、時代順に進められ、「十、清本上」「十一、清本下」、そして、最終的には「十二、近代本」に至り、都合百種の陶集の伝本を解説するものである。

郭氏の渉猟的な陶集の整理は、梁氏や橋川氏の見解をも踏まえたものでもあり、いわば陶集伝本に関する研究の集大成ともいうべきものである。また淵明の自定本の問題についても触れている。次に挙げよう[12]。

> 然陶公生前雖無自定之本、而伝写之本則在当時或已有之。其伝写之動機、可出於時人嗜好、亦未嘗不可出於陶公之本意。此即「飲酒詩序」所謂「聊命故人書之」者也。『宋書』隠逸伝称「潜有脚疾、使一門生二児舁籃輿」、此所謂故人、或即其門生。意者当時陶公之門生故旧、拠其所作之先後、而伝写成帙、故雖不必有意編定、而次第可尋、亦儼成自定本矣（然るに陶公の生前に自定の本無しと雖も、而るに伝写の本は則ち当時に在りても或いは已に之有り。其の伝写の動機は、時人の嗜好より出づる可し、亦た未だ嘗て陶公の本意より出づる可からずんばあらず。此れ即ち「飲酒詩序」に所謂る「聊か故人に命じて之を書せしむ」者なり。『宋書』隠逸伝に「潜に脚疾有り、一門生二児をして籃輿を舁ぐ」と称す、此れ所謂る故人にして、或いは即ち其の門生なり。意は当時の陶公の門生故旧にして、其の作る所の先後に拠りて、而して伝写して帙を成

す、故に必ずしも意有りて編定せずと雖も、而るに次第尋ぬ可し、亦た儼として自定本を成す）。

郭氏の見解は、陶澍や橋川氏の自定本の見解を踏まえたものであり、新たに淵明の「飲酒」序文の記述を根拠として、淵明の友人、あるいは門生が淵明の別集の編纂に関わったであろうことを述べる。またそこに体系的な別集編纂の意図があったか不明であるが、少なくとも淵明の自定本と称し得る伝本が存在したであろうことを指摘している。

以上、梁氏、橋川氏、郭氏の陶集の伝本に関する研究について概観した。彼らの陶集の伝本に関する研究は、今なお多大な価値を有する。だが、問題もある。それは三者いずれも、清代において『四庫全書総目』の提要によって主張された『陶淵明集』に関する偽作説を前提としながら、伝本の研究を行っている点である。これは、とくに陽休之の「序録」に記される最も初期の陶集である八巻本や六巻本の内容構成やその価値などにも関わってくる問題である。

次に淵明の文学的見地における研究に目を移そう。その最も基礎的な研究となるのが、吉川幸次郎氏の『陶淵明伝』である[13]。吉川氏の研究は、後の基礎的な淵明像を形作ったものと捉えられる。その淵明像というのは、淵明の死への達観的表現と、それと交錯する生への執着的表現、そうした矛盾した感情をありのままに表現した詩人としての像である。また吉川氏は淵明の生きた東晋から劉宋王朝の変革期の不安的な政治情勢との関係についても関連づけて捉える。こうした当時の政治情勢と結びつけて考えるのは、確たる必然性が見出し難い側面もあり、現在の淵明研究の動向をみる限り、あまり支持されていないように思われるが、言及するにせよ、しないにせよ、そうした観点もまた一定程度必要なものであるだろう。

次に挙げたいのが石川忠久氏の『陶淵明とその時代』である[14]。石川氏の研究の基本的な方針は、①「詩文を見るに際して、一切の先入観を排すること」、②「淵明の人物を時代に即して見ること」、③「諸作品、作品を繞る諸事象を文学史の流れの中で見る、ということ」の三つである。

淵明の詩文は、長きに渡って様々な文人に愛されてきた。それ故に淵明には、後世に結ばれた固定化されたイメージというものがあり、それは読み手の脳裏に無意識的にであれ存在している。その固定化された淵明像というのは、淵明の一部の作品を切り取ってみたとき、全面的には間違いとはいえないのであるが、しかしその部分的な淵明像のみで、全ての詩文を解釈しようとするのは危険である。そうした点に留意し立てられた石川氏の研究方針は、我々後進が取るべき研究方向を考える上で重要な示唆を与えてくれる。

また、とくに石川氏の該書の第三章「隠士陶淵明」は、淵明の交友関係や贈答詩などに即して、淵明の隠者として生きた意味を、当時の貴族との関わりから捉え直し、社会的意味を高めて捉え直そうとした。それは、淵明を淵明の生きた時代に即して捉え直そうとする意欲的な研究といえよう。さらにまた、『四庫全書総目』が偽作として断じて以来、等閑に附されてきた「集聖賢群輔録」や「五孝伝」などにも注目し、従来とは異なる「史家としての陶淵明」を論じたのは注目に値する[15]。しかし、石川氏の研究は、淵明の詩文それ自体に注目するというよりも、淵明の生きた当時の歴史的資料の分析に力を注いでおり、淵明文学それ自体の持つ興趣や魅力に迫るものではなかった。

次に挙げたいのが、一海知義氏の『陶淵明――虚構の詩人――』である[16]。一海氏の研究では、「陶淵明の孔子批判」などの鋭い論考が今なお目を引くが[17]、後の淵明研究に大きな影響を与えたのは、一海氏が『陶淵明――虚構の詩人――』において淵明文学における虚構性に注視した点である。一海氏は、淵明の虚構的作品に彼の本

質を見出して、いかにも現実的な「桃花源記」、淵明の自伝とされてきた「五柳先生伝」などを文学作品として位置づけ、さらには淵明の自己を客観視する能力の高さを指摘した。一海氏の淵明文学における虚構性への照射は、後の淵明研究における作者と作品を切り離して考えるべきという物語論的観点の導入の萌芽的存在とも捉えることができ、その点において重要視されてよい。

次に確認しなければならないのが、岡村繁氏の『陶淵明――世俗と超俗』である[*18]。岡村氏は、その論旨の前提として、淵明の人間性を全面的に否定するという立場を採っている。その立場から岡村氏は、淵明の作品のうちに孕む矛盾点として、政界に辟易して帰郷した際の心境における歓びと悲しみの二面性、世間と協調できない自身の「拙」なる生き方に対する自負と自嘲の二様の態度、あるいは一方で凄惨な貧窮振りをうたい、一方では貧窮な生活に対する充足感をうたっているなどの矛盾点を挙げている。岡村氏はそうした淵明の矛盾した表現態度について、淵明という詩人の自己中心的な自我意識の強さ、世俗的な名声への欲求に帰着するものと結論づけている。

岡村氏の指摘は、宋代に至って極まった淵明の高い評価を、鵜呑みに受け継いだ現代の淵明の読み手に対して、深い反省を促し、淵明という詩人の複雑さを再認させたのである。

最後に安藤信廣・大上正美・堀池信夫氏ら執筆・編纂の『陶淵明―詩と酒と田園』は[*19]、壊れきった淵明像を肯定的に再評価すべく、またその複雑さを解明すべく、淵明の生きた時代、淵明の思想、淵明の文学といった多角的な観点から、様々な論者が独自の切り口から論じており、基礎的かつ発展的な内容に富んでいる。

さて、本論文では、大きく二つの立場のもとで淵明について論じる。まず、従来の一般的な研究とは異なる立場として、十巻本全体から浮かび上がる淵明像に分析を加えていく。現在、淵明の作品は、宋版や明版など価値

あるテキストが容易にみられるが、そのテキストの大部分は都合十巻で構成されている。だが、淵明の作品のうち、清朝の『四庫全書総目』によって偽作として却けられたものが二種あり、それは全体の三巻分にまで及ぶ。そして、その三巻分は、現在においては殆ど見向きもされていない。本論では偽作説の是非についても論じるが、そういった観点を排しても、少なくとも清代に至るまで、千年以上にわたって描き続けられてきた淵明像というのは、十巻本から浮かび上がるものであったのであろう。そうであれば、十巻本から浮かび上がる淵明を捉え直すことは重要な意味を持つ。

次に、淵明を総合的に捉える直すという観点を持ちつつも、作者である淵明と、詩文作品を切り離して捉えることとして、作品ごとに生じる矛盾点に大きな問題をみないという立場を採る。

そもそもその時その時を生きる、いわば生身の淵明がいる。その淵明が詩歌作品を制作する際には、その時その時の創作者としての立場を設定する。その創作者としての淵明は、たとえば、悠々自適な雰囲気を重視することもあれば、一方で不条理な社会を刺世するような姿勢を重視する場合も当然ある。創作者としての淵明は、同じ人間でありながら、異なる思想的方向性のもとで作品を創作しようとする。つまり、淵明の詩文を、一括して生身の淵明のものとして捉えるべきでないと考えるのである。そうした立場に立った上で本論では、淵明詩文の独自性を明瞭化するのを目的として、淵明の諸先輩における詩歌作品と、それらと類型的に同一系統に属していよう淵明の詩歌作品に照射し、比較検討を中心に考察を加えていくこととする。

淵明は確かに先人の残した歴史書や詩歌作品を読み、そこから自己の生き方や表現のあり方を模索していた。淵明の読書という営みと、淵明が読書を通じて得られたことを表現しようとする営みは、淵明にとっていかなる意義を有するのか。そして、その意義は淵明の読書の具体的有り様を明らかにし、淵明詩文ならではの特色や独

自性を明らかにしていくのを通じてこそ明瞭化される。またそうしてこそ淵明文学の魅力を再認していくことに繋がっていくのである。

それでは次節において、本論文の構成を概観していきたい。

二　本論文の構成

第一章では、清・乾隆帝の勅撰、乾隆四七年（一七八二）成立の『四庫全書総目』の提要において唱えられた『陶淵明集』の偽作説について再検討を加える。陶集の偽作説については既に中国・日本でも一部論者によって、否定すべきことが論じられている。しかしながらまだまだその主張が全面的に支持されているとはいい難い。それは、なぜか。もとより『四庫全書総目』は、当代随一の学者である紀昀を筆頭編纂者に据えたものであり、加えてその執筆者たちの学術水準の高さは、内藤湖南をして「古来よりの学者として考へても数百年に一度しか出ないといふ人達」が集結したといわしめる[注]。つまり、全体としてみるならば『四庫全書総目』は今なお多大な信頼性を有しているのである。そして、それを否定するのであれば、相当に慎重な態度で論証しなければならない。

従来の研究では、そうした慎重さがやや欠けている嫌いがあり、それ故に偽作説についても再検討を要するのである。そして、その偽作説の内実をみていくと、四庫館臣が乾隆帝に指示されたが故に偽作説を成立させようとする、彼らの苦悩ないし苦心の跡が浮かび上がってくる。それを明らかにした上で、初期の『陶淵明集』である八巻本や六巻本の価値についても検討を加えていく。

第二章では、『四庫全書総目』の偽作説以来、長らく等閑に附されてきた「集聖賢群輔録」（以下、「集聖賢群輔録」については、その名称の検討を除いて、「群輔録」と略称する）を捉え直していく。「群輔録」は、『四庫全書総目』においては類書に位置づけられており、近時には淵明の読書札記として位置づけられている。本章では、後者の立場から、さらに淵明の詩歌、及び「群輔録」に即して、淵明の読書の有り様を立体的に明らかにする。また、淵明の「群輔録」の執筆動機については、従来、淵明が古人を纏めて自分の子供達に示し、子供達の知識・見聞を広げるために編纂したものと説明されている。この指摘についても一定の妥当性を認めつつ、さらに、それではなぜ、淵明は子供達に古人を学ばせたかったのか。淵明自身の根源的な志向を追求していく。

第三章では、淵明の読書の成果として表現された歴史人物を題材とする「詠史」詩を研究対象とする。従来の「詠史」詩に関する諸家の見解を通覧してみると、「詠史」詩は歴史人物の事跡を概括的うたっていく伝体と、故事や歴史人物に借りて自己の胸中を吐露する論体の二つのスタイルに分けることが出来る。本章では、とくに淵明の伝体「詠史」詩に注目し、淵明がいかなる点に力を注ぎ、また先輩詩人たちから何を継承し、いかなる点で独自性が窺えるのかを論じていく。

第四章では、論体「詠史」詩と伝体「詠史」詩、そして「擬古」詩を比較検討していく。なお、淵明の「擬古」詩は、歴史を扱っている点において、「詠史」詩的であるのだが、従来の研究において、模擬した対象となるもとうたを探る研究やその寓意性を検討するなど、作品それ自体に即した検討は少ない。本章では、まず「詠史」詩と「擬古」詩における、それぞれの語り手の設定のあり方の相違を明らかにする。その上で「擬古」詩に登場する歴史人物や歴史的題材の典故表現に注目し、「擬古」詩における「詠史」詩とは異なる特異な表現方法を浮き彫りにしていく。

第五章では、稿者の今後の研究方向を示すべく、宋版・汲古閣本『陶淵明集』に散見される文字の異同・異文に注目する。汲古閣本に示される異同・異文に関する注の総数は、都合七百箇所以上に及ぶ。こうしたテキストの混乱は夙に宋代頃から問題視されてきたが、従来の研究では、殆ど注目されていない。しかしながら興味深いのは、従来、一般的に採用されてきた本文と同様に、その異文にも淵明独自と看做せるものも存在している点である。『陶淵明集』が、なぜ、これほど混乱し、なぜ、異文にも淵明らしさが窺えるのか。本章では、この問題について、淵明の詩歌推敲という観点から迫り、さらに陶集の成立過程も捉え直していく。

結章では、以上の行論を纏め、その研究意義を述べて、全体の総括とする。

底本には汲古閣旧蔵の『陶淵明集』（中華再造善本、二〇〇三年）を用いる。陽休之「陶潛集序録」などの引用も該書に拠る。また必要に応じて、李公煥『箋注陶淵明集』、陶澍『靖節先生集』などの諸版を参照した。そのほか、『文選』から詩歌作品をなどを引用する際には、本文、及び李善注などは『文選』（上海古籍出版社、一九八六年）を用い、五臣注の引用に当たっては、『日本足利学校蔵宋刊明州本六臣注文選』（人民文学出版社、二〇〇八年）を用いる。

*1 沈約『宋書』巻九十三・隠逸伝に「潜元嘉四年卒、時年六十三」（中華書局、一九七四年、二二九〇頁。以下、『宋書』の引用は該書に拠る）とあるのに拠る。ただし、生年と死亡時の年齢に関しては異説もある。

*2 淵明詩文の先行研究については大上正美氏の『阮籍・嵇康の文学』の第Ⅳ部「陶淵明の文学をどのように考えるか」の第四章「陶淵明研究の可能性」（東洋学叢書、創文社、二〇〇〇年）に詳細に纏められている。

*3 陶澍集注（続修四庫全書、二四三～二五二頁）

*4 梁啓超氏『陶集考証』（『飲冰室合集』第二二冊所収の「飲冰室専集」九十六、中華書局、一九三六年、四六～五五頁）に拠る。

*5 『隋書』（中華書局、一九七三年、一〇七二頁。以下、『隋書』の引用は該書に拠る）

*6 梁氏前掲『陶集考証』「（一）六巻本―即梁五巻本」に「隋志所謂「梁五巻録一巻」也。陽休之之所見之「一本六巻幷序目、編比顛乱、兼復闕少」者、当即此本、其目録原在集外単行。故梁志僅云五巻。陽休之所見本、則已入録於集為六巻也（隋志の所謂る「梁五巻録一巻」なり。陽休之の見る所の「一本六巻幷序目、編比顛乱、兼復闕少」の者は、当に即ち此の本なるべし、其の目録は原より集外に在りて単行す。故に梁志は僅かに五巻と云う。陽休之の見る所の本、則ち已に録を集に入れて六巻と為るなり）」（四八頁）と述べられている。

*7 『旧唐書』（中華書局、一九七五年、二〇六七頁。以下、『旧唐書』の引用は該書に拠る）

*8 梁氏前掲『陶集考証』（四九頁）

*9 橋川時雄氏『陶集版本源流攷』（文字同盟社、一九三一年。後に汲古書院、一九九一年に復刻。本論では後者を用いた。

*10 橋川氏前掲『陶集版本源流攷』の「陶集版本源流攷　解説」五五五頁に拠る。

*11 郭紹虞氏『照隅室古典文学論集』上巻、上海古籍出版社、一九八三年、二五八～三二六頁

*12 郭氏前掲『照隅室古典文学論集』上巻所収の『陶集考弁』「一　梁以前本」二六四頁を参照。

*13 吉川幸次郎氏『陶淵明伝』（新潮社、一九五六年。後に『吉川幸次郎全集』七巻、筑摩書房、一九六八年に所収）

*14 石川忠久氏『陶淵明とその時代〈増補版〉』（研文出版、一九九四年。また『陶淵明とその時代〈増補版〉』研文出版、二〇一四年。本論では後者を参照した）

*15 石川忠久氏「史家としての陶淵明」（『桜美林大学中国文学論叢』第一号、一九六八年に所収。後に前掲『陶淵明とその時代』、及び前掲『陶淵明とその時代〈増補版〉』に所収。一一二～一三六頁を参照）

*16 一海知義氏『陶淵明――虚構の詩人――』（岩波書店、岩波新書五〇五、一九九七年。後に『一海知義著作集』第二冊、藤原書店、二〇〇八年に所収）

*17 一海知義氏「陶淵明の孔子批判」（初出は『文学』四五号、岩波書店、一九七七年。後に前掲『一海知義著作集』第二冊に所収）

*18 『陶淵明―世俗と超俗』（ＮＨＫブックス二二四、日本放送出版協会、一九七四年。併せて「陶淵明論―その超俗的生活を支えた世俗性」『文学研究』六八号、九州大学文学部、一九七一年を参照。）

*19 安藤信廣氏・大上正美氏・堀池信夫氏編『陶淵明―詩と酒と田園』（東方書店、二〇〇六年）

*20『支那目録学』の「四庫全書総目提要」（『内藤湖南全集』第十二巻、筑摩書房、一九七九年、四二九頁）を参照。

第一章　陶集偽作説小考

はじめに

北斉の陽休之は、陶淵明の別集である八巻本と六巻本、及び蕭統が纏めた八巻本がそれぞれ相違しているのを憂えていた。陽休之「陶潛集序録」には次のように述べられている。

其集先有両本行於世。一本八巻無序。一本六巻幷序目、編比顛乱、兼復闕少。蕭統所撰八巻、合序目伝誄、而少「五孝伝」及「四八目」。然編録有体、次第可尋。余頗賞潛文、以為三本不同、恐終致忘失。今録統所闕、幷序目等、合為一秩十巻（其の集は先に両本の世に行わるる有り。一本は八巻にして序無し。一本は六巻にして序目を幷するも、編比顛乱して、兼ねて復た闕少あり。蕭統の撰する所の八巻は、序目伝誄を合するも、「五孝伝」及び「四八目」を少く。然れども編録に体有り、次第尋ぬべし。余　頗る潛文を賞し、以為らく三本同じからざれば、恐らくは終に忘失を致さんと。今　統の闕く所を録し、序目等を幷して、合して一秩十巻と為す）。

（巻十）

八巻本には「序」が無い。六巻本は「序目」を備えているが、その配列は入り乱れて、不足するところもある。一方で蕭統本は「序目伝誄」を併せているが、「五孝伝」と「四八目」を収録していない。陽休之は、これらの

諸本を整理しなければ、いずれ失われゆくものがあろうと恐れたのである。そこで彼は、その体裁上、最も尊ぶべき蕭統本を主軸として、そこに「五孝伝」と「四八目」を補い、「序目等」もまた録して十巻本を編纂することにした。

さて、ここにいう「四八目」は、現行本では巻九から巻十にかけて「集聖賢群輔録」と称されて収録されている。北宋の宋庠は、その巻末に附された「八儒」と「三墨」の条についてのみ、淵明に仮託された偽作であることを指摘しており[*1]、『四庫全書総目』の提要は「群輔録」全体に加えて、さらに「五孝伝」もまた偽作と断じた。なお、「五孝伝」とは、巻七に収録される「天子孝伝賛」「諸侯孝伝賛」「卿大夫孝伝賛」「士孝伝賛」「庶人孝伝賛」を指している[*2]。

『四庫全書総目』の偽作説は、初期の陶集の成立の有り様を論じた梁啓超氏や橋川時雄氏、郭紹虞氏なども支持するところであり、近時においても「群輔録」や「五孝伝」は殆ど見向きもされていないのが現状である。一方で潘重規氏は『四庫全書総目』の偽作説を真っ向から非難し、潘氏の説は袁行霈氏や楊勇氏などに支持されており、石川忠久氏にも同旨の検討がみられる[*3]。

本章では、陶集に関する『四庫全書総目』の偽作説について、近年の研究成果を踏まえて、さらに『四庫全書総目』の主張の意図するところも汲み取りながら、その妥当性を再検証していく。その上で、初期陶集の価値について再考することとしたい。

一　偽作説とその真偽（1）

『四庫全書総目』巻一四八・集部・別集類一の『陶淵明集』八巻の提要（以下、『陶集』提要と略称）には、「今「四八目」已経睿鑒指示、灼知其贋、別著録於子部類書而詳弁之（今「四八目」は已に睿鑒の指示を経て、灼（あき）らかに其の贋なるを知れば、別して子部の類書に著録して詳らかに之を弁ず）」と述べられている[注]。「四八目」の偽作説は、「睿鑒」、すなわち乾隆帝の考慮に基づき、「指示」されたものである。またその詳細については、『四庫全書総目』巻一三七、子部・類書類存目一の『聖賢群輔録』二巻の提要（以下、『群輔録』提要と略称）に論じられている。これらの偽作説について潘重規氏は、大きく次の四つの観点から検討を加えている。

①陽休之増録偽書問題（陽休之が偽書を補録した問題）
②四友差錯問題（四友が相違している問題）
③五孝伝不見古文尚書問題（「五孝伝」は偽古文『尚書』をみていない問題）
④聖賢群補録名実乖迕問題（「聖賢群輔録」という名称と内実の乖離の問題）

まずは、①「陽休之増録偽書問題」に対応する『群輔録』提要の冒頭をみてみよう[注]。

一名「四八目」、旧附載『陶潛集』中。唐宋以来相沿引用、承訛踵謬、莫悟其非。邇以編録遺書、始蒙睿

鑒高深、断為偽託。臣等仰承聖訓、詳悉推求、乃知今本『潜集』為北斉僕射陽休之編。休之序録称、「其集先有両本、一本六巻、排比顛乱、兼復闕少。蕭統所撰八巻、又少「五孝伝」及「四八目」、今録統所闕、併序目等、合為十巻。」是「五孝伝」及「四八目」実休之所増、蕭統旧本無是也。統序称「深愛其文、故加捜校」、則八巻以外、不応更有佚篇。其為晩出偽書、已無疑義（一名は「四八目」、旧くより『陶潜集』の中に附載す。唐宋より以来相い沿いて引用せらる、訛を承けて謬を踵(ふ)み、其の非を悟るもの莫し。邇(ちか)くは以て遺書を編録し、始めて睿鑒の高深を蒙(こうぶ)れば、断じて偽託と為す。臣等 仰ぎて聖訓を承け、詳悉に推求す、乃ち今本の『潜集』は北斉の僕射陽休之の編たるを知れり。休之の序録に称す、「其の集は先に両本有り、一本は六巻、排比顛乱にして、兼ねて復た闕少あり。蕭統の撰する所の八巻、又「五孝伝」及び「四八目」を少(か)く、今統の闕く所を録して、序目等を併せ、合して十巻と為す」と。是れ「五孝伝」及び「四八目」は実に休之の増す所にして、蕭統の旧本に是れ無きなり。統序に「深く其の文を愛し、故に捜校を加う」と称すれば、則ち八巻より以外、応に更に佚篇有るべからず。其れ晩出の偽書たること、已に疑義無し）。

「一名四八目」と述べるのは、たとえば、汲古閣本『陶淵明集』においては、巻九の「群輔録」の題下に「一名四八目」とみられる。また「四八目」が「唐宋」より「以来」、「相沿引用」と述べているのは、「群輔録」を収録していた陶集自体も該当しようが、より広くいえば、該作を「引用」している司馬貞『史記索隠』や王応麟『玉海』なども該当するのであろう[8]。

さて、『群輔録』提要の主張は、蕭統が「捜校」を加えて「五孝伝」と「群輔録」を採録していないのであれば、更なる逸篇があるはずもない。そうであれば、両作が遅くに現れた偽書であることは疑いようがない、とい

うことである。これはまた『陶集』提要において次のように述べられている。

然昭明太子去潜世近、已不見「五孝伝」「四八目」、不以入集、陽休之何由続得（然れども昭明太子は潜の世を去ること近し、已に「五孝伝」と「四八目」を見ず、以て集に入れざれば、陽休之は何に由りて続ぎ得たるか）。

淵明と近い時代を生きた蕭統が「五孝伝」と「群輔録」を目睹しなかったのであれば、陽休之は何によって採録し得たのかという。つまり、陽休之が蕭統よりも遙か遠い時代に生きたという旨を示唆的に述べているのである。

ところで、淵明の没年は元嘉四年（四二七）である。蕭統は中興二年（五〇一）に生まれ、中大通三年（五三一）に没したのに対し、陽休之は永平二年（五〇九）に生まれ、開皇二年（五八二）に没した[7]。

このように淵明の没年より七十四年後に生まれた蕭統に対し、陽休之の生年はそれに遅れること僅かに八年である。蕭統と陽休之の没年については五十年近く隔たっているとはいえ、彼らの参照し得た陶集を考える上で重要なのは、彼らの生きた時代が隔たっているか否かである。こうした蕭統と陽休之の生年の接近から、潘氏は「提要之説、出於憶測、不足信也（提要の説、憶測より出づれば、信ずるに足らざるなり）」と述べている。

しかしながら四庫提要の説についても、全面的には否定し得ないところがある。四庫提要が述べるように、その差が八年であれ、陽休之よりも蕭統の方が淵明に近く生まれた事実は揺るがない。またたとえば、橋川時雄氏の挙げる旧鈔本陶集には、「昭明陶集序末記云、梁大通丁未年夏季六月梁昭明太子蕭統撰。未詳其所本、則昭明

編陶、未詳其年月也（昭明の陶集序の末記に云う、梁の大通丁未年の夏季六月　梁の昭明太子蕭統撰、と。未だ其の本づく所を詳らかにせざれば、則ち昭明の陶を編むは、未だ其の年月を詳らかにせざるなり）」とみられる[ｊ]。この記述は、必ずしも信憑性を有するものではないが、いまこれに従えば、蕭統の陶集編纂の時期は、大通元年（五二七）となるだろう。また橋川氏は陽休之が陶集を編纂したであろう時期について、宋庠「私記」に「楊僕射所撰」とあり、『北斉書』巻四十二・陽休之の伝に「六年、除正尚書右僕射（六年、尚書の右僕射に除正せらる）」（以下、傍点は稿者に拠る）とあることから、武平六年（五七五）前後に編纂されたのであろうと想定している[ｋ]。したがって、蕭統と陽休之の陶集の編纂時期という見方に限定すれば、五十年近く隔たっているものと捉えられる。

続けて、②「四友差錯問題」に対応する『群輔録』提要の主張を挙げよう。

且集中「与子儼等疏」称子夏為孔子四友、而此録四友乃為顔回・子貢・子路・子張（且つ集中の「与子儼等疏」は子夏を称して孔子の四友と為すも、而るに此れ四友を録して乃ち顔回・子貢・子路・子張と為す）。

淵明の「与子儼等疏」においては、子夏を孔子の四友に数えており、それに対して「群輔録」における孔子の四友は、子夏を挙げていないと述べている。「群輔録」の該当箇所をみてみよう。

顔回　子貢　子路　子張

右孔子四友。「文王有胥附・奔奏・先後・禦侮、謂之四隣。孟懿子曰、夫子亦有四隣乎。子曰、吾有四友

焉。自吾得回、門人益親、是非胥附乎。自吾得賜、遠方之士日至、是非奔奏乎。自吾得師、前有光、後有輝、是非先後乎。自吾得由、悪言不至於門、是非禦侮乎。」見『孔叢子』（右孔子の四友。「文王に胥附・奔奏・先後・禦侮有り、之を四隣と謂う。孟懿子曰く、夫子も亦た四隣有るか。と。子曰く、吾四友有り。吾の回を得てより、門人益ます親なり、是れ胥附に非ずや。吾の賜を得てより、遠方の士 日ごとに至る、是れ奔奏に非ずや。吾の師を得てより、前に光有りて、後に輝き有り、是れ先後に非ずや。吾の由を得てより、悪言は門に至らず、是れ禦侮に非ずや」と。『孔叢子』に見ゆ）。

（巻九）

『群輔録』提要が「此録四友乃為顔回・子貢・子路・子張」と述べているのは、確かに「群輔録」の記述と一致している[10]。次に淵明の「与子儼等疏」を挙げよう。

子夏言曰、「死生有命、富貴在天。」四友之人、親受音旨。発斯談者、将非窮達不可妄求、寿夭永無外請故邪（子夏の言に曰く、「死生に命有り、富貴 天に在り」と。四友の人、親しく音旨を受く。斯の談を発するは、将た窮達は妄りに求むべからず、寿夭は永く外に請う無き故に非ずや）。

（巻八）

一見すると子夏の発言を引用し[11]、その流れで子夏も孔子の「四友」に含んで述べているものと解されるが、田部井文雄・上田武氏は「与子儼等疏」の「四友」に対して、『孔叢子』を挙げて「子夏は入っていないが、ここでは孔門の高弟たちというほどの意味で用いていると見られる」と注しているように[12]、孔子の「四友」に子夏を含むものとは解していない。石川忠久氏は明の何孟春の注に「『孔叢子』孔子四友、回・賜・師・由、非子

夏。而此云然者、特謂其同列耳（『孔叢子』の孔子の四友は、回・賜・師・由にして、子夏に非ず。而して此れ然(しか)く云うは、特だ其の同列なるを謂うのみ）」とあるのを挙げて、『群輔録』提要における「与子儼等疏」の読みを否定している[*13]。

このように四庫提要の偽作説は、蕭統と陽休之の生きた時代の差を遙か遠いものと捉えることで成立する。これは、蕭統と陽休之における陶集編纂の時期という観点に立てば、一定程度は首肯し得るものの、しかしながら確信的な根拠とは看做し難い。また「与子儼等疏」の孔子の四友についても、何孟春などのように解釈することも可能であり、四庫提要のように、淵明にとっての「四友」が、子夏を含むものと限定しながら解した上で、それを偽作説の根拠とするのは、やや説得性にかけるといわざるを得ない。

二　偽作説とその真偽（２）

『群輔録』提要の三つ目の主張は、③「五孝伝不見古文尚書問題」であり、『群輔録』提要における主張は次のようである。

> 又「五孝伝」引「孝乎惟孝、友于兄弟」之文、句読尚従包咸註、知未見古文『尚書』。而此録四岳一条、乃引「孔安国伝」。其出両手、尤自顕然（又「五孝伝」に「孝なるかな惟れ孝、兄弟に友たり」の文を引く、句読 尚お包咸註に従うは、未だ古文『尚書』を見ざるを知る。而して此れ四岳の一条を録して、乃ち「孔安国伝」を引く。其れ両手より出づること、尤も自づから顕然たり）。

「五孝伝」の引用する「孝乎惟孝、友于兄弟」は、『論語』の包咸の注釈の「句読」と同様であることから、偽古文『尚書』をみていない。他方「群輔録」においては孔安国の伝、すなわち、偽孔伝が引用されていることから、「五考伝」と「群輔録」の作者は別人であると述べている。先に「群輔録」における偽孔伝の引用を確認しておけば、「羲仲　羲叔　和仲　和叔」を挙げるなかで、次のようにみられる。

右羲和四子。孔安国云、「即堯之四岳、分掌四岳諸侯。」鄭玄云、「堯既分陽為四時、命羲仲・和仲・羲叔・和叔等為之官、又主方岳之事、是為四岳」。見鄭『尚書注』（右羲和の四子。孔安国云う、「即ち堯の四岳、四岳の諸侯を分掌す」と。鄭玄云う、「堯既に陽を分けて四時と為す、羲仲・和仲・羲叔・和叔等に命じて之を官と為す、又方岳の事を主る、是れ四岳と為す」と。鄭『尚書注』に見ゆ）。

（巻九）

孔安国の「即堯之四岳、分掌四岳諸侯」については、『尚書』巻二・堯典篇に「帝曰咨四岳」とあり、ここに附された偽孔伝に「四岳、即上羲和之四子、分掌四岳之諸侯、故称焉（四岳は、即ち上の羲和の四子、四岳の諸侯を分掌す、故に焉を称す）」とみられるのと概ね一致しており[注15]、確かに「群輔録」の作者は偽孔伝を参照している[注15]。

さらにまた、この『群輔録』提要の主張は、『陶集』提要においては次のようにみられる。

且「五孝伝」及「四八目」所引『尚書』自相矛盾、決不出於一手（且つ「五孝伝」と「四八目」の引く所

の『尚書』は自づから相い矛盾すれば、決して一手より出でず）。

「五孝伝」と「群輔録」における『尚書』の引用文は矛盾し、一人の作者が記したものではないと述べているように、「五孝伝」の依拠した『尚書』は、偽古文『尚書』以前のものであるのに対し、「群輔録」の依拠した『尚書』は、孔安国伝の附された偽古文『尚書』であるという矛盾を指摘する。

要するに四庫提要の主張は、「五孝伝」の作者は、偽古文『尚書』をみておらず、一方で「群輔録」の作者は偽古文『尚書』をみていたというものである。

以上を踏まえて「五孝伝」の中の「卿大夫孝伝賛」を挙げれば次の通りである。

孔子、魯人也。入則事父兄、出則事公卿、喪事不敢不勉、故称曰、「孝乎惟孝、友於兄弟、是亦為政也。」君賜腥、必熟而薦之、雖蔬食而斉、祭如在……（孔子は、魯人なり。入りては則ち父兄に事え、出でては則ち公卿に事う、喪事 敢えて勉めずんばあらず、故に称して曰く、「孝なる乎惟れ孝、兄弟に友なり、是れ亦た政を為すなり。」と。君 腥（なまぐさ）きを賜うや、必ず熟して之を薦む、蔬食と雖も斉し、祭に在るが如し……）。

（巻七）

孔子は家庭では父兄に仕え、外では公卿に仕え、喪事にも勉めた。それ故に孔子は「孝乎惟孝……」と称したと述べられており、そして、これは『論語』為政篇に次のようにみられる[*16]。

子曰、『書』云、孝乎惟孝、友于兄弟、施於有政。是亦為政、奚其為為政（子曰く、『書』に云う、孝なるかな惟れ孝、兄弟に友たり、有政に施すと。是れ亦た政を為すなり。奚ぞ其れ政を為すことを為さん）。

このように「卿大夫孝伝賛」では、孔子を称える伝において、孔子の発言として、『論語』に引かれる『尚書』の一文が引用されている。そうであれば、必ずしも四庫提要が述べるように、そもそも『尚書』それ自体からの引用と考えなければならないことはない。石川忠久氏が「『尚書』を直接引用しているのではなく、『論語』の『尚書』引用部分を引用したに過ぎない」と述べている通りであろう[*17]。

以上のように、四庫提要の偽作説において、蕭統と陽休之の生きた時代の隔たりや孔子の四友の問題などは、根拠に乏しいものであるが、必ずしも全面的には否定し得ないところがある。だが、ここにみた主張については、近年の研究と同様に否定的に捉えなければならない[*18]。

三　偽作説とその真偽（3）

『群輔録』提要の最後の説は、④「聖賢群補録名実乖迕問題」であり、「集聖賢群輔録」という名と、そこで挙げられる人物達の乖離を主張するものである。次に挙げよう。

至書以「聖賢群輔」為名、而魯三桓・鄭七穆・晋六卿・魏四友、以及仕莽之唐林・唐遵、叛晋之王敦、纘列簡編、名実相迕理乖風教、亦決非潛之所為（書の「聖賢群輔」を以て名と為すに至りては、而して魯三桓

・鄭七穆・晋六卿・魏四友、以て莽に仕うるの唐林・唐遵、晋に叛けるの王敦に及ぶまで、簡編に纘列す、名実 相い迕(もと)りて理は風教に乖(そむ)くも、亦た決して潜の為す所に非ず）。

その題に「聖賢群輔」と称しつつも、魯の三桓・鄭の七穆・晋の六卿・魏の四友、さらに王莽に仕えた唐林・唐遵、西晋に反旗を翻した王敦などが挙がっている点に疑義を呈している。ただ、潘氏が指摘するように、そもそも「群輔録」は悪人もまた採録対象となっており、その末尾に附される跋文では次のように述べられている。

凡書籍所載及故老所伝、善悪聞於世者、蓋尽於此矣。漢称「田叔・孟舒等十人」及田横「両客」、魯「八儒」、史並失其名。夫操行之難、而姓名翳然、所以撫巻長慨、不能已已者也（凡そ書籍に載る所及び故老の伝うる所、善悪の世に聞こゆる者は、蓋し此に尽く。漢に「田叔・孟舒等の十人」及び田横の「両客」、魯の「八儒」を称するも、史並びに其の名を失す。夫れ操行の難ありて、而して姓名翳然たるは、巻を撫して長慨するも、已に已(すで)む能(や)わざる所以の者なり）。

（巻十）

書籍や老人の伝承するところにおいて、世に伝える「善」人と「悪」人は、以上であると述べられている。加えて「群輔録」においては、王莽に仕えた「唐林」「唐尊」などを挙げるにしても、左思の「二唐絜己、乃点反汗（二唐 己を絜ぎよくするも、乃ち点じ反って汗(けが)る）」という一文が引用されている。左思は、唐林・唐尊を汚濁したものとして否定的に述べており、「群輔録」にこうした発言が引用されていることからすれば、唐林・唐尊らは否定すべき「悪」人という認識のもとで挙がっているのであろう。

しかしながら「集聖賢群輔録」という名と、本文に「悪」も挙げることを述べる矛盾は、やはり疑問として残る。その点について潘氏は次のように述べている。

「聖賢群輔録」、本名「四八目」、宋以前蓋未有称「聖賢群輔録」者。陽休之「序録」称「……「四八目」」、未嘗挙「聖賢群輔録」之名也。宋初宋庠本「私記」所得旧本、亦惟挙「四八目」、初無「聖賢群輔録」之名（「聖賢群輔録」、本名は「四八目」、宋以前蓋し未だ「聖賢群輔録」と称する者有らず。陽休之の「序録」に「……「四八目」」と称するも、未だ嘗て「聖賢群輔録」の名を挙げざるなり。宋初の宋庠本「私記」の得る所の旧本も、亦た惟だ「四八目」を挙ぐるのみ、初め「聖賢群輔録」の名無し）。

陽休之が「四八目」と称しているほか、宋庠「私記」や思悦「書靖節先生集後」などが、「四八目」と称していることから、「集聖賢群輔録」という名は後出のものと捉え、「四八目」こそが、「本名」であると述べている[*19]。

だが、陽休之の「四八目」という呼称も、原題を示しているのかよく分からないところもある。たとえば、陽休之のいわゆる「五孝伝」という名についても、汲古閣本『陶淵明集』や蘇写本『陶淵明集』、李公煥本『箋注陶淵明集』、張溥『陶彭沢集』などにはみられない[*20]。してみると、陽休之は「天子孝伝賛」「諸侯孝伝賛」「卿大夫孝伝賛」「士孝伝賛」「庶人孝伝賛」の五つを便宜的に一括して「五孝伝」と略称しているものとも考えられる。そうであれば、陽休之のいわゆる「四八目」もまた便宜的に呼称されたものに過ぎない可能性も否めない。

ただし、古くは唐代において「四八目」と称されていたことは確かであり、『史記』巻五十五・留侯世家の「天下有四人（天下に四人有り）」に附された司馬貞『索隠』には、次のようにみられる[*21]。

四人、四皓也。謂東園公・綺里季・夏黄公・角里先生。按『陳留志』云、「……。京師号曰覇上先生、一曰角里先生」。又孔安国『秘記』作「禄里」。此皆王劭拠『崔氏・周氏系譜』及陶元亮「四八目」而為此説（四人は、四皓なり。東園公・綺里季・夏黄公・角里先生を謂う。按ずるに『陳留志』に云う、「……。京師号して覇上先生と曰い、一に角里先生と曰う」と。又孔安国『秘記』は「禄里」に作る。此れ皆な王劭の『崔氏・周氏系譜』と陶元亮の「四八目」に拠りて此の説を為す）。

司馬貞の発言を以って唐代の代表と看做すことはできないが、彼が「四八目」の名を用いていたことが分かる。なお、これは「群輔録」の次の条を踏まえたものである。

園公［姓園名秉、字宣明、陳留襄邑人。常居園中、故号園公。見『陳留志』］[*22]綺里季　夏黄公［姓崔名廓、字少通、斉人。隠居修道、号夏黄公。見『崔氏譜』］角里先生（園公［姓は園　名は秉、字は宣明、陳留襄邑の人。常に園中に居る、故に園公と号す。『陳留志』に見ゆ］綺里季　夏黄公［姓は崔　名は廓、字は少通、斉人なり。隠居して道を修め、夏黄公と号す。『崔氏譜』に見ゆ］角里先生）

『陳留志』を挙げている点は[*23]、司馬貞『索隠』と同様であり、『崔氏譜』については、司馬貞の挙げる「崔氏系譜」であるだろう。

さらにいえば唐代においては「四八目」とも異なって称されていた可能性もある。江淹「雑体詩」の「孫廷尉

［雑述］綽」には、四皓を挙げて「領略帰一致、南山有綺皓（領略 帰して致を一にし、南山に綺皓有り）」（第十五・十六句）とあり、文選鈔は次のように注している[*24]。

鈔曰、……。南山、周南山也。綺李季・園公・夏里黄公・角里先生、是謂四皓。『陳留志』云、「園公、姓園名庚。」「古賢集目」云、「夏黄公、姓崔名廓。」其余未詳。以其元老、故為四皓。言略省同帰一致、故南山有綺皓之人（鈔に曰く、……。南山は、周南山なり。綺李季・園公・夏里黄公・角里先生、是れを四皓と謂う。『陳留志』に云う、「園公、姓は園 名は庚」と。「古賢集目」に云う、「夏黄公、姓は崔 名は廓」と。其の余は未だ詳らかならず。其の元老を以てす、故に四皓と為す。言うこころは略省して帰を同じくして致を一にす、故に南山に綺皓の人有り）。

文選鈔は「群輔録」や司馬貞と同じように『陳留志』を挙げており、一方で「古賢集目」は「隋志」に未収で、森野繁夫氏は「いかなる書か未詳」と指摘している[*25]。だが、「古賢集目」の引用文である「夏黄公、姓崔名廓」は、既に引用した通り、「群輔録」の本文に「夏黄公」とあり、その注に「姓崔名廓」とみられるのと一致している[*26]。

このようにみていくと、四皓に関して先ず以って重んずべき資料は、共通して『陳留志』や『崔氏譜』などであったのであろう。そして、司馬貞『索隠』において、そうした資料と併せて「群輔録」も重視され、またそれと記述が一致する「古賢集目」は、「四八目」ないし「群輔録」である蓋然性が高いといえる[*27]。

清・章学誠は「蓋古人称名樸、而後人入於華也（蓋し古人の名を称するや樸にして、而るに後人は華に入るる

なり）」と述べており、書名は後世に至るにつれて華美になる傾向があると説いているのを踏まえれば、それに類する事例として「四八目」、あるいは「古賢集目」から「集聖賢群輔録」に変化していったものと捉えることができる[*28]。

以上のように「集聖賢群輔録」という名称は、宋代の資料に多くみることができ、唐代においては「四八目」と称されていたことが確認される。しかし、それが本名であったとは断じ得ない。しかも、唐代においては「四八目」のほか、「古賢集目」と称されていた可能性もある。「古賢」とあり、本文に「悪」もまた対象とすることが記されている点からすれば、名称と内実は古くから乖離していたのであろう。ただ、名称の由来それ自体が不確かでることは間違いない。その不確かなものと、内実の不一致を偽作説の論拠とするのはどうか。

四　四庫館臣の苦心

さて、『群輔録』提要の偽作説において、①の蕭統と陽休之の生きた時代の差や、②の「与子儼等疏」における孔子の四友に子夏を含むものと解するか否か、あるいは④の名称と内実の乖離などは、全面的に否定し得るものとはいい難い。だが、近年、四庫提要の偽作説が否定的に捉えられてもいるように、明確な根拠に裏打ちされた主張でないことは留意しなければならない。そして、本論では、近年の研究と同様に偽作説否定の立場を採る。四庫提要の偽作説において問題視すべきは、その論証の仕方である。陽休之「陶潜集序録」と、『群輔録』提要における陽休之「陶潜集序録」の引用を並べ挙げよう。

其集先有両本行于世。一本八巻無序。一本六巻幷序目。編比顛乱。兼復闕少。蕭統所撰八巻、合序目伝誄、而少「五孝伝」及「四八目」。

（陽休之「陶潜集序録」）

其集先有両本、一本六巻、排比顛乱、兼復闕少。蕭統所撰八巻、又少「五孝伝」及「四八目」。

（『群輔録』提要）

陽休之がもともと述べていた「両本」とは、蕭統本以前の八巻本と六巻本である。そうであるにも拘わらず、『群輔録』提要の「両本」は、六巻本と蕭統本であり、あたかも八巻本の存在が無かったかのように述べられている。なお、四庫全書本『陶淵明集』の底本は、拙訳の『陶集』提要において、その体裁、及び文字の異同などから李公煥本系統の休陽程氏本であろうことを指摘した[29]。その巻末に附される陽休之「陶潜集序録」もまた『群輔録』提要における陽休之「陶潜集序録」のようには作られていない。さらにまた『陶集』提要における陽休之「陶潜集序録」は、次のように引用されている。

北斉陽休之序録、潜集行世凡三本、一本八巻無序。一本六巻有序目、而編比顛乱、兼復闕少。一本為蕭統所撰、亦八巻、而少「五孝伝」及「四八目」（北斉の陽休之の序録に、潜の集の世に行わるるもの凡そ三本、一本は八巻にして序無し。一本は六巻にして序目有るも、編比顛乱して、兼ねて復た闕少す。一本は蕭統の撰する所と為る、亦た八巻にして、「五孝伝」及び「四八目」を少く、と）。

（『陶集』提要）

『群輔録』提要とも異なって八巻本を挙げているが、陽氏「序録」の「先」字を排して、「凡」字に変え、「両本」を「三本」に改めて、八巻本・六巻本と蕭統本を並列的に挙げている。この異同についても拙訳において「提要が『両本』を『三本』に改めたのは、蕭統本を数えてのことであろう」と注したが、いま明らかにすべきは、四庫提要が敢えて変更したことの意味であるだろう[*30]。

四庫提要における陽休之「陶潜集序録」の引用のあり方で共通しているのは、蕭統本が、蕭統本に先行する八巻本や六巻本と、あたかも同時代に通行していたかのように解されるという点である。またこれが『群輔録』提要の「是「五孝伝」及「四八目」実休之所増、蕭統旧本無是也。……。其為晩出偽書」という主張や、『陶集』提要の「然昭明太子去潜世近、已不見「五孝伝」「四八目」、不以入集、陽休之何由続得」といった主張を補強している。そうだとすれば、四庫提要における陽氏「序録」の文字の異同は、偽作説を成立させるための、意図的な改竄といわざるを得ない。孔子の四友の相違において「此録四友」と述べていたのも、「「集聖賢群輔録」は四友を録して」と解されるが、その実、『孔叢子』に基づくものであり、『陶集』提要において「且「五孝伝」及「四八目」所引『尚書』自相矛盾、決不出於一手」と述べているのも、その実、「『論語』の『尚書』引用部分」、すなわち『論語』に基づくものである。

四庫提要の陶集に関わる偽作説、厳密にいえば乾隆帝に「指示」され、立てられた偽作説は、陽休之「陶潜集序録」を隠微に改め、事実と異なるような示し方で展開されている。このように論ぜざるを得なかったことからすれば、もとより四庫館臣からしてみても、蕭統と陽休之の生きた時代が接近していることや、孔子の四友の相違、『尚書』のテキストの相違を根拠とするのに無理があることなど、当然ながら承知していたのであろう。だが、それでも四庫館臣らは、偽作説を主張せざるを得なかった。潘氏は次のように述べている。

及乾隆帝見「四八目」中多載魯三桓・晋六卿・司馬懿・王敦之流、悪其有不臣之心、故深所不喜。所謂「名実相迕、理乖風教」即乾隆帝之隠私也。諸臣迎合其意、遂羅織周内以成其獄。当時諸臣処清帝淫威之下、自有其不得已之苦衷、独怪二百年来、号称博学方聞之士、随声附和、竟不之察、使淵明著作、横遭剥削、亦可哀矣（乾隆帝「四八目」の中に多く魯三桓・晋六卿・司馬懿・王敦の流を載するを見るに及んで、其の不臣の心有るを悪む、故に深く喜ばざる所なり。所謂「名実 相い迕りて、理 風教に乖く」とは、即ち乾隆帝の隠私なり。諸臣 其の意に迎合す、遂に羅織周内して以て其の獄と成らん。当時の諸臣は清帝の淫威の下に処れば、自ら其の已むを得ざるの苦衷有り、独怪二百年来、号して博学方聞の士と称せらるるも、随声附和す、竟に之を察せずして、淵明の著作をして、横遭剥削せしむれば、亦た哀しむべし）。

乾隆帝が反逆者である魯三桓・晋六卿などを嫌悪しており、四庫館臣らは、そうした乾隆帝の意向に屈服しなければならなかったとして、清朝に敷かれた厳しい言論統制の影響を指摘している。

以上、本論が四庫提要の陶集に関する偽作説に対して、否定の立場を採る所以である。最後に、こうした観点から浮かび上がる従来の陶集伝本に関する研究の問題点と初期陶集の価値について捉え直していく。

五　初期陶集を巡って

郭紹虞氏は[*31]、梁啓超氏や橋川時雄氏の見解を集成しつつ[*32]、宋代以前の陶淵明の別集を五種挙げている。次

に挙げよう。

ⅰ六巻本
ⅱ八巻本
ⅲ蕭統八巻本
ⅳ陽休之十巻本
ⅴ南唐本

このうち、ⅰ、ⅱ、ⅲは、陽休之「序録」にみられるもので、ⅴ南唐本は、汲古閣本『陶淵明集』の巻三の「問来使」の題下に引用されるものである。これは南唐、つまり五代（九〇七～九六〇）に栄えた南唐という国名を以て、テキストの呼称としたのであろう[*33]。

また、『隋書』巻三十五・経籍志、集部・別集類に「宋徵士陶潛集九巻」とあり[*34]、そこに注された梁代の書誌情報に「梁五巻、録一巻」とみられる。梁氏は前者の九巻本について、陽休之の編纂したⅳ十巻本の録一巻を欠いたものとする。後者の「梁五巻、録一巻」については、陽休之の参照したⅰ六巻本と同様のものとして、それが本集が五巻、目録が一巻で構成されていたものと指摘しており[*35]、蕭統本を論じるなかで、「似昭明将旧五巻釐為六巻（昭明　旧五巻を将て釐めて六巻と為すに似たり）」と述べているように、蕭統の参照したテキストが「旧五巻」、すなわち六巻本であろうことを指摘している[*36]。

橋川氏の六巻本に対する見解は、概ね梁氏の見解と同様であり、「抑為昭明所観幾本中之一耶（抑そも昭明の

観る所の幾本中の一為らんか）」と述べて、蕭統の参照した一本であろうことを指摘している[*37]。なお、梁氏は旧『唐書』巻四十七、経籍志・別集類には「陶淵明集五巻」について、「或即梁五巻而亡其録也（或いは即ち梁の五巻にして其の録亡ぶなり）」と述べ、一方で橋川氏は「六巻本隋時已佚、新旧『唐志』所著録之五巻本、並踏襲『隋志』所録而存其目（六巻本 隋時に已に佚す、新旧『唐志』に著録する所の五巻本、並びに『隋志』の所録を踏襲して其の目を存す）」と述べて、六巻本は隋代において既に散逸していたであろうことを述べる。だが、旧『唐志』は、『古今書録』に依拠するものとされており、そうであれば六巻本は、梁氏のいうように録一巻を欠いた五巻として、遅くとも唐の玄宗の開元年間頃まで残っていた可能性もあるだろう。なお、三者いずれも六巻本に「五孝伝」と「群輔録」は収録されていなかったと考えている点は同様で、その点は留意することとしたい。

次いで、八巻本の構成については、梁氏、橋川氏、郭氏の説が分かれるところであり、三者の想定する八巻本の構成を挙げよう。

Ⅰ 梁啓超　集五巻・「五孝伝」一巻・「四八目」二巻[*38]

Ⅱ 橋川時雄　集七巻・録一巻[*39]

Ⅲ 郭紹虞　集五巻・「五孝伝」一巻・「四八目」一巻・録一巻[*40]

梁氏は次のように述べている[41]。

陽休之所謂「八巻無序」者也。此本殆於五巻外加入「五孝伝」一巻、「四八目」上下二巻、共為八巻。故休之拠此而言五巻本之「闕少」也（陽休之の所謂る「八巻にして序無」き者なり。此の本は殆ど五巻の外に「五孝伝」一巻、「四八目」上下二巻を加入して、共に八巻と為す。故に休之は此れに拠りて五巻本の「闕少」を言うなり）。

梁氏は陽休之「序録」の八巻本は、「集五巻」に「五孝伝」と「群輔録」の都合三巻を加えたものとして、六巻本と殆ど同様の体裁を取るものと説明している。また陽休之「序録」における「六巻幷序目、編比顛乱、兼復闕少」の「闕少」に当たるのが、「五孝伝」と「群輔録」と説明する。なお、梁氏は両作について「此両部分決非淵明作、四庫提要弁之甚明（此の両部分は決して淵明の作に非ず、四庫提要 之を弁ずること甚だ明らかなり）」と述べて、四庫提要を支持していることを確認しておく[42]。

橋川氏は、「陶公偽仮以成書、久輯於陶集者、有「五孝伝」、「聖賢群輔録」二書（陶公に偽仮して以て書を成し、久しく陶集に輯せらるる者、「五孝伝」、「聖賢群輔録」の二書有り）」と述べて、四庫提要の偽作説を引用しており[43]、橋川氏が両作を偽作と捉えている点は梁氏と同様であるが、八巻本の構成についての想定は異なっている。橋川氏は次のように述べている[44]。

拠陽休之序而言、陽氏改編以前、陶集有三本、其一即八巻本、別有蕭統八巻本、陽序云、「其集先有両本

行于世。一本八巻無序。」按玩其文、此本亦必当梁以前之物、集七巻・録一巻、凡八巻者也（陽休之序に拠りて言えば、陽氏の編を改むる以前、陶集に三本有り、其の一は即ち八巻本なり、別に蕭統八巻本有り、陽序に云う、「其の集は先に両本の世に行わるる有り。一本八巻にして序無し」と。按ずるに其の文を玩(あじ)わえば、此の本も亦た必ず当に梁以前の物なるべし、集七巻・録一巻、凡そ八巻の者なり）。

橋川氏は、必ずしも八巻本に「五孝伝」と「群輔録」が収録されていたとは述べていない。また「録一巻」を加えている点で、梁氏と見解を異にしており、これは、陽休之が「序録」において「一本八巻無序。一本六巻幷序目」と述べるのを「序」のみ失われ、「録」はあったと解してのことであるだろう。橋川氏の読みは、厳密な解釈と捉え得るが、陽休之が橋川氏の解釈のごとく厳密に述べていたかは断じ得ないため、ひとまず梁氏の解釈も可能性の一つとして残しておくべきであろう。

続けて、郭氏の見解を確認しておけば、上掲の梁氏と橋川氏の説を折衷しながら、次のように述べている[*45]。

梁啓超『陶集考証』謂、「此（八巻）本、殆於五巻外加入「五孝伝」一巻、「四八目」上下二巻、共為八巻。」其謂五巻外加「五孝伝」、「四八目」二種甚是、惟謂「四八目」分上下二巻、則拠後世「四八目」分二巻者言之、非其旧也。橋川時雄『陶集版本源流攷』謂、「此本亦必当梁以前之物、集七巻・録一巻、凡八巻者也。」則似「四八目」不応分巻、以分巻以後、益以録一巻、其巻数当為九巻也。考陽休之本凡十巻、於「四八目」亦不分巻、由後推前、知此本亦不応分巻、自以橋川氏之説最允（梁啓超『陶集考証』に謂う、「此の（八巻）本は、殆ど五巻の外に「五孝伝」一巻、「四八目」上下二巻を加入して、共に八巻と為す」と。其

れ五巻の外に「五孝伝」、「四八目」の二種を加うと謂うは甚だ是なり、惟だ謂えらく「四八目」上下二巻に分くるは、則ち後世に「四八目」の二巻に分くる者に拠りて之を言うも、其の旧に非ざるなり。橋川時雄『陶集版本源流攷』に謂う、「此の本も亦た必ず当に梁以前の物なるべし、集七巻・録一巻、凡そ八巻の者なり」と。則ち「四八目」は巻を分くるに応ぜざるに似たり、巻を分くるを以て以後、益して録一巻を以てす、其の巻数は当に九巻為るべきなり。考うるに陽休之本は凡そ十巻、「四八目」に於いても亦た巻を分けず、後より前を推せば、此の本も亦た巻を分くるに応ぜざるを知る、自づから以(おも)えらく橋川氏の説 最も允たりと)。

郭氏は、梁氏が八巻本に「五孝伝」と「群輔録」が収録されていたと述べるのを肯定的に捉え、橋川氏の録一巻を加える説もまた支持しているが、「群輔録」の構成については、梁氏や現行諸本のごとくに二巻ではなく、一巻のみで構成されていたと考えている。したがって、陽休之本については、その内実を「集九巻、内「五孝伝」一巻、「四八目」一巻、集外序目一巻」と想定している[注]。つまり、陽休之の編纂した十巻本が蕭統本（本集七巻・録一巻）に基づいているのであれば、「集七巻」となり、そこに「五孝伝」一巻、「群輔録」一巻、目録一巻を併せることで、十巻の陽休之本が成ったと考えているのであろう。

この見解は、一定の妥当性を有しており、現行の「群輔録」は、これが収録される九巻と十巻において、九巻に比べて十巻の分量が圧倒的に少なく、加えて、二巻に分けるべき文脈的必然性が不明瞭なのである。

この郭氏の「群輔録」を一巻として捉える観点に即し、「五孝伝」と「群輔録」が少なくとも二巻分を占めるとしても、両作が六巻本に収録されていた蓋然性はやはり低いであろう。仮に収録されていたとすれば、「五孝

伝」と「群輔録」の二巻と録一巻で都合三巻となり、蕭統が参照したであろう六巻本の実質的な集の分量が、三巻ばかりになるためである。また、八巻本の構成は、梁氏の見解を踏まえて、次のように想定することも可能である。

Ⅳ集六巻・「五孝伝」一巻・「四八目」一巻

また郭氏は八巻本について、次のようにも述べている[47]。

此「五孝伝」、「四八目」二種、原非陶氏所撰、『四庫全書提要』弁之甚明。考陽休之十巻本有此二種、而昭明八巻本無之、則知陽氏所拠以編入者、即為此八巻本、而此八巻本者実為伝写本中之竄入偽作者也（此の「五孝伝」、「四八目」の二種は、原(もと)より陶氏の撰する所に非ず、『四庫全書提要』之を弁ずること甚だ明らかなり。考うるに陽休之十巻本に此の二種有り、而るに昭明八巻本に之無ければ、則ち陽氏の拠りて以て編入する所、即ち此の八巻本為るを知るなり、而して此の八巻本なる者は実に伝写本の中の偽作を竄入する者と為すなり）。

この見解は、おそらくは『陶集』提要における「昭明太子去潜世近、已不見「五孝伝」、「四八目」」という主張に影響を受けており、蕭統は「五孝伝」と「群輔録」が収録されていよう八巻本を参照していないために、両作を収録しなかったと捉えている。

そうした可能性はなお考慮しなければならないが、しかし蕭統が六巻本のみを参照し、八巻本を参照していないと限定的に捉えるのは、本当に妥当なのであろうか。そもそも蕭統と陽休之の生年差は僅かに八年であり、八巻本は六巻本と併せて陽氏「序録」に「両本行于世」とあるように、当世に流布していた通行本に過ぎない。一方で蕭統は、陶集序文に、「余愛嗜其文、……、故加搜校、粗為区目（余愛して其の文を嗜（たしな）み、……、故に搜校を加え、粗（ほぼ）に区目を為す）」（巻十）と述べているように、淵明詩文を探し求め、別集の編纂を為している。

さらにいえば、（集五巻の）六巻本のみでは蕭統が八巻本を編纂するには不足している。無論、そうした不足分については、六巻本を分けて編纂したとも、蕭統の居た東宮三万巻以上の蔵書から補ったと考えることも可能である。だが、蕭統のそうした膨大な蔵書量も念頭に据え、梁代以前に八巻本があり、その内実もまたⅣ「集六巻・「五孝伝」一巻・「四八目」一巻」と想定することも可能であることからすれば、その余剰分の一巻分も考慮すべきであるだろう。

以上にみた蕭統と陽休之の発言、彼らの生きた時代の接近、さらには八巻本の構成などを考慮すれば、蕭統は六巻本のみならず、八巻本もまた参照しながら作品を厳選し、その上で蕭統本が編纂されたものと捉えることもできる。

おわりに

本章では、陶集に関わる四庫提要の偽作説について、近年の研究成果を踏まえつつ、改めて検証を加えていった。『群輔録』提要、及び『陶集』提要の偽作説は、確信的な根拠と捉えることはできないものの、否定し得な

い側面もある。本論では、四庫提要の偽作説の根拠の乏しさに留意しつつ、四庫提要の論証の仕方に注目し、改めて偽作説否定の立場を取ることにした。

また梁氏や郭氏は、「五孝伝」と「群輔録」を収録していたであろう八巻本の価値を貶め論じていた通りであり、蕭統は六巻本のみならず、八巻本も参照していたものと捉えることも可能である。こうした想定の余地を排したのは、やはり『四庫全書総目』の影響が多分にあるのであろう。蕭統は淵明詩文を愛好し、「搜校」として淵明の作品を広く探し求め、主体的な態度で編纂していったのではないだろか。それ故に「五孝伝」と「群輔録」を採録しなかったものとも考えられる。蕭統が両作を採録しなかった点は、少なくとも両作の内実の詳細な検討を要するものであり、こうした検討は蕭統の文学観を見直していく上でも、重要な示唆を含んでいる。

もとより、「五孝伝」と「群輔録」を採録していたであろう八巻本、そして、陽休之本、汲古閣本や李公煥本などといった陶集の編者達は、両作を淵明の作として扱って来た。そうした彼らの思い描いていた淵明像というのは、両作を踏まえたものであったことは間違いない。またそれは蕭統の描く淵明像とも、何らかの意味において異なるものであったのであろう。そうであれば、両作を踏まえた淵明像を明らかにすることは、淵明の後世における受容の有り様を考える上でも、決して看過できないものと思われる。

それでは、次章において偽作説否定の立場から、永らく等閑に附されてきた「群輔録」について注目し、この作が淵明にとっていかなる意味を持つのか、検討を加えていくこととしたい。

*1 宋庠「私記」には「「五孝伝」已下至「四八目」、子注詳密、広於他集。惟篇後「八儒」「三墨」二条、此似後人妄加、非陶公本意（「五孝伝」より已下「四八目」に至るまで、子注詳密にして、他集に広し。惟だ篇後の「八儒」「三墨」の二条のみ、此れ後人の妄加するに似たり、陶公の本意に非ず）」（底本巻十に収録の「本朝宋丞相私記」に拠る）と述べられており、宋庠が「群輔録」に部分的に偽作が混じっているとするのは、「群輔録」の跋文に「魯八儒、史並失其名」などとありつつも、この後に「八儒」「三墨」が挙げられていることに拠る。

*2「五孝伝」と「群輔録」を採録しているのは、李公煥本『箋注陶淵明集』（四部叢刊本）、陶澍『靖節先生集』（四部備要本）などであり、近年では袁行霈『陶淵明集箋注』（中華書局、二〇〇三年）、楊勇『陶淵明集校箋』（上海古籍出版社、二〇〇七年）などである。

*3 潘重規氏「聖賢群輔録新箋」（『新亜書院学術年刊』第七期、一九六五年。以下、潘氏の引用については該箋に拠る）、袁行霈氏前掲書（六〇一～六〇二頁）、楊勇氏前掲書（三二三～三二五頁）を参照。また石川忠久氏前掲「史家としての陶淵明」）を参照。

*4 浙江本『四庫全書総目』（下冊、中華書局、一九六五年、一二七三～一二七四頁）に拠る。以下、『陶集』提要の引用は該書に拠る。

*5 前掲『四庫全書総目』（下冊、一一六〇頁）に拠る。以下、『群輔録』提要の引用は該書に拠る。

*6 司馬貞『史記索隠』については後述する。また王応麟は『玉海』巻一二〇・官制「三公宰相」において、「陶

淵明「集聖賢群輔録」、金提主化俗、鳥明主建福、視黙主災悪、紀通為中職、仲起為海陸、陽侯為江海、見『論語摘輔象』」（江蘇古籍出版社、一九八七年、二二〇四頁）と引用している。

*7 蕭統については、『梁書』巻八・昭明太子の伝に「太子以斉中興元年九月生于襄陽。……、三年三月、寝疾。……。四月乙巳薨、時年三十一」（中華書局、一九七三年、一六五～一六八頁。以下、『梁書』の引用は、該書に拠る）とあり、陽休之については、『北斉書』巻四十二・陽休之伝に、「隋開皇二年、罷任、終於洛陽、年七十四」（中華書局、一九七二年、五六四頁。以下、『北斉書』の引用は、該書に拠る）とある。

*8 橋川氏前掲『陶集版本源流攷』「梁八巻本其二」の注（四五一頁）に拠る。

*9 前掲『北斉書』（五六三頁）

*10 なお、「群輔録」の「右孔子四友」以下については、『孔叢子』巻一・論書篇に依拠したものであり、たとえば、『孔叢子』では「文王」の箇所を「周文王」に作り、「禦侮、謂之四鄰。以免乎牖里之害」（四部叢刊初編縮印本〇一八、八頁）とあり、若干の異同がみられるものの、そのほかは概ね同様である。

*11 子夏の発言は、『論語』顔淵篇に「子夏曰、商聞之矣。死生有命、富貴在天。君子敬而無失、……（子夏曰く、商之を聞く。死生 命有り。富貴 天に在り。君子敬して失う無し、……と）」（『十三経注疏 附校勘記』下冊、中華書局、一九七九年、四十七（二五〇三）頁に拠る。以下、十三経の引用に当たっては該書上・下冊に拠る）とみられる。

*12 田部井文雄・上田武氏『陶淵明集全釈』（明治書院、二〇〇一年、三八〇頁）

*13 何孟春の注の引用は、龔斌氏『陶淵明集校箋』（里仁書局、二〇〇七年、四四六頁）に拠る。また袁行霈氏は、「与子儼等疏」の「四友」に子夏を含むものと捉えるとしても、「至「与子儼等疏」称子夏四友之人、或別有

所拠、或記憶之誤（「与子儼等疏」の子夏が四友の人と称されていることについては、別に依拠するところがあったか、記憶の誤まりであろうか）」（前掲『陶淵明集箋注』、五九八頁）と述べて、淵明が別の資料に依拠していた可能性、また誤記の可能性を指摘している。

*14 前掲『十三経注疏 附校勘記』上冊の『尚書正義』巻二（一〇（一二二）頁）に拠る。

*15 なお、偽孔伝の作者については、東晋の梅賾や西晋の皇甫謐とする説、魏の王肅とする説や、あるいはその門人とする説などがある。

*16 前掲『十三経注疏 附校勘記』下冊の『論語注疏』巻二（七（二四六三）頁）に拠る。

*17 石川氏前掲論「史家としての陶淵明」（一二二頁）を参照。

*18 なお、四庫提要の主張は、次に挙げる閻若璩『尚書古文疏証』巻一、第十条（上海古籍出版社、一九八七年、九九～一〇三頁）を参照しながら論じているのであろう。参考までに挙げておく。

『書』有句読、本宜如是、而一旦為晩出古文所割裂、遂改以従之者。『論語』、「『書』云、孝乎惟孝、友於兄弟、施於有政。」三句是也。何晏集解引包咸註云、「孝乎惟孝、美大孝之辞。」是以「『書』云」為一句、「孝乎惟孝」為一句、「友於兄弟」為一句。『晋書』夏侯湛昆弟誥、「古人有孝乎惟孝、友于兄弟。」潘岳「閑居賦」序、「孝乎惟孝、友于兄弟。此亦拙者之為政也。」是其証也。偽作君陳篇者、竟将「孝乎」二字読属上為孔子之言。歴覧載籍所引詩書之文、従無此等句法（『書』に句読有り、本より宜しく是くの如くすべし、而るに一旦にして晩出の古文の割裂する所と為れば、遂に改めて以て之に従う。『論語』に、「『書』に云う、孝なる乎（かな）惟れ孝、兄弟に友たり、有政を施す、と。三句是れなり。何晏の集解は包咸註を引きて云う、「孝乎惟孝は、大孝を美するの辞なり」と。是れ「『書』云」を以て一句と為し、「孝乎惟

孝」を一句と為し、「友於兄弟」を一句と為す。『晋書』夏侯湛の昆弟誥に、「古人に孝なる乎惟れ孝、兄弟に友たりと有り」と。潘岳「閑居賦」序に、「孝なる乎惟れ孝、兄弟に友たり。此れ亦た拙なる者の為政なり」と。是れ其の証なり。偽(いつわ)りて君陳篇を作る者は、竟に「孝乎」の二字を将て読みて上に属(つ)けて孔子の言と為す、載籍の引く所の詩書の文を歴覧するに、従りて此れ等の句法無し)。

*19 前掲の潘氏はまた「宋本有題為「集聖賢群輔録」者、下注曰、「一曰四八目」、然則「集聖賢群輔録」、蓋出於後人所改題、其本名如此也(宋本の題に有りて「集聖賢群輔録」と為すは、下注に、「一に四八目と曰う」と曰う、然らば則ち「集聖賢群輔録」、蓋し後人の題を改むる所に出で、其の本名は此くの如きなり)」とも述べている。

*20 『陶彭沢集』については『漢魏六朝百三名家集』第三冊に拠る。また前掲の汲古閣本、李公煥本などのそれぞれの目録や本集などを参照した。

*21 『史記』(中華書局、一九五九年、二〇四五頁。以下、『史記』の引用は該書による)司馬貞の生卒年については不明であるが、『史記索隠』は開元二十年(七三二年)前後に成書されたものとされている(李梅訓「司馬貞生平著述考」(『安徽師範大学学報』人文社会科学版、第一期、二〇〇〇年を参照)。また司馬貞のいう「又孔安国秘記作禄里」の「秘記」は、詳細は不明であるが、ここでは書名として解した。

*22 「群補録」には、本文のほか、小字二行の割り注が附されており、それについては[ ]内に示すこととする。

*23 本書は『隋書』巻三十三・経籍志、史部・雑伝類に「陳留志十五巻東晋剡令江敞撰」(中華書局、一九七三年、九七五頁。以下、『隋書』の引用は該書に拠る)とみられる。

*24『文選鈔』の引用には『唐鈔文選集注彙存』（上海古籍出版社、二〇〇〇年、巻六二、一、七五五頁）を用いた。

*25 森野繁夫氏『文選雑識』第三冊（第一学習社、一九八二年、二五六頁）に拠る。なお、『唐鈔文選集注彙存』第三冊の巻末に付された引書目録に拠ると、「古賢集目」は本章に挙げた一例しかみられない。

*26「廊」字と「廓」字の異同が魯魚亥豕の相違であることは、小田健太氏「『文選集注』江淹「雑体詩」訳注（八）殷東陽（興矚）仲文」の注釈「③虚廊」（『筑波中国文化論叢』三五号、二〇一六年）を参照。

*27 この点については拙訳「『文選集注』江淹「雑体詩」訳註（六）孫廷尉（雑述）綽」（『筑波中国文化論叢』三三号、筑波大学中国文学研究室、二〇一四年）において指摘したことがある。

*28 章学誠『校讐通義』「弁嫌名第五」の第二条（葉瑛校注『文史通義校注』下巻、中華書局、一九八五年、九七四頁）を参照。

*29 拙訳「四庫全書総目提要　陶淵明集　訳注」（『文教大学国文』四一号、二〇一二年）を参照されたい。

*30 四庫提要の文字の異同に、いち早く注目したのが石川忠久氏であり、陽氏「序録」の「両本」が「群輔録」提要において相違していること、「陶集」提要において「三本」に変更されている点に注目して、「提要は、蕭統のテキストをあくまでも陽休之の時に先行するものと看做そうとしているのである」（石川氏前掲「史家としての陶淵明」、一一九頁）と述べている。陽休之が八巻本と六巻本、蕭統本を参照していることは間違いないが、蕭統と陽休之の生年差が八年しか離れていないという点を重んじているのであろう。

*31 郭氏前掲『陶集考弁』（二五八～二六七頁）を参照。

*32 梁氏前掲『陶集考証』（四六～五五頁）を参照。また橋川氏前掲『陶集版本源流攷』の「二論斉梁隋唐各本之

編次」（四四九～四五三頁・三～五葉）を参照。

*33 南唐本は宋・胡仔『苕溪漁隠叢話』巻四において『西清詩話』を引いて「淵明意趣真古、清淡之宗。詩家視淵明、猶孔門視伯夷也。其集屢経諸儒手校、然有「問来使」篇、世蓋未見、独南唐与晁文元家二本有之」（「淵明 意趣真古にして、清淡の宗なり。詩家 淵明を視ること、猶お孔門の伯夷を視るがごときなり。其の集は屢しば諸儒の手校を経、然るに「問来使」の篇有るも、世蓋し未だ見ざるも、独だ南唐と晁文元家の二本に之有り」）」（廖徳明校点『苕溪漁隠叢話』前集、人民文学出版社、一九八一年、二六頁）などとある。

*34 前掲『隋書』（一〇七二頁）

*35 梁氏前掲『陶集考証』「（一）六巻本―即梁五巻本」に「隋志所謂「梁五巻録一巻」也。陽休之之所見之「一本六巻幷序目、編比顛乱、兼復闕少」者、当即此本、其目録原在集外単行。故梁志僅云五巻。陽休之所見本、則已入録於集為六巻也（隋志の所謂る「梁五巻録一巻」なり。陽休之の見る所の「一本六巻幷序目、編比顛乱、兼復闕少」の者は、当に即ち此の本なるべし、其の目録は原より集外に在りて単行す。故に梁志は僅かに五巻と云う。陽休之の見る所の本、則ち已に録を集に入れて六巻と為るなり）」（四八頁）と述べられている。蕭統本については後述の郭氏の見解に従う。

*36 梁氏前掲『陶集考証』の「（四）昭明太子八巻本」において、「陽休之云、「合序目誄伝、而少五孝伝及四八目。」宋庠云、「有八巻者、即梁昭明太子所撰。合序伝誄等在集前、為一巻。正集次之、亡其録。」似昭明将旧五巻釐為六巻、益以序誄伝為一巻。附原録為一巻。故八巻也（陽休之云う、「序目誄伝を合するも、而して五孝伝と四八目を少く」と。宋庠云う、「八巻なるもの有り、即ち梁の昭明太子の撰する所なり。序伝誄等を合して集前に在り、一巻と為す。正集 之に次ぎ、其の録亡ぶ」と。昭明 旧五巻を将て釐めて六巻と為すに

似たり、益に序誄伝を以て一巻と為し、原録を附して一巻と為す。故に八巻なり）」（四九～五〇頁）と述べられている。

*37 橋川氏前掲『陶集版本源流攷』の「二論斉梁隋唐各本之編次」の「梁六巻本」（四四九頁・三葉）に拠る。

*38 梁氏前掲『陶集考証』「（三）旧八巻本」（四九頁）参照。

*39 橋川氏前掲『陶集版本源流攷』「梁八巻本其一」（四四九頁・三葉）参照。

*40 郭氏前掲『陶集考弁』「八巻本」（二六四頁）参照。

*41 梁氏前掲『陶集考証』「（二）唐五巻本」（四九頁）参照。

*42 梁氏前掲『陶集考証』「一　五孝伝及四八目」（五〇頁）参照。

*43 橋川氏前掲『陶集版本源流攷』の「攷余　一」（五二九～五三三頁・四十三～四十五葉）参照。

*44 橋川氏前掲『陶集版本源流攷』の「二論斉梁隋唐各本之編次」「梁八巻本其一」（四四九頁・三葉）参照。

*45 郭氏前掲『陶集考弁』「一　梁以前本」の「八巻本」（二六四～二六五頁）参照。

*46 郭氏前掲『陶集考弁』「二　宋以前本」の「陽休之本」（二六六頁）参照。

*47 郭氏前掲『陶集考弁』「一　梁以前本」の「八巻本」（二六四～二六五頁）参照。

第二章　陶淵明の「集聖賢群輔録」を巡る一考察

はじめに

本章では、陶淵明の別集巻九から巻十にかけて収録される「群輔録」、一名「四八目」について論じる。その出所については北斉の陽休之が「陶潛集序録」において、次のように述べている。

其集先有両本行於世。一本八巻無序。一本六巻幷序目、編比顛乱、兼復闕少。蕭統所撰八巻、合序目伝誄、而少「五孝伝」及「四八目」。然編録有体、次第可尋。余頗賞潛文、以為三本不同、恐終致忘失。今録統所闕、幷序目等、合為一秩十巻（其の集は先に両本の世に行わるる有り。一本は八巻にして序無し。一本は六巻にして序目を幷するも、編比顛乱して、兼ねて復た闕少あり。蕭統の撰する所の八巻は、序目伝誄を合するも、而も「五孝伝」及び「四八目」を少く。然れども編録に体有り、次第尋ぬべし。余 頗る潛文を賞し、以為らく三本同じからざれば、恐らくは終に忘失を致さんと。今 統の闕く所を録し、序目等を幷して、合して一秩十巻と為す）。

（巻十）

これによると陽休之は、はじめに通行していた陶集の八巻本と六巻本、及び「五孝伝」と「四八目」を欠く蕭統本を参照しながら、十巻本を編纂したことが知られる。従って、「五孝伝」と「四八目」は、蕭統本以前に

通行していた陶集に収められていたことになり、梁啓超氏が八巻本の構成を、集五巻・「五孝伝」一巻・「四八目」二巻と推定して以来、八巻本に収録されていたと捉えるのが定説となっている[*1]。

その後、「四八目」は「集聖賢群輔録」と称されるようになり[*2]、宋・汲古閣本『陶淵明集』、元・李公煥『箋注陶淵明集』、明・何孟春『陶靖節集』などに収録されてきた。清朝に至って『四庫全書総目』から偽作の誹りを受けたものの、偽作説に妥当性が無いことは既に前章で論じた通りである。もとより「群輔録」及び「五孝伝」は、初期の陶集以来、淵明の作として連綿と受け継がれてきたことからすれば、「群輔録」の存在は陶淵明研究において等閑に附すべきでない。それにも関わらず、従来、あまり注目されていないのは、偽作説の影響が多分に考えられようが、そもそも「群輔録」それ自体を如何なる作として捉えるべきかが、よく分からない点にも要因があるだろう。そこで、本章では、まず「群輔録」に関わる先学の見解を通覧しながら、その基本的な性質を捉え直し、「群輔録」を通じて検討されるべき点を見定めることから始める。

一　先行研究通覧

「群輔録」は『四庫全書総目』では子部・類書存目において『聖賢群輔録』二巻として、その提要が纏められており、また同書の子部・類書の王応麟『小学紺珠』十巻に関する提要には、「群輔録」に関わる次のような言及がみられる[3]。

宋王応麟撰。分門隷事、与諸類書略同。而毎門之中、以数為綱、以所統之目繋於下、則与諸類書迴異。蓋仿世伝陶潜「四八目」之例。以数目分隷故実、遂為類事者、別剏一格也（宋の王応麟撰。門を分けて事を隷（したが）えるは、諸（もろもろ）の類書と略（ほぼ）同じきなり。而して毎門の中、数を以て綱と為し、統ぶる所の目を以て下に繋くるは、則ち諸の類書と迴（はる）かに異なれり。蓋し世伝の陶潜の「四八目」の例に仿うなり。数目を以て故実を分隷し、遂に類事を為すは、別に一格を剏（はじ）むるなり）。

王応麟の『小学紺珠』が門類を分けて事柄を並べているのは、一般的な類書と概ね同じであるが、各門類に「数」の綱目が掲げられているのは、一般的な類書と大きく異なっていると述べ、それは、おそらく淵明の「四八目」の体例に倣ったものだろうと説いている。「群輔録」のこの特徴的なスタイルを示すべく、その冒頭の例を挙げよう。なお、士人の姓名から、故実を引用する「右」以下の記述までを一条と看做して、全六十九条毎に、通しで番号を振った。また注文を引用する際には、［　］内に示す。

①明由曉升級［宋均曰、級、等差。政所先後也。］　必育受税役［宋均曰、受賦税及徭役、所宜施為也］　成博受古諸［宋均曰、古諸侯職等也。］　隕丘［一作立］受延嬉［宋均曰、延、長。嬉、興也。主受此録也。］

右燧人四佐。燧人出天、四佐出洛［宋均曰、出天、天所生。出洛、地所生也。］。

②……。

右伏羲六佐。六佐出世［宋均曰、宓戲不及燧人、故増二佐。出世、人所生也。］。

③……。

右黄帝七輔。［九］州選舉、翼佐帝徳。自燧人四佐至七輔、見『論語摘輔象』。

（巻九）

①では「明由」「必育」「成博」「隕丘」ら四人を挙げて、「燧人四佐」と纏められており、これが四庫提要のいわゆる「数」の綱目なのであろう。②「伏羲六佐」、③「黄帝七輔」なども同様である。また③の末尾に「見『論語摘輔象』」とあるように、①②③の記述はいずれも、三国魏の宋均注『論語摘輔象』に基づくものであることが示されている。

「群輔録」は、この三条のような記述が全六十九条にわたって並び、最後の三条の67「晋中朝八達」、68「河東八裴、琅邪八王」、69「太原王、京兆杜、各称五世」のみ、「故老」の伝聞に拠るのを除けば、引用の出典が明示されており、その数は、都合四十種の多きに及ぶ。そこに、清・馬国翰の輯佚などを補い得る佚文が多数含まれている点は留意すべきであろう。なお、注に引用される書物・人物なども概ね劉宋以前のものと判断し

得ることから、潘重規氏が淵明の自注と捉える立場に本論も従うこととする[6]。

さて、淵明の「群輔録」編纂の動機が示唆的に窺えるのが、69に附された跋文である。次に挙げよう。

凡書籍所載及故老所伝、善悪聞於世者、蓋尽於此矣。漢称「田叔・孟舒等十人」及田横「両客」、魯「八儒」、史並失其名。夫操行之難、而姓名翳然、所以撫巻長慨、不能已已者也（凡そ書籍に載る所及び故老の伝うる所、善悪の世に聞こゆる者は、蓋し此に尽く。漢に「田叔・孟舒等の十人」及び田横の「両客」、魯の「八儒」を称するも、史並びに其の名を失す。夫れ操行の難ありて、而して姓名翳然たるは、巻を撫して長慨し、已に已む能わざる所以の者なり）。

（巻十）

書籍や故老の伝承する「善悪」の著名人達は、この書に記し尽くしたであろうと述べる。また漢代に称えられながらも、史書に名の伝わらない「田叔・孟舒等十人」は、『漢書』巻一・高帝紀に次のように記されている[7]。

貫高等謀逆発覚、逮捕高等、并捕趙王敖下獄。詔敢有随王、罪三族。郎中田叔・孟舒等十人自髡鉗為王家奴、従王就獄（貫高等の謀逆発覚して、高等を逮捕し、并びに趙王敖を捕えて獄に下す。詔して敢えて王に随うもの有らば、三族を罪す、と。郎中の田叔・孟舒等十人、自ら髡鉗して王家の奴と為り、王に従いて獄に就く）。

謀反の疑惑により投獄された趙王・張敖を救うため、「田叔・孟舒等十人」は張敖の私的な奴僕を装って随行したと記されているが、田叔と孟舒以外の八人の名は、現行の『漢書』や『史記』の諸注を参照するなどしても不明である。同様に「両客」についても『漢書』巻三十三・田儋伝に、田横の葬儀を終えた後、主君の死に殉じて、「既葬、二客穿其冢旁、皆自剄従之（既に葬り、二客 其の冢の旁を穿ちて、皆な自ら剄して之に従う）」とみられるが[*8]、その具体的な名は不明である。淵明は、このほか儒家の八派を開いた魯の「八儒」などの名が史書で失われてしまったことを述べ[*9]、彼らの「操行之難」、すなわち品行方正の難点を指摘している[*10]。これは、おそらく彼らの中庸ならざる熾烈過ぎた気性を指してのことであり、そうした彼らの姓名が隠れてしまったのは、とても残念なことだと慨歎している[*11]。したがって、「群輔録」は歴史上において数で纏められ、名呼ばれた士人達を蒐集し、彼らの姓名を記し留めておくためのもののようであるが、淵明に「群輔録」を纏めさせた根本的な動機は、よく分からない。その点について清・方宗誠は次のように述べている[*12]。

予謂此或淵明偶以書籍所載、故老所伝、集録之以示諸子、識故実、広見聞、非著述也（予謂（おもえ）らく此れ或いは淵明偶たま書籍に載る所、故老の伝うる所を以て、之を集録して以て諸子に示し、故実を識り、見聞を広げしめんとするものにして、著述に非ざるなり）。

このように、「群輔録」は子供達に故実を学ばせ、彼らの見聞を広げるのを目的としているのであって、「著述」ではないと述べる。この方宗誠の見解は、充分に首肯し得るところであり、その点は後述することとした

い。また既に①②③の例にもみたように、「群輔録」は、およそ引用文で構成されており、その意味においても方宗誠が述べるように、「著述」とは捉え難いのであろう。

ただ、跋文に述べられていたように、淵明にとっての「群輔録」を纏めるという営みは、古人の姓名が明瞭ならざることに対する慨歎を契機としている側面もある。そうであれば、ただに子供達のためだけに編纂されたものと断ずることはできない。淵明自身の問題関心として、淵明が古人を記し留め、彼らの事跡を伝承しようとした必然的意味を捉え直していく必要もあるであろう。また、近年、潘重規氏は「群輔録」に詳細な注釈を附した上で、「読書札録之一斑也（読書札録の一斑なり）」[*13]と述べ、「群輔録」を淵明の読書札記と捉えている。確かに「群輔録」を通じて、淵明の読書の跡を辿ることができる。だが、藩氏は淵明詩文から窺える淵明の日々の読書態度については充分に言及しておらず、加えて、「群輔録」にさらなる考証を加えることで、より具体的に淵明の読書の軌跡とその記述の仕方の有り様を明らかにし得るものとも思われる。

以上、「群輔録」に関わる先学の見解、及びそれを承けて検討すべき点を確認した。それでは、そもそも淵明にとっての読書とは、如何なる営みであったのであろうか。次節では、その点について淵明詩文に即して整理しておくことにしたい。

二　陶淵明詩文における読書

淵明は、読書に対していかなる思いを抱き、いかに表現しているのか。まずは「辛丑歳七月赴仮還江陵夜行

塗口」詩を挙げよう。

閑居三十載　閑居すること三十載
02遂与塵事冥　遂に塵事と冥し
詩書敦宿好　詩書　宿好を敦くして
04林園無俗情　林園　俗情無し
如何捨此去　如何なれば此れを捨てて去り
06遥遥至南荊　遥遥として南荊に至る
叩枻新秋月　枻を新秋の月に叩し
08臨流別友生　流れに臨んで友生と別る

（巻三・全二十句）

三十年にわたってわび住まいを営み、世俗のことから遥かに遠ざかっていた。その生活を営む「林園」は、一切の俗調が排されており、そこでは「詩書」、すなわち『毛詩』と『尚書』、広くいえば儒家の経典類に慣れ親しんでいたとうたっている。第五句以下、そうした生活を捨て去るのに疑問を感じていることが表明されているが、結局、その疑問を解消し得ないままに、一路「南荊」を目指す。また淵明は「帰去来兮辞」において政界と自分が相容れぬことの自覚、加えて、帰郷後の生活を次のようにうたっている。

帰去来兮　　帰りなんいざ
請息交以絶游　　請う　交わりを息めて以て游を絶たん
世与我而相遺　　世と我と相い遺つ
復駕言兮焉求　　復た駕して言に焉をか求めん
悦親戚之情話　　親戚の情話を悦しみ
楽琴書以消憂　　琴書を楽しみて以て憂いを消す
農人告余以春及　　農人　余に告ぐるに春の及べるを以てす
将有事於西疇　　将に西疇に事有らんとす

（巻五）

淵明にとって、政界で受けた憂苦を解消しているのが「親戚」との歓談、そして、「琴書」であった。「琴書」を楽しむこと自体は伝統的な士人像に収まるものであるが[注14]、淵明は「勧農」詩で次のようにもうたっている。

孔耽道徳　　孔は道徳に耽り
42樊須是鄙　　樊須　是れ鄙しとす
董楽琴書　　董は琴書を楽しみて
44田園弗履　　田園を履まず

（巻一・全四十八句）

淵明は、『史記』巻一百二十一・儒林列伝の「下帷講誦、……。蓋三年董仲舒不観於舎園、其精如此（帷を下して講誦す、……。蓋し三年 董仲舒は舎園を観ず、其の精なること此くの如し）」を踏まえながら[*15]、董仲舒の学業に対する精励振りを賞賛する『史記』とは相違して、彼が「琴書」ばかりに耽って、労働を軽視したのを、孔子と併せて非難している[*16]。

淵明は「琴書」を楽しむばかりの伝統的な士人を必ずしも志向してはいない。「読山海経」詩其一では次のようにみられる。

既耕亦已種　既に耕し亦た已に種え
06時還読我書　時に還た我が書を読む
窮巷隔深轍　窮巷 深轍を隔つるも
08頗迴故人車　頗る故人の車を迴らさしむ

（巻四・全十六句）

畑を耕し種を植え、時に読書を楽しむことをうたっている通り、労働の重要性を知る淵明にとって、「琴書」ばかりを弄んでいた董仲舒などは、ともすれば批判の対象にもなったのであろう。さらに「五柳先生伝」を挙げよう。

先生不知何許人也。亦不詳其姓字。……。閑靖少言、不慕栄利。好読書、不求甚解。毎有会意、便欣然

忘食（先生 何許の人なるかを知らざるなり。亦た其の姓字を詳らかにせず。……。閑靖にして言少なし、栄利を慕わず。書を読むを好みて、甚だしくは解するを求めず。毎しば意に会する有れば、便ち欣然として食を忘る）。

（巻六）

「五柳先生」の好む「読書」の態度は、大らかな理解を求める「不求甚解」であり、これは淵明の生きた当時の些末な訓詁の風潮を非難するものとして理解され[17]、さらに川合康三氏は次のように説明している[18]。

自分に引きつけて本を読み、自分が楽しければそれでいいという読書の態度、それは上の「栄利を慕わず」に続くもので、本を読むことが学問を身につけ、世間での名声、利益を得ようといった、読書以外のものを目的とするものではないことを語っている。

こうした五柳先生の「読書」は、あるいは淵明自身が政界では生き得ぬことを自覚し、学ぶことの目的性を拒絶することで獲得された、純然たる快楽と捉えることができる。

さて、このように淵明は「五柳先生伝」に託して、「読書」をおおらかに楽しむことを述べているが、しかしその一方で、仲間と文章の疑問を解き明かす、いわゆる読書談義もまた好んでいた。「移居」詩其一を挙げよう。

隣曲時時来　隣曲　時時に来たり

10抗言談在昔　抗言　在昔を談ず
　奇文共欣賞　奇文　共に欣賞し
12疑義相与析　疑義　相い与に析(ひら)く

（巻二・全十二句）

淵明は素朴な人達が住む南村に移り住み、彼らと一緒に奇抜で見事な文章を歓びながら鑑賞し、「疑義」ある箇所を分析し合っている。「詠貧士」詩其二を挙げよう。

　傾壺絶余瀝　壺を傾くるも余瀝絶え
06闕竈不見煙　竈を闕(うかが)うも煙を見ず
　詩書塞座外　詩書　座外を塞ぎ
08日昃不遑研　日昃くも遑あらずして研す
　閑居非陳厄　閑居　陳厄に非ざるも
10窃有慍見言　窃かに慍(いか)りの言に見(あらわ)るる有り
　何以慰吾懐　何を以て吾が懐いを慰めん
12頼古多此賢　頼(さいわ)いにも古に此の賢多し

（巻四・全十二句）

酒はおろか食料すら事欠く貧しい暮らしを営む中にあって、「詩書」などの書物が身辺に溢れ、その研鑽に余

念が無い。また、「癸卯歳十二月中作与従弟敬遠」詩では、従弟の敬遠とともに俗世と隔たった場所で隠棲生活を営むなかで、次のようにうたっている。

歴覧千載書　歴覧す　千載の書
14 時時見遺烈　時時に遺烈を見る
高操非所攀　高操　攀(よ)ずる所に非ざるも
16 謬得固窮節　謬って固窮節を得たり
平津苟不由　平津　苟しくも由らず
18 栖遅詎為拙　栖遅　詎ぞ拙と為さん
寄意一言外　意を寄す　一言の外
20 茲契誰能別　茲の契り　誰か能く別(たが)わん

（巻三・全二十句）

「千載」に継承された書物を次から次へと眺めやり、そのはしばしに古人の遺業をみていく。そして、自分は彼らの「高操」には比肩し得ないものの、はずかしながら彼らを通じて我が「固窮節」を感得したとうたっている。さらに「感士不遇賦」を挙げよう。

奉上天之成命　上天の成命を奉じ

師聖人之遺書　聖人の遺書を師とす
発忠孝於君親　忠孝を君親に発し
生信義於郷閭　信義を郷閭に生ず

（巻五）

天帝の定めた運命に従い、聖人の残した書物を「師」として仰ぎ、君親に「忠孝」を尽くして、郷里で「信義」を獲得することを願っている。

以上を要するに、淵明にとっての読書は、彼の生それ自体の支えであり、また隠棲者として生きる上での指標を追求していくものであった。ここから淵明の飽くなき学問への欲求が窺えると同時に、彼が古人に対して限りない尊崇の念を抱いていたことが分かる。次に「群輔録」を通じて、淵明の読書の対象となる書物、及び彼の読書と記述の有り様の軌跡を辿っていくこととしよう。

三　陶淵明の読書の軌跡

淵明が読み、学んでいた書物は、「群輔録」において「見『（書名）』」や「『（書名）』・（人名）曰・称」などの形で明示されており、示される書物・人物を便宜的に四部分類に即して整理すれば、次の通りである[19]。なお、注釈者の引用がみられる場合は（　）内に示し、選者や書名で確証を得ない場合は〔　〕内に示す。

経部：『毛詩』㉓、『尚書』⑤（孔安国・鄭玄）⑩⑭、鄭玄『尚書大伝』⑥（鄭玄）⑯⑰、『春秋左氏伝』④⑨㉒㉓㉔㉕㉖、『論語』⑫⑮⑱（鄭玄・賈逵）⑳㉕㉗（包咸）㉘、『論語摘輔象』①（宋均）②（宋均）③（宋均）、『孔叢子』㉙

史部：劉向『戦国策』⑪、司馬遷『史記』⑲㉖㉛㉜、班固『漢書』㉖㉝㉞㉟㊲㊳㊴、趙岐『三輔決録』㊹59 63、〈韋彪〉『京兆旧事』㊻、『三君八俊録』55、『北海耆旧伝』61、『済北英賢伝』62、嵇康『高士伝』㊵㊶、周斐『汝南先賢伝』㊱、張璠『漢紀』㊺60、〈謝承〉『後漢書』⑭㊵㊷㊸㊹[*20] 53 54 55 61、王沈『魏書』65、皇甫謐『高士伝』㉞『逸士伝』⑪、司馬彪『続漢書』㊼㊽㊾58、張勃『呉録』66、〈王隠・虞預・朱鳳〉『晋書』65、〈陸機・干宝・曹嘉之・鄧粲〉『晋紀』64、孔衍『春秋後語』㉛、『荀氏譜』60、『周氏譜』㊱、『崔氏譜』㉞、江敞『陳留志』㉞、袁宏〈『竹林名士伝』〉65、戴逵〈『竹林七賢論』『竹林七賢伝』〉65、孫統「讃」65

子部：『尸子』⑪㉑㉚

集部：『楚辞』⑬、張衡「東京賦」㊷、邯鄲淳「紀碑」56、孔融⑯、王粲「於童賦」66、曹丕「令」57、曹叡「甄表狀」56 57 61、呉質「答東阿王書」㉔、杜預『女戒』㊿『善文』㊸㊾、張載「登成都白菟楼詩」㊴、左思㊳、王敦66、董京「董威賛詩」㉗、劉琨「重贈盧諶詩」㉒

さて、一見して明らかなように、史部に属する書物が圧倒的に多い。もとより「群輔録」は、数で纏められた士人達を蒐集していくものであるから当然といえば当然であるが、改めて実感されるのは淵明の史書への関

心の高さだろう。また「群輔録」には佚書も多くみることができ、たとえば、経部の『論語摘輔象』は、宋・王応麟が『玉海』の執筆材料に用いており、明・孫瑴『古微書』、清・趙在翰『七緯』などが佚書復元の材料として利用してきた。だが、近年では偽作の誹りを受けたこともあってか、充分に利用されているとはいい難い。ここでは、「群輔録」を通じて淵明の読書態度と記述姿勢に検討を加え、改めて「群輔録」の資料的価値の一端についても見直していく。まずは『春秋左氏伝』に依拠する例を挙げよう（以下、傍線は稿者による）。

⑦ 讙兜　共工　鯀　三苗

右四凶。

⑧ 蒼舒　隤敳　檮戭　大臨　尨降　庭堅　仲容　叔達

右高陽氏才子八人。斉聖広淵、明允篤誠。天下之民、謂之八凱。

⑨ 伯奮　仲堪　叔献　季仲　伯虎　仲熊　叔豹　季貍

右高辛氏才子八人。忠粛恭懿、宣慈恵和、天下之民、謂之八元。従四凶至此、悉見『左伝』季文子辞。

（巻九）

続けて、『春秋左氏伝』文公十八年の記述を挙げる[*21]。

昔高陽氏有才子八人。蒼舒・隤敳・檮戭・大臨・尨降・庭堅・仲容・叔達、斉聖広淵、明允篤誠。天下之民、謂之八愷。高辛氏有才子八人。伯奮・仲堪・叔献・季仲・伯虎・仲熊・叔豹・季貍、忠粛共懿、宣

慈恵和。天下之民、謂之八元。……。舜臣堯、賓于四門、流四凶族、渾敦・窮奇・檮杌・饕餮、投諸四裔、以禦螭魅。是以堯崩而天下如一、……、去四凶也。故『虞書』数舜之功曰、慎徽五典、五典克従、無違教也。

先に⑧を確認しておけば、『左伝』の「蒼舒」「隤敳」らの人名を抜き出し、「右」以下において「高陽氏有才子八人」の「有」字を省略し、「斉聖広淵……」を含めて四つの語句を引いており、⑨もまた同様である。ここには、淵明の丁寧な記述姿勢がみて取れる。ただし、⑦の「四凶」の「讙兜」「共工」「鯀」「三苗」については、『左伝』において「渾敦」「窮奇」「檮杌」「饕餮」とある点で大きく異なっている。これは、おそらくは『尚書』の記述に従ったのであろう。『左伝』に「虞書」とあり、これは『尚書』舜典を指し、そこに「流共工于幽洲、放驩兜于崇山、竄三苗于三危、殛鯀于羽山。四罪而天下咸服」とあるように[*22]、⑦と同様に「共工」「驩兜」「三苗」「鯀」が挙がっていることがそれを示す[*23]。

淵明は⑦の記述の底本として『左伝』を明示しつつも、その姓名については、必ずしも一書のみを用いて記してはいない。これは次の例においても顕著に窺える。

⑪雄陶　方回　続牙　伯陽　東不訾［或云不識］　秦不虛［或云不空］　霊甫

右舜七友。並為歴山雷沢之遊。『戦国策』顔斶云、「堯有九佐、舜有七友」、而『尸子』只載雄陶等六人不載霊甫。皇甫士安作『逸士伝』云、「視其友、則雄陶・方回・続牙・伯陽・東不訾・秦不空・霊甫之徒、

是為七子。」与『戦国策』相応（右舜の七友。並に歴山雷沢の遊を為す。『戦国策』顔斶に、「堯に九佐有り、舜に七友有り」と云うも、而るに『尸子』は只だ雄陶等六人を載せて霊甫を載せず。皇甫士安『逸士伝』を作りて云う、「其の友を視れば、則ち雄陶・方回・続牙・伯陽・東不訾・秦不空・霊甫の徒、是れ七子と為す」と。『戦国策』と相い応ず）。

（巻九）

『戦国策』の顔斶の発言は、斉策四にそのままみられるが、ここに舜の「七友」の姓名は記されていない。また皇甫謐『逸士伝』から「七友」の姓名を引用するが、「秦不空」については本文の「秦不虚」と相違して、注の「或云不空」と一致している。さらにまた「『尸子』只載雄陶等六人不載霊甫」については、『太平御覧』巻八一・皇王部六の「帝舜有虞氏」に次のようにみられる[*24]。

『尸子』曰、……、舜事親養兄為天下法、其游也得六人、曰雒陶・方回・続牙・伯陽・東不識・秦不空、皆一国之賢者也。

ここでは、淵明が述べるように「六人」とあり、「霊甫」は載らない。しかも⑪の注の「或云不識」「或云不空」と同様に作っている。そして、『漢書』巻二十・古今人表の「上下智人」には、「雒陶」「続身」「柏陽」「東不訾」「秦不虚」の名が纏まってみられ[*25]、ここでは⑪の本文と同様に「秦不虚」に作っている。従って、淵明は⑪を記述するに当たって、『戦国策』や『尸子』、『逸士伝』の三書を用いており、またそれのみらず『漢書』

も参照していたのであろう。ここに、淵明の様々な書物を入念に読み込む態度、加えて、異説も漏らさずに記し残しておこうとする周到な記述姿勢を窺うことができるのである。

さて、淵明は引用例の多さからも、とくに班固の『漢書』を熟読していたようである。ただ留意したいのは、淵明が読み、学んでいた『漢書』は、現行本の『漢書』とは大きく異なっている点である。たとえば、「群輔録」の㉝において張良・蕭何・韓信を挙げて、「右三傑。漢高祖曰、「此三人、人之傑也。」見『漢書』」と劉邦の発言を引用するのは、既に潘重規氏が指摘するように、現行『漢書』巻一・高帝紀の「三者皆人傑」に当たるのであろう[*26]。だが、主旨は同じとはいえ、字句は殆ど一致しない。また次のような例もみられる。

㊴平阿侯王譚　成都侯王商　紅陽侯王章　曲陽侯王根　高平侯王逢時

右並以元后弟同日受封、京師号曰五侯。並奢豪富侈、招賢下士。谷永・楼護皆為賓客。時人為之語曰、「谷子雲之筆札、楼君卿之脣舌。」言出其門也。見『漢書』。張載詩曰、「富侈擬五侯」。

（巻九）

㊴は現行の『漢書』巻九十二・游俠伝において、「与谷永俱為五侯上客、長安号曰、「谷子雲筆札、楼君卿脣舌。」言其見信用也」とあり[*27]、類似した一文をみることができるが、かなり文字の異同がある。こうした「群輔録」における『漢書』と現行本の異同は、少なくとも淵明の記述姿勢の杜撰を意味するものではないと考える。それは以下のような理由に拠る。

王念孫は『読書雑志』志四、「漢書」巻十四の「谷子雲筆札、楼君卿脣舌」の条で、「案此本作「谷子雲之筆

札、楼君卿之唇舌。」後人刪去両「之」字、則句法局促不伸（案ずるに此れ本「谷子雲之筆札、楼君卿之唇舌」に作る。後人両「之」字を刪去すれば、則ち句法局促にして伸びず）」と推定し、その根拠として様々な文献を挙げている[*28]。そのうちの『芸文類聚』巻三十三に引かれる『漢書』游俠伝の例をみてみよう[*29]。

婁護、字君卿……。与谷永俱為五侯上客、長安号曰、「谷子雲之筆札、婁君卿之唇舌。」

武徳七（六二四）年に上表された『芸文類聚』では、「之」字の有無については「群輔録」の㊴と一致するものの、そのほかは現行の『漢書』と殆ど同様である。だが、建安五（二〇〇）年に上表された荀悦『前漢紀』巻二十四の孝成帝皇帝紀では、次のように記されている[*30]。

時谷永与斉人楼護俱為五侯上客。……。時人為之語曰、「谷子雲之筆札、楼君卿之唇舌。」言其甚見信用也。

ここでは、王念孫の指摘している「之」字の有無のほか、「時人為之語」についても「群輔録」と一致している。このことからすれば「群輔録」には、『漢書』の古い姿、あるいは散逸した漢代の歴史的記録が残されている蓋然性が高いものといえる。

以上、一部の例を通じてではあるが、「群輔録」には、淵明が様々な書物を渉猟し、古人の姓名や故実を丁寧

に引用していく記述姿勢が窺われた。とりわけ、⑪における雄陶ら「舜七友」については、『戦国策』、『尸子』、『逸士伝』、『漢書』の四書を読み比べた上で、その人数を定め、姓名を判断していく周到振りである。ここに、従来、主として「五柳先生伝」などで結ばれてきた淵明の読書のイメージとも異なる態度がみて取れる。また淵明が古人に対して尊崇の念を抱いていたことは既に第二節にみた通りであるが、この「群輔録」から窺える古人の姓名を正しく、余すことなく伝承しようとする淵明の記述姿勢は、彼の古人に抱く尊崇の念が表現的営みとして顕れたものと理解できるのである。

四　「集聖賢群輔録」編纂の動機

以上のように、「群輔録」は引用文ばかりで構成されており、その資料的価値については充分に認められようが、文学的興趣は希薄といわざるを得ない。それではなぜ、淵明はこのようなものを纏めたのであろうか。既に第一節でも示した通り、方宗誠は「集録之以示諸子、識故実、広見聞」と述べて、「群輔録」は子供達の知識・見聞を広げるのを目的とすると説明していた。方宗誠の見解は、淵明自らも内省しつつ、子の儼らに向けて訓戒を述べた「与子儼等疏」を踏まえることで、より明確化することができる。その冒頭では次のように述べられている。

告儼・俟・份・佚・佟。天地賦命、生必有死。自古賢聖、誰能独免。子夏有言曰、「死生有命、富貴在天。」

四友之人、親受音旨。発斯談者、将非窮達不可妄求、寿夭永無外請故耶（儼・俟・份・佚・佟に告ぐ。天地 命を賦し、生に必ず死有り。古より賢聖、誰か能く独り免れん。子夏に言有りて曰く、「死生に命有り、富貴は天に在り」と。四友の人、親しく音旨を受く。斯の談を発する者、将た窮達は妄りに求むべからず、寿夭は永く外に請うこと無き故に非ずや）。

（巻八）

ここにおいて、淵明が敬慕しながら取り上げる子夏、あるいは孔子の「四友」は、「群輔録」にも次のように挙げられている。

㉘徳行：顔淵　閔子騫　冉伯牛　仲弓　言語：宰我　子貢　政事：冉有　季路　文学：子游　子夏

右四科。見『論語』（右四科。『論語』に見ゆ）。

㉙顔回　子貢　子路　子張

右孔子四友。……。子曰、吾有四友焉。自吾得回、門人益親、是非胥附乎。……。見『孔叢子』（右孔子の四友。……。子曰く、吾に四友有り。吾の回を得てより、門人益ます親なり、是れ胥附に非ずや。……。『孔叢子』に見ゆ）。

（巻九）

また同疏には「但恨隣靡二仲、室無萊婦。抱茲苦心、良独内愧（但だ恨むらくは隣に二仲靡し、室に萊婦無きを。茲の苦心を抱き、良に独り内に愧ずるのみ）」ともあり、淵明は後漢の蔣詡、字は元卿に自己を比擬しつ

つ、彼のごとくに求仲と羊仲のような友人を得られなかった寂しさを述べているが、「二仲」についても「群輔録」に次のようにみられる。

㊶求仲　羊仲

右二人不知何許人、……、蔣元卿之去兖州、還杜陵、荊棘塞門。舍中有三径、不出、唯二人従之游。時人謂之二仲。見嵇康『高士伝』（右の二人 何許の人なるかを知らず、……、蔣元卿の兖州を去りて、杜陵に還り、荊棘もて門を塞ぐ。舍中に三径有りて、出でずして、唯だ二人のみ之に従いて游ぶ。時人 之を二仲と謂う。嵇康『高士伝』に見ゆ）。

（巻九）

加えていえば、淵明が子供達に向けて訓戒を述べるのは、「群輔録」の編纂に直接繋がっていくような価値観に由来していると捉えられる。改めて、第一節に挙げた「群輔録」の跋文を想起されたい。淵明は、漢代に称賛された「田叔・孟舒等十人」や「両客」らの名が史書で失われ、姓名が隠れてしまった理由を、彼らの「操行之難」にあるものと捉えていた。それは、淵明の品行方正を重視する価値観が窺われるものと理解され、「操行」の二字もまた同疏において次のようにみえる。

済北泛稚春、晋時操行人也。七世同財、家人無怨色。『詩』曰、「高山仰止、景行行止。」雖不能爾、至心尚之。汝其慎哉。吾復何言（済北の泛稚春、晋時の操行の人なり。七世財を同じくするも、家人に怨色無し。

『詩』に曰く、「高山は仰がれ、景行は行わる」と。爾る能わずと雖も、至心に之を尚べ。汝　其れ慎めよ。
吾　復た何をか言わん）。

泛稚春を「操行」正しき人物として称えており、七代にわたって財産を共有して、家族は「怨色」なく暮らしたという。

このようにみていくと、方宗誠が指摘するように、淵明は子供達の知識・見聞を広げるのを目的として、さらにいえば、子供達に向けて、古人に学んで、必ずや「操行」を保ち続けて生きよ、と願いを込めて、「群輔録」を編纂した可能性は充分にあるだろう。だが、淵明に「群輔録」を纏めさせたのは、それのみであろうか。淵明は「贈羊長史」において次のようにうたっている。

愚生三季後　愚　三季の後に生まれ
02 慨然念黄虞　慨然として黄虞を念う
得知千載外　千載の外を知るを得るは
04 正頼古人書　正に古人の書に頼るのみ
賢聖留余跡　賢聖　余跡を留め
06 事事在中都　事事　中都に在り
豈忘遊心目　豈に心目を遊ばすを忘れんや

08 関河不可踰　関河　踰ゆべからず
九域甫已一　九域　甫(はじ)めて已に一となり
10 逝将理舟輿　逝くゆく将に舟輿に理(うず)めんとす
聞君当先邁　君　当に先に邁(ゆ)くべしと聞くも
12 負痾不獲俱　痾を負いて俱にするを獲ず

（巻二・全二十四句）

夏・殷・周の後に生まれ落ち、慨然として黄帝や虞舜の時代に思いを馳せる。謙譲の一人称である「愚」を用いているのは、そうした古の時代に多大な敬意を払ってのことであるだろう。第三句以下では、千載に隔たる時代の背景を知るには古人の書物に頼るほかない。「賢聖」の名残を留める長安へ向けて「心目」を遊ばせているが、現実には関所や河を越え得ないとうたっている。淵明はさらに続ける。

路若経商山　路　若し商山を経なば
14 為我少躊躇　我が為に少しく躊躇せよ
多謝綺与角　多謝す　綺と角と
16 精爽今何如　精爽　今何如
紫芝誰復採　紫芝　誰か復た採る
18 深谷久応蕪　深谷　久しく応に蕪るるなるべし

駟馬無貰患　駟馬　患を貰(おきの)ること無し
20貧賤有交娯　貧賤　娯しみに交うる有り
清謡結心曲　清謡　心曲に結ぶ
22人乖運見踈　人乖きて運踈んぜらる
擁懐累代下　懐いを擁す　累代の下
24言尽意不舒　言尽きて意舒びず

（巻二）

道すがら商山を経たならば、綺里季と角里先生に挨拶して欲しいと、また第十七句以下は諸家が指摘するように四皓の歌を踏まえており、四皓、及び彼らの歌は、皇甫謐『高士伝』巻中に次のようにみえる[21]。

四皓者、皆河内軹人也、或在汲。……、而作歌曰、「莫莫高山、深谷逶迤。曄曄紫芝、可以療飢。唐虞世遠、吾将何帰。駟馬高蓋、其憂甚大。富貴之畏人、不如貧賤之肆志」（四皓は、皆 河内軹の人なり、或いは汲に在り。……、而して歌を作りて曰く、「莫莫たる高山、深谷 逶迤たり。曄曄たる紫芝、以て飢を療すべし。唐虞の世遠く、吾 将た何くにか帰らん。駟馬 高蓋、其の憂い甚だ大なり。富貴の人を畏れしむるは、貧賤の志を肆(ほしいま)にするにしかず」と）。

淵明はこれを踏まえて第十七句から十八句で、「紫芝」で飢えをしのぐものも居なくなり、商山の「深谷」の

荒れ果てた様を想起する。第十九句から二十句においては、四皓と同様に「駟馬」を飼う豪勢な暮らしの尽きぬ憂い、「貧賤」な暮らしにこそ、楽しみが得られるものと共感的に表現している。ここから、四皓の精神を継ぐ淵明の意志がみて取れる。末聯では、四皓と遥かに隔たった時代を生きるなかで、彼らへの思いは充分には述べ尽くせないと結んでいる。そして、四皓については「群輔録」においても次のようにみえる。

㉞園公［姓園名秉……。見『陳留志』］　綺里季　夏黄公［姓崔名廓……。見『崔氏譜』］　角里先生

右商山四皓。当秦之末、俱隠上洛商山。皇甫士安云、「並河内軹人。」見『漢書』、及皇甫謐『高士伝』（右商山の四皓。秦の末に当たり、俱に上洛の商山に隠る。皇甫士安云う、「並に河内軹の人」と。『漢書』、及び皇甫謐『高士伝』に見ゆ）。

（巻九）

淵明は、『漢書』や『高士伝』、さらには『陳留志』や『崔氏譜』といった様々な書物に四皓の姿を追い求め、それを記し留めようとしている。

改めていえば、淵明が「群輔録」において書物を渉猟し、地道に古人を記し連ねていった原動力は、確かに子供達の存在が大きかったのであろう。だが、より重要なのは子供達にどうか古人に学んで欲しいと願う根底に、淵明自身の古人に対する限りない尊崇の念、古の世界への果てない憧憬の念があったに違いないことである。ここに、淵明が「群輔録」編纂のために書物と向き合い、「群輔録」を通じて古人を伝承しようとした根本的な志向がある。

淵明は古の継承者として古人を後世に繋いでいくために、そして、淵明自身の抱える古を生き得ない歎きを越えゆくために、「群輔録」の編纂営為を通じて、書物に棲む古の住人達を蒐集し、彼らを網羅的に自己に刻み込んでいくことで、書物に広がる古の世界を、自己の内面世界に再構築していったのである。

おわりに

本章では、陶淵明の「群輔録」について、読書札記と捉える先学の見解に注目し、淵明の読書の根源的なところから捉え直した。淵明は、政界に馴染めず、貧しい暮らしを営む中で、読書を楽しみ、学問的研鑽に励んでいた。淵明は読書を通じて自己の貫くべき生き方を、より豊かな生を獲得していったといえる。「群輔録」では、淵明が愛読していた様々な書物をみることができ、淵明の書物を入念に読み込む態度、加えて、古人を正しく伝承しようする記述姿勢が窺われた。そして、こうした淵明の「群輔録」編纂の根底には、淵明の古人への尊崇の念、古の世界への憧憬の念が底流していたのである。

ところで、より広い観点から淵明と古人ないしは古の世界との関係を見るならば、注意すべき作品として、「詠二疏」詩、「詠荊軻」詩、「詠三良」詩、また「詠貧士」詩七首などの詠史詩、さらにまた「擬古」詩九首などがある。淵明に内面化された古人、あるいは古人の生、そして、古の世界は、こうした作品においてはいかに表現されるのであろうか。次章において、この疑問を解決すべく、歴史を題材とする作品に注目しながら検討を進めていく。

*1 梁氏前掲書において、「陽休之所謂「八巻無序」者也。此本殆於五巻外加入「五孝伝」一巻、「四八目」上下二巻、共為八巻。故休之拠此而言五巻本之「闕少」也（陽休之の所謂る「八巻にして序無」き者なり。此の本は殆ど五巻の外に「五孝伝」一巻、「四八目」上下二巻を加入して、共に八巻と為す」（四九頁）と述べられている。併せて、郭紹虞氏の『陶集考弁』（『照隅室古典文学論集』上巻、上海古籍出版社、一九八三年）などを参照されたい。

*2 潘重規氏は「聖賢群輔録新箋」において、「群輔録」の「本名」は「四八目」と述べ、「集聖賢群輔録」の名は宋代以降の文献に頻出することを指摘しており（『新亜書院学術年刊』第七期、一九六五年）、楊勇氏『陶淵明集校箋』（上海古籍出版社、二〇〇七年）、袁行霈氏『陶淵明集箋注』（中華書局、二〇〇三年）なども潘重規氏の説を支持している。

*3 前掲『四庫全書総目』（一一一五一～一一五二頁）参照。

*4 ①②③の訓読については以下に示す。なお、「〔九〕州選舉」は、底本では「九」字を欠くが、清・趙在翰輯『七緯』（鍾肇鵬・蕭文郁点校、中華書局、二〇一二年、七七七頁）などに拠って補った。

明由は升級を暁らかにす［宋均曰く、級は、等差なり。政の先後する所なり。］ 必育は税役を受く［宋均曰く、賦税及び徭役を受け、宜しく施為すべき所なり。］ 成博は古諸を受く［宋均曰く、古の諸侯の職等なり。］ 隕丘は［一に立に作る］延嬉を受く［宋均曰く、延は、長なり。嬉は、興なり。主に此の録を受くなり。］右燧人の四佐。燧人は出天し、四佐は出洛す［宋均曰く、出天は、天の生ずる所なり。出洛は、

地の生ずる所なり。]。②……。右伏羲の六佐。六佐は出世す[宋均曰く、宓戯は燧人に及ばず、故に二佐を増す。出世は、人の生ずる所なり。]。③……。右黄帝の七輔。〔九〕州に選舉せられて、帝徳を翼佐す。燧人の四佐自り七輔に至るまで、『論語摘輔象』に見ゆ。

*5『論語摘輔象』は、『隋書』経籍志に直接はみえないが、同書巻三十二の経部・讖緯之書類に「孝経内事一巻」とあり、その注に残された梁代の書誌情報に「論語讖八巻宋均注」（いずれも前掲『隋書』九四〇頁）とみえ、本書もまたそのうちに含まれていたものとされる（安居香山・中村璋八氏『緯書の基礎的研究』国書刊行会、一九八六年所収の中村璋八氏「論語緯（讖）」、四六二～四六四頁参照）。

*6ただし、楊勇氏は前掲『陶淵明集校箋』において「宋庠「私記」曰、「『五孝伝』已下至『四八目』、子注詳密、広於他集。」則李本中注文、其為原来有之者乎。或云此為自注、不知何拠）（宋庠「私記」に曰く、「『五孝伝』より已下の『四八目』に至っては、子注詳密にして、他集よりも広し」と。則ち李本中の注文、其れ原来より之有る者と為すか。或いは此れ自注為りと云うも、何れに拠るかを知らず）」（三二五頁）と述べるように、宋・宋庠はおそらくは淵明自注の立場を採っており、楊勇氏はそれに疑義を呈している。なお、注で引用されるのは、『論語摘輔象』の宋均のほか、王粲の賦や王敦の言、また曹叡「甄表狀」、『北海耆旧伝』、『後漢書』、『崔氏譜』、『陳留志』である。それぞれの編纂時期として、『北海耆旧伝』は『隋書』巻三十三・経籍志、史部・雑伝類の「四海耆旧伝一巻」（九七四頁）に当たるものとされており（『二十五史補編』第四冊、中華書局、一九八六年所収の姚振宗『隋書経籍志考証』、五三四一頁参照）、編者は不明であるが、「耆旧伝」などの人物伝が後漢から東晋期に流行したものであることは、永田拓治氏「『汝南先賢伝』の編纂について」（『立命館文学』六一九号、二〇一二年）を参照されたい。『後漢書』は本文については先学が指

摘するように謝承『後漢書』が有力である。たとえば、54に「太尉掾汝南細陽范滂字孟博」とあり、范曄『後漢書』巻六十七・党錮伝では「范滂字孟博、汝南征羌人也」（中華書局、一九六五年、二二〇四頁。以下、『後漢書』の引用は該書に拠る）と異同をみることができ、ここに附された李賢注では謝承『後漢書』を引いて、「汝南細陽人也」（前掲『後漢書』、二二〇四頁）とあるのと一致する。「群輔録」の注の『後漢書』は、53「八顧［『後漢書』無劉儒、有范滂」（巻九）、54「八及［『後漢書』無范滂、有翟超」（巻九）、55「八厨［『後漢書』無劉翊、有劉儒」（巻九）とあり、「八顧」に「范滂」を、「八及」に「翟超」を、「八厨」に「劉儒」を挙げるのは、范曄『後漢書』と一致し、謝承『後漢書』は確認し得ない。しかし范曄『後漢書』の参照一本もまた謝承のそれであるから、范曄『後漢書』に基づく後世の注釈とは断じ得ない。また『陳留志』は『隋書』巻三十三・経籍志、史部・雑伝類に「陳留志十五巻東晋剡令江敞撰」（九七五頁）と著録されており、『崔氏譜』は『隋書』経籍志にみえないが、裴松之が『呉書』諸葛亮伝の注に引用している。潘重規氏はこうした注の諸本も含め、「陶公読書採穫之作……無一非晋以前人書（陶公の読書の採穫の作……一として晋以前の人の書に非ざる無し）」（前掲「聖賢群輔録新箋」）と述べている。

*7『漢書』（中華書局、一九六〇年、六七頁）に拠る。以下、『漢書』の引用は該書に拠る。

*8前掲『漢書』（一八五二頁）に拠る。

*9「八儒」は『韓非子』巻十九・顕学篇に「子張」「子思」「顔氏」「孟氏」「漆雕氏」「仲良氏」「孫氏」「楽正氏」（王先慎撰、鍾哲点校『韓非子集解』（新編諸子集成・第一輯、中華書局、一九九八年、四五六頁）とみられ、「群輔録」の跋文の後にも「八儒」及び「三墨」の記述がみられるが、この二条は宋・宋庠が「此似後人妄加、陶公非本意（此れ後人の妄加するところに似たり、陶公の本意に非ず）」（巻十）と述べて以来、偽

作と捉えるのが定説である。

*10「夫操行之難」は、底本では「失操行之難（操行を失するの難あり）」に作っているが、李公煥本などの諸版、袁行霈氏前掲『陶淵明集箋注』（五九五頁）などの校訂に従う。

*11「田叔・孟舒等十人」などについては、淵明自身も彼らの姓名が不明瞭であるのを慨歎している以上、彼らを敬慕していたことは明らかである。ここに、淵明の一側面として、しばしば説かれる熾烈な気性の一端が窺われる。

*12 方宗誠『陶詩真銓』。引用は『中華大典――魏晋南北朝文学分典』（鳳凰出版社、二〇〇七年、一〇〇七頁）に拠る。

*13 潘重規氏前掲「聖賢群輔録新箋」を参照。なお、石川忠久氏は前掲「史家としての陶淵明」において「五孝伝」と「群輔録」を「史伝類」（一一二頁）に位置づけており、こうした観点については併せて斉益寿氏『黄菊東籬耀古今――陶淵明其人其詩散論――』の第三章「陶淵明的儒者襟抱与独立精神」（国立台湾大学出版、二〇一六年）を参照。ただ、「群輔録」はその「四八目」、あるいは「集聖賢群輔録」という称からも窺えるように、目録的であり、史書や人物伝を企図するものとも捉え難い。

*14 李善は「帰去来兮辞」の「琴書」に注して、劉歆「遂初賦」の「玩琴書以滌暢（琴書を玩びて以て滌暢す）」（『文選』巻四十五）を挙げている。

*15 前掲『史記』（三一二七頁）

*16 一海知義氏「陶淵明の孔子批判」（初出は『文学』四五号、岩波書店、一九七七年。後に『一海知義著作集』第二冊、藤原書店、二〇〇八年に所収）を参照。

*17 明・楊慎『丹鉛雑録』巻一の「読書不求甚解」（『丹鉛雑録・庸盦筆記』国学基本叢書四百種・二四七、台湾商務印書館、一九六八年、八頁）などを参照。

*18 川合康三氏「かくありたい我れ――「五柳先生伝」型自伝」（『中国の自伝文学』、創文社、一九九六年、八二頁）参照。

*19 資料の分類については、基本的には『隋書』経籍志に従うこととし、併せて姚振宗『後漢書芸文志』、潘重規氏前掲「聖賢群輔録新箋」などを参照しながら、時代順に並べることとした。

*20 ㊹は底本では、「見『漢書』、及『決録』」（巻九）とあるが、潘重規氏前掲「聖賢群輔録新箋」、楊勇氏前掲『陶淵明集校箋』（三四九頁）などに拠って、「『後漢書』」の誤りと判断した。

*21 前掲『十三経注疏 附校勘記』下冊の『春秋左伝正義』巻二十（一五九（一八六一）頁～一六〇（一八六二）頁）に拠る。

*22 前掲『十三経注疏 附校勘記』上冊の『尚書正義』巻三（一六（一二八）頁）に拠る。

*23 「鮌」字と「鯀」字の異同は『広韻』（『校正宋本広韻』芸文印書館、一九六七年、二八二頁）を参照し、異体字の関係にあるものと判断した。

*24 『太平御覧』（台湾商務印書館、一九七四年、五〇七頁）

*25 顔師古は『漢書』巻二十・古今人表の「秦不虚」に「雒陶已下皆舜之友也。……。並見『尸子』（雒陶より已下 皆な舜の友なり。……。並に『尸子』に見ゆ）」（八七九頁）と注している。なお、「群輔録」の⑪が「雄陶」に作り、『尸子』や『漢書』が「雒陶」に作るのは魯魚亥豕の異同で、おそらくは「雒」字に作るのが正しい。王念孫は『読書雑志』志七、「墨子第一」の「王孫雒」の条で「隷書雄字或作雄、与雒相似、故雒譌為

雄（隷書の雄字　或いは雄に作る、雒と相い似たり、故に雒もて譌りて雄と為す）」（江蘇古籍出版社、一九八五年、五六〇頁）と説明している。

*26 前掲『漢書』（五六頁）

*27 前掲『漢書』（三七〇七頁）

*28 前掲『読書雑志』（三八一～三八二頁）

*29 前掲『芸文類聚』（五七九頁）に拠る。

*30『前漢紀』（四部叢刊初編縮印本、〇〇六冊、一七一頁）

*31『高士伝』（四部備要、台湾中華書局、一九七二年、七葉）

第三章　陶淵明の伝体「詠史」詩

はじめに

現在においてもなお看過できない価値を有する何焯や沈徳潜、劉熙載などの発言をみてみると、「詠史」詩については概ね二つに分けて捉える傾向がある。すなわち、表現対象の歴史人物の事跡を概括的にうたっていくものと、故事や歴史人物に借りて自己の胸中を吐露するものとである。こういった「詠史」詩を二つに分けて捉える観点は、近年の「詠史」詩研究においてもみられはするが、まだまだ示唆的段階に止まっている。もとより詩歌作品を類型化するという試みは、あくまでもその表層を捉えたものに過ぎない。だが、類型的な表現様式を踏まえてこそ、個々の継承関係や表現の独自性がより明瞭に浮かび上がってくるであろうことも言を俟たない。

本章、及び次章では、「詠史」詩を二つに分けて捉える観点から、陶淵明の「詠史」詩についても捉え直し、さらに淵明詩全体の歴史を題材とするうたと比較検討していく。本章では、その手始めとして「詠史」詩に対する清朝諸家の見解、及び近年の研究成果を纏めることから始める。その上で淵明の「詠史」詩における歴史人物の事跡が概括的にうたわれる作品に限定して検討を加え、その特色を明らかにしたい。

一　「詠史」詩における二つのスタイル

「詠史」詩を二つに分けて捉える見解は、何焯『義門読書記』巻四十六「文選詩」にみられる。そこでは「詠史者、不過美其事而詠嘆之、隠括本伝、不加藻飾、此正体也。太沖多攄胸臆、乃又其変也。叙致本事能不冗不晦。以此為難（詠史とは、其の事を美して之を詠嘆するに過ぎず、本伝を隠括し、藻飾を加えざるは、此れ正体なり。太沖は多く胸臆を攄（の）ぶ、乃ち又其の変なり。叙して本事に致るも能く冗（むだ）あらずして晦からず。此れを以て難しと為す）」と述べられている[*]。何氏は「詠史」詩を「正体」と「其変」に分けて捉えており、「正体」については歴史人物の事跡を称えて詠嘆し、本伝を概括して、飾り立てないものとする。このような「詠史」詩の源流に当たるのが、次に挙げる班固の「詠史」詩である。

三王德弥薄　三王の徳　弥いよ薄く
02惟後用肉刑　惟の後　肉刑を用う
太倉令有罪　太倉の令罪有り
04就逮長安城　逮に就く　長安の城
自恨身無子　自ら恨む　身に子無く
06困急独煢煢　困急して独り煢煢たり
小女痛父言　小女　父の言を痛む

08 死者不可生　死者　生くべからず
上書詣闕下　上書して闕下に詣り
10 思古歌鶏鳴　古を思いて鶏鳴を歌う
憂心摧折裂　憂心　摧けて折裂し
12 晨風揚激声　晨風　激声を揚ぐ
聖漢孝文帝　聖漢の孝文帝
14 惻然感至情　惻然として至情に感ず
百男何憒憒　百男　何ぞ憒憒たる
16 不如一緹縈　一緹縈に如かず

（『古詩紀』巻三[*2]）

『漢書』巻二十三・刑法志に拠ると[*3]、斉の太倉長の淳于意は罪を得て長安に送られることとなった。その際、意は娘らに男児を産まなかったことを後悔していると告げる。その発言に心を傷めた五女の緹縈は、長安に向かい孝文帝に上書して父の罪を我が身に代えて許しを請う。天子は緹縈の行動に感銘を受け、これを機に身体の部分を削ぎ落とす肉刑を廃止するに至った。市川桃子氏がこのうたを評して、「全体としては、史書の記載を五言に直して簡潔に述べたもの、という感じはまぬがれえない」と述べるように[*4]、班固自身の独創性は希薄であるが、史実に依拠しながら韻文として概括していくのは、いかにも史家たる班固らしい表現態度と看做すことができる。また、興膳宏氏が「班固は恐らくこの一首の中に、時の過酷な刑罰に対する諷喩を籠めているの

であろうが、それはあくまでも隠微な底流として感知されるにとどまり、彼の自己主張が露わに示されることはない」と述べるように[5]、作中において社会的批判の辞句が明示されている訳ではないが、班固が緹縈を取り上げ、それを称賛していることそれ自体に、班固が時勢の厳罰を間接的に批判しているものと推察させるのである。

次に何氏が「其変」と称する左思の「詠史」詩其二を確認すると次のようにうたわれている。

鬱鬱澗底松　鬱鬱たり　澗底の松
02 離離山上苗　離離たり　山上の苗
以彼径寸茎　彼の径寸の茎を以て
04 蔭此百尺条　此の百尺の条を蔭う
世胄躡高位　世胄　高位を躡み
06 英俊沈下僚　英俊　下僚に沈む
地勢使之然　地勢　之をして然らしむ
08 由来非一朝　由来　一朝に非ず
金張籍旧業　金張　旧業に籍り
10 七葉珥漢貂　七葉　漢貂に珥う
馮公豈不偉　馮公　豈に偉からず

12白首不見招　白首まで招されず

（『文選』巻二十一）

諸家が指摘するように、谷底に鬱蒼と茂る「松」は左思自身を、山頂に生える「苗」は世襲の貴族官僚が喩えられている。その「苗」は、一寸足らずの脆弱な「茎」であるにも拘わらず、「山上」ないし政界に蔓延し、それは「百尺」にも及ぶ「条」を備える「松」、そして、「英俊」を覆い隠している。第九句の「金張」は、漢代の有力者の金日磾と張湯のことであり[*]、彼らの子孫はたとえ無能であったとしても、門閥社会においては容易に官僚となり得る。それに対して第十一句において、さらにもう一人挙げられる馮唐は、有能であるにも拘わらず、それに相応しい待遇を受けなかった[*]。左思が「詠史」詩として「金張」や「馮公」を挙げたのは、左思の生きた時代の無能な貴族官僚を「金張」の子孫らに比擬し、左思自身の不遇と有能さを「馮公」に比擬して、その憤懣やるかたない胸中を表すためであろう。

さて、一見して明らかなように、左思は班固と同様に「詠史」と題しつつも、班固のように特定の歴史人物の事跡を辿ることはしない。何氏が左思詩を評して「多攄胸臆」と述べるのは、左思自身の憤懣が直接的に露呈されていることに拠る。もっとも何氏の発言において、「此正体也。太沖多攄胸臆、乃又其変也」と述べて、左思の「詠史」詩が班固の「正体」のごとき「詠史」詩から、「変」化したものとするのは疑問視せざるを得ない。この点については先に引用した興膳氏が、左思の先輩詩人らにおいて、たとえ「詠史」詩と題せずとも、様々な歴史人物に託して自己の胸中を吐露していく作品が多数みられることから[*]、左思「詠史」詩の淵源を班固のそれのみに限定することは、近視眼的であると説く通りであろう。

袁枚『随園詩話』巻十四をみてみると次のように述べられている[8]。

詠史有三体。一借古人往事、抒自己懐抱、左太沖之「詠史」是也。一為隠括其事、而以詠嘆出之、張景陽之「詠二疏」、盧子諒之「詠蘭生」是也。一取対仗之巧、義山之「牽牛」対「駐馬」、韋荘之「無忌」対「莫愁」是也（詠史に三体有り。一に古人往事に借りて、自己の懐抱を抒ぶ、左太沖の「詠史」は是れなり。一に為に其の事を隠括し、以て詠嘆して之を出だす、張景陽の「詠二疏」、盧子諒の「詠蘭生」は是れなり。一に対仗の巧を取り、義山の「牽牛」に「駐馬」を対にし、韋荘の「無忌」に「莫愁」を対にするは是れなり）。

袁氏は「詠史」詩を三つに分けて捉えており、第一に左思詩について、古人・往事に借りて自己の胸中を吐露するものとし、第二に張協「詠史」詩、盧諶「覧古」詩について、疎広・疎受などの特定の人物の事跡を概括し、それに詠嘆するものとする。この二つは、何氏のいわゆる「正体」の「其事而詠嘆之、隠括本伝」や「其変」の「多攄胸臆」という見解と殆ど変わるものではない。しかも三つ目に挙げた李商隠の「馬嵬」詩二首其二などにしても、楊潔瓊・許華偉氏が「袁枚所説的第三体、実際只是談写作技巧（袁枚の説くところの第三のスタイルについては、実際、ただ技巧性について論じたものに過ぎない）」と説くように[9]、対偶表現に注目しながら言及しているのは、「詠史」詩全般に着眼した見解とは看做し難い。ただし、袁氏は、何氏のように「詠史」詩の源流には拘っておらず、「詠史」詩のスタイルの相違として分けている点は留意してよいだろう。

なお、沈徳潜は『古詩源』巻七のなかで、「太沖詠史、不必専詠一人、専詠一事、詠古人而己之性情俱見、此千秋絶唱也。後惟明遠、太白能之（太沖の詠史は、必ずしも専ら一人を詠じ、専ら一事を詠ぜず、古人を詠じて己の性情俱に見わる、此れ千秋の絶唱なり。後に惟だ明遠・太白のみ之を能くす）」と述べており[11]、これは明らかに「一人一事」を対象とする班固などの「詠史」詩と比較して、左思のそれを「千秋絶唱」と賞賛している。沈氏の見解において、左思の「詠史」詩の特徴を述べたのは的確であるが、そもそも「詠史」詩を二つに分けて捉えるべきだとすれば、それとの対比で作品の良し悪しまで言及するのは、些か公平さを欠く。もとより「一人一事」を表現対象とする「詠史」詩の作者が、自己の「性情」を直接的に表すことを主眼に据えていたとは考え難いのではないだろうか。さらにまた劉熙載は『芸概』詩概篇において、「左太沖『詠史』似論体、顔延年『五君詠』似伝体（左太沖の『詠史』は論体に似て、顔延年の『五君詠』は伝体に似る）」と説いて[12]、左思詩を「論体」と称し、顔延之の「五君詠」詩を「伝体」と称している。それを次に挙げよう。

阮公雖淪跡　阮公　跡を淪（かく）すと雖も
02 識密鑑亦洞　識は密やかにして鑑も亦た洞し
沈酔似埋照　沈酔　照を埋むるに似て
04 寓辞類託諷　寓辞　託諷に類す
長嘯若懐人　長嘯して人を懐うが若く
06 越礼自驚衆　礼を越えて自ら衆を驚かす

物故不可論　物故は論ずべからず
08 途窮能無慟　途窮まれば能く慟むこと無からん

（『文選』巻二十一）

『宋書』顔延年伝に拠ると、顔延之はかねてから劉湛や殷景仁らが要職を占めているのが我慢ならず、劉湛に向かって、自分が出世しないのは貴様の小間使いだったせいだと述べた。こうした非礼を切っ掛けとして、顔延之は永嘉太守に左遷され、「五君詠」詩を制作するに至ったとされる[*13]。

劉氏のいわゆる「伝体」のこのうたでは、第三句の「沈酔」が、李善引くところの臧栄緒『晋書』に「籍拝東平相、不以政事為務、沈酔日多（籍 東平相に拝せられるるも、政事を以て務めと為さず、沈酔すること日びに多し）」（『文選』巻二十一）とみえ、末句についても『魏氏春秋』に「籍時率意独駕、不由径路、車跡所窮、輒慟哭而返（籍時に率意に独り駕して、径路に由らず、車跡の窮まる所あれば、輒ち慟哭して返る）」（『文選』巻二十一）とあるのを踏まえている。したがって、顔延之の「五君詠」詩は、左思のごとく自己の胸中を直接的に吐露するものではない。班固の作と同じように歴史人物の事跡が概括的にうたわれている。だが、「五君詠」詩に顔延之の鬱屈した情がみてとれようこと、このうたを読んだ劉湛と義康から、「以其辞旨不遜、大怒（其の辞旨の不遜なるを以て、大いに怒る）」と激昂を買ったことから窺える[*14]。

以上を踏まえて楊潔瓊・許華偉氏の「詠史」詩の解説をみてみることにしたい[*15]。

「詠史」詩的基本構成是叙事和抒情、二者的側重点不同、是「詠史」詩論体、伝体之分的依据。這様、「隠

括本伝、不加藻飾」一類、我們可称之為伝体。這一体式、叙事大於抒情。注重対史伝内容進行剪裁、一般是一人一事。詩人思想感情、議論褒貶只寓於叙事・詠嘆中、一般不直接表露。而「直攄胸臆」一類、我們可称之為論体。這一体式、抒情成分大於叙事、叙述史実而不拘於一人一事、注重的是借古人古事抒発自我感慨和懐抱（「詠史」詩の基本的な構成は叙事と抒情であり、二者の重点とするところの違いが、「詠史」詩における論体と伝体の分け方の根拠である。［何焯のいわゆる］「隠括本伝、不加藻飾」の類については、伝体と称し得る。このスタイルでは叙事性が抒情性よりも強い。伝記を取捨選択することを重視しており、大体は一人一事を扱う。詩人の思想・感情、議論・褒貶はただ叙事・詠嘆に託されており、大体は直接的に感情を明かにすることはしない。そして［何焯のいわゆる］「直攄胸臆」の類については、論体と称し得る。このスタイルにおいては抒情性が叙事性よりも強く、史実を叙述するにしても一人一事に拘らず、古人・古事に借りて自己の感慨・抱負を表すことを重視している）。

両氏のいうように、班固や顔延之などの伝体の「詠史」詩は、歴史の一人一事を対象として、その事跡が概括的にうたわれており、自己の感慨を端的に詠嘆し、自己の主張するところは甚だ暗示的である。一方で左思の論体の「詠史」詩は、一人一事に拘らず、自己の抱負や憤懣が直接的にうたわれている。

以上、先学の「詠史」詩を二つに分けて捉える見解を確認した。本章では、これを踏まえて陶淵明の「詠史」詩について検討を加えていく。淵明の「詠史」詩には、楊潔瓊・許華偉氏らのいわゆる伝体と論体の両者がいずれもみられるが、本章では、班固を源流とし、とりわけ長い伝統を有する伝体の「詠史」詩に注目していく。

二　陶淵明の伝体「詠史」詩（1）

陶淵明の伝体の「詠史」詩は、「詠二疏」詩、「詠荊軻」詩、「詠三良」詩である。「詠史」の定義は[*16]、『文選』巻二十一の詠史、王粲「詠史」詩の題下の呂向注に次のようにみられる。

謂覧史書、詠其行事得失、或自寄情焉（史書を覧て、其の行事得失を詠じ、或いは自ら情を寄するを謂うなり）。

呂向は、史書を閲覧し、その行事得失を詠じるものや、みずからの感慨を寄せるものとする。この定義は分かり易いものであり、充分に首肯されるものである。ただ、このような観点からすれば、淵明詩においては「飲酒」詩其二や「擬古」詩其二なども充分に「詠史」の要件を満たしている[*17]。つまり、「詠史」の定義は曖昧とならざるを得ないのであるが[*18]、当該三首を「詠史」として拘るべきと考えるのは、その詩題に「詠」字を含んでおり、しかも「二疏」「三良」「荊軻」とあるように、淵明の歴史人物を対象化する意図が明確に示されているためである。

それではまず淵明の「詠二疏」詩からみていくことにしたい。

大象転四時　大象は四時を転じ

02 功成者自去　功成る者は自ら去る
借問衰周来　借問す　衰周より来
04 幾人得其趣　幾人か其の趣を得たると
遊目漢廷中　遊目す　漢廷の中
06 二疏復此挙　二疏　復た此の挙あり
高嘯返旧居　高嘯して旧居に返り
08 長揖儲君傅　長揖す　儲君の傅
餞送傾皇朝　餞送　皇朝を傾け
10 華軒盈道路　華軒　道路に盈つ
離別情所悲　離別　情の悲しむ所なるも
12 余栄何足顧　余栄　何ぞ顧みるに足らんや
事勝感行人　事の勝れるは行人を感ぜしめ
14 賢哉豈常誉　賢や　豈に常に誉められんや
厭厭閭里歓　厭厭たり　閭里の歓
16 所営非近務　営む所は近き務めに非ず
促席延故老　席を促して故老を延(まね)き
18 揮觴道平素　觴を揮いて平素を道う

問金終寄心　問う　金は終に心を寄せんやと
20清言暁未悟　清言もて未だ悟らざるを暁(さと)す
放意楽余年　意を放ちて余年を楽しみ
22遑恤身後慮　身後の慮を恤(うれ)うるに遑あらんや
誰云其人亡　誰か云う　其の人亡ぶと
24久而道弥著　久しくして道弥(いよ)いよ著らかなり

（巻四）

既に先学が指摘するように、淵明「詠二疏」詩は、概ね『漢書』巻七十一・疏広伝に依拠してうたわれている[19]。二疏の事跡について『漢書』疏広伝に拠りながら、その概要を三つに分けてみると、①疏広、字は仲翁は、若くして学問を好み、召されて博士・太中大夫に拝せられ、皇太子が立ってより太傅となる。彼の兄の子受は賢良の科に挙げられて、後に少傅に拝せられる。②在職して五年ばかり、広は受に向けて退任の意志を告げ、受もこれに従う。退任する際には朝廷を挙げて宴席が開かれた。③帰郷して後、日々に豪勢な酒宴を開き、子孫には争いや堕落の元となる財産を残さないようにした。

以上の二疏の事跡と淵明「詠二疏」詩における二疏の事跡を比較してみると、淵明は第五句から十四句において二疏の退任の様子を、第十五句から二十二句においては彼らの故郷での暮らし振りをうたっている。このことから淵明の二疏の事跡に対する関心は、とりわけ②と③にあることが窺える。また、淵明に先行して二疏を対象とした張協「詠史」詩があるが、ここで問題としたいのは、②の一幕の張協と淵明の二疏の事跡に対す

る概括の仕方である。まずは『漢書』疏広伝の次の一文をみてみよう[*20]。

公卿・大夫・故人・邑子設祖道、供張東都門外、送者車数百両、辞決而去。及道路観者皆曰、賢哉二大夫。或歎息為之下泣（公卿・大夫・故人・邑子は祖道を設けて、供を東都門外に張り、送者の車は数百両、辞決して去る。道路に及んで観る者は皆な曰く、賢なるかな 二大夫、と。或るひとは歎息して之が為に下泣す）。

公卿・大夫・友人・郷里の人々は送別の道を設け、帳を長安の東都門、及びその外側にまで張り、送別するものは数百人に及び、誰しもが「賢哉二大夫」と称賛し、あるものは涙を禁じ得なかったことが記されている。この一幕について、張協と淵明は次のようにうたっている。

朱軒曜金城　朱軒　金城を曜し
06 供帳臨長衢　供帳　長衢に臨む
餞送傾皇朝　餞送　皇朝を傾け
10 華軒盈道路　華軒　道路に盈つ

（『文選』巻二十一、張協「詠史」、全二十句）

（陶淵明「詠二疏」）

先に挙げた張協は第三・四句において、公卿達が長安の立派な「東都門」に集まって、「祖二疏（二疏に祖けせり）」とうたった上で、多くの朱塗りの車が集まった「金城」を起点に、帳が街を貫く道の両脇に張り巡らされるものとして、長安一体の煌びやかな様子がうたわれている。それに対して淵明は、二疏の送別のために「皇朝」の公卿達が「傾」、すなわちこぞって出て行き、それ故に「道路」に人々が「盈」ち溢れるものとして、盛り上がるようなイメージでうたっている。張協と淵明は、いずれも二疏の送別の一幕に注目し、いずれも対偶表現が採られている。淵明が表現対象を二疏とする点において張協に影響を受けたとすれば、淵明は張協に対する挑戦として、このように表現したものと捉えられる。

なお、井上一之氏は③の一幕の「放意楽余年、遑恤身後慮」（第二十一・二十二句）に注目し、残された人生を意のままに楽しみ、自分の死後まで煩うことがあろうかというのと、『漢書』における二疏が子孫に対して「吾豈老諱不念子孫哉（吾れ豈に老諱して子孫を念わざるか）」と告げて[*21]、子孫の堕落を深刻に懸念したからこそ、財産を揮ったのが相違するものと指摘している。井上氏はこの相違について、「本詩執筆の直接の動機は、二疏が「揮金」したことにあり、淵明はこれを「家族のためでなく、自分のために余生を楽しむ」ことと解釈し[*22]」たものと結論づけた。またこれが淵明自身の志向に連なったものであることを説いている。井上氏の指摘に拠りつつ、淵明詩における「揮金」の志向がうたわれる一例を挙げれば、次の通りである。

傾家持作楽　家を傾けて持して楽しみを作し
10竟此歳月駛　此の歳月の駛するを竟(お)えん

有子不留金　子有るも金を留めず
12何用身後置　何ぞ用いん　身後の置を

（「雑詩」其六、全十二句）

淵明が「家」を「傾」けてまで、財産を惜しみなく使うのは、走り去っていく一回限りの人生においてこそ歓娯を尽くすためである。それ故に、自己の死後のことまで気遣わず、子孫のために財産を残さないのである。つまり、『漢書』における二疏は子孫のために財産を揮ったのに対し、淵明詩における二疏は自己のために財産を尽くしたものとして、淵明自身の志向に引きつけながら表現されていることが分かる。つまり淵明は伝体「詠史」詩において、歴史書を踏まえつつも、それを全面的に踏襲している訳ではない。淵明自身の独自性を出しながら、表現しようとする意図が窺えるのである。

続けて淵明の「詠荊軻」詩を挙げれば次の通りである。

燕丹善養士　燕丹は善く士を養う
02志在報強嬴　志は強嬴に報ゆるに在り
招集百夫良　百夫の良を招集し
04歳暮得荊卿　歳暮に荊卿を得たり
君子死知己　君子は己を知るものに死す
06提劍出燕京　劍を提げて燕京を出づ

素驥鳴広陌　素驥　広陌に鳴き
08 慷慨送我行　慷慨して我が行を送る
雄髪指危冠　雄髪　危冠を指し
10 猛気衝長纓　猛気　長纓を衝く
飲餞易水上　飲餞す　易水の上
12 四座列群英　四座　群英を列ぬ
漸離撃悲筑　漸離　悲筑を撃ち
14 宋意唱高声　宋意　高声を唱う
蕭蕭哀風逝　蕭蕭として哀風逝き
16 淡淡寒波生　淡淡として寒波生ず
商音更流涕　商音　更ごも流涕し
18 羽奏壮士驚　羽奏　壮士驚く
心知去不帰　心に知る　去りて帰らざるも
20 且有後世名　且つは後世の名有らんと
登車何時顧　車に登りて何れの時にか顧みん
22 飛蓋入秦庭　蓋を飛ばして秦庭に入る
凌厲越万里　凌厲として万里を越え

24 逶迤過千城　逶迤として千城を過ぐ
　図窮事自至　図窮まりて事自ら至る
26 豪主正怔営　豪主　正に怔営たり
　惜哉剣術疏　惜しいかな　剣術疏にして
28 奇功遂不成　奇功　遂に成らず
　其人雖已没　其の人　已に没すと雖も
30 千載有余情　千載に余情あり

荊軻の事跡について『史記』巻八十六・刺客列伝に拠りつつ[*23]、その概要を大きく四つに分けてみると、①荊軻は、衛の出身で若くして文武をよくし、邯鄲などを旅しながら燕に移り住んだ。犬殺しであり、筑の名手でもある高漸離と親交を結ぶ。この頃、燕の太子丹が秦から逃亡し、帰国する。丹は嬴政に恨みを抱きつつも、六国を撃破した秦に太刀打ちできずにおり、加えて秦の樊将軍が燕に亡命してくる。これに頭を抱えた丹は、田光先生に相談したところ、荊軻が推薦された。②丹は荊軻に謙って、政への報復を頼み込む。それを引き受けた荊軻は、樊将軍の首と燕の地図を持参して、政の信頼を得る計画を立て、鋭利な匕首を手に入れ、政への報復の準備を整える。③友を待っていた荊軻に対し、丹は出立を急かす。荊軻は丹に激怒しつつも、出立を決める。彼は白装束に身を包んだ賓客、漸離らに易水のほとりに見送られ、秦に旅立った。④荊軻は秦に至り、政に接見する機会を得る。政に樊将軍の首を捧げ、燕の地図を開きつつ、匕首を突き付けるも、事は失敗に終

わる。

さて、淵明「詠荊軻」詩では第五句から第二十四句において、荊軻の出立から壮行の一幕がうたわれており、このことからすれば淵明の荊軻の事跡に対する関心は、③に集約していることが窺える。②の嬴政刺殺の算段、④の嬴政暗殺の一幕などに至っても、その関心は希薄である。また、③の一幕をうたった「雄髪指危冠」（第九句）は、明らかに『史記』刺客列伝の「髪尽上指冠（髪は尽く上りて冠を指す）」を踏まえており[*24]、「漸離撃悲筑」（第十三句）なども、同伝の「高漸離撃筑（高漸離は筑を撃つ）」を踏まえ[*25]、また淵明に先行して荊軻を対象としている阮瑀「詠史」詩においても次のようにみられるものである[*26]。

漸離撃筑歌　漸離　筑を撃ちて歌い
08悲声感路人　悲声　路人を感ぜしむ

（全十句）

淵明が『史記』における「筑」を「悲筑」とした点には、淵明の抱く漸離の悲愴なイメージが窺えるものであるが、恐らくは阮瑀詩における漸離の「悲声」に影響を受けてのことであろう。このように淵明の「詠荊軻」詩は『史記』や阮瑀「詠史」詩の語彙を直接的に踏まえているのであって、その発想は必ずしも新奇とはいえない。さらにまた第二十七句において「惜哉剣術疏」とうたって、荊軻に対する感慨を述べるにしても、同伝において魯句践が「惜哉其不講於刺剣之術也（惜しいかな　其の刺剣の術を講ぜざるや）」というのと殆ど変わるものでない[*27]。

しかし、その一方で③の一幕において「心知去不帰、且有後世名」（第十九・二十句）として、荊軻自身の「心」情描写にまで及んでいるのは、淵明の独創と看做すことができる。もとより「有後世名」は、『史記』においても司馬遷が「自曹沫至荊軻五人……不欺其志、名垂後世、豈妄也哉（曹沫より荊軻の五人に至るまで……其の志を欺かず、名を後世に垂る、豈に妄ならんかな）」と称するのと発想を同じくしようが[*28]、淵明の場合は、荊軻自身が不朽の名声の獲得を期していたものとうたっているのである。

そして、先の淵明「詠二疏」詩における二疏は、部分的に『漢書』の二疏と相違しつつ、淵明自身の志向がうたわれたものであった。それと同様に、淵明「詠荊軻」詩にうたわれる不朽の名声への志向は、淵明詩においても次のようにみられる。

九十行帯索　九十にして行きて索を帯にし
06飢寒況当年　飢寒　当年に況うるも
不頼固窮節　固窮の節に頼らずんば
08百世当誰伝　百世　当（は）た誰か伝えん

生有高世名　生きては世に高き名有り
10既没伝無窮　既に没しては無窮に伝えん
不学狂馳子　学ばざるや　狂馳の子

（「飲酒」其二、全八句）

12直在百年中　直だ百年の中に在るのみなるを

（「擬古」其二、全十二句）

「飲酒」詩其二では、「固窮節」をよりどころとして、「百世」に名を伝えんこと、「擬古」詩其二では、二君に仕える潔しとしなかった田子泰、字は田疇の「窮」まること「無」い名声の獲得を称えており、それとは異なる「狂馳子」が目先の「百年中」に囚われていることを批判的にうたっている。したがって、淵明が「詠荊軻」詩において、荊軻自身の心情描写として「有後世名」とうたっているのは、その実、淵明自身の志向を荊軻に代弁させているものと看做すことができる。

なお、「詠荊軻」詩においても、「詠二疏」詩と同じように技巧的表現がみられる。

凌厲越万里　凌厲として万里を越え

24逶迤過千城　逶迤として千城を過ぐ

「凌厲」は激しく勢いのある様の双声語で、「逶迤」はうねうねと曲がりくねった様の畳韻語である。こういった双声畳韻語を対偶とするのは、高木正一氏の調査に拠れば、陸機の得意とするところであり、淵明のやや後輩に当たる謝霊運などの詩人に頻用されたものである[29]。そうだとすれば、淵明「詠荊軻」詩における当該一聯もそういった美文志向の時代の風潮に合致した対偶表現と看做すことができる。しかしながら、その下においては、殆ど同義の「越」字と「過」字を対偶の関係とし、「万里」「千城」を対偶としていわゆる数対を作っ

ており、これは建安詩人や左思などの無骨な力強さをも有している。

このように淵明「詠二疏」詩や「詠荊軻」詩において技巧的表現がみられるのは、淵明が歴史人物の事跡を、より詩的に構築していこうとしているものと捉えてよいだろう。伝体の「詠史」詩は、史実に依拠するばかりで、叙情性が希薄であることから、批判的に捉えられることもあった。改めていえば、沈徳潜が「太沖詠史、不必専詠一人、専詠一事、詠古人而己之性情俱見、此千秋絶唱也」と述べるのは、伝体の「詠史」詩との比較において左思「詠史」詩を絶賛するものである。確かに、淵明のそれも、「一人一事」を対象としており、史実に依拠して、歴史人物の事跡を概括的に表現しているという点において叙事的ではある。だが、淵明の場合は、叙情よりも寧ろ歴史人物の事跡をいかに叙事していくかという点に関心が窺えるのである。加えて、淵明自身の「性情」は、歴史人物に代弁させることで顕れている。

三　陶淵明の伝体「詠史」詩（２）

最後に淵明の「詠三良」詩をみていく。淵明に先行して三良を表現対象とした詩人に、阮瑀や王粲、曹植らがいるのは周知のことに属していよう。丁福保氏は次のように述べている[*30]。

班固詠史、拠事直書、特開子建・仲宜詠三良一派（班固の「詠史」詩は、事に拠って直書す、特に子建・仲宜の詠三良の一派を開けり）。

丁氏は、王粲と曹植の「詠三良」の一派は、班固「詠史」詩の流れを汲み、史実に依拠して、そのまま記すものとしている。この発言は、何焯が「詠史」詩の「正体」の特徴として、本伝を概括して、飾り立てないものとする見解に影響を受けたものであろう。もっとも三良の事跡の纏まった資料はみられず、史実に依拠しているのか厳密には不明である[31]。したがって、淵明「詠三良」詩についても史実との比較は試み難いのであるが、少なくとも王粲らの「詠史」詩の流れを汲むものとして、彼らの影響を受けているであろうことは間違いない。また、従来の淵明「詠三良」詩の研究では、晋宋革命の実際と照合するものが中心であるが[32]、本節では淵明「詠三良」詩における先輩詩人達からの継承のあり方、とりわけ曹植からの影響が窺えることを明らかにすることにしたい。

そもそも王粲「詠史」詩と曹植「三良」詩には顕著な相違をみることができ、これは従来の研究においてしばしば指摘されるところである[33]。まずは王粲「詠史」詩の冒頭四句を確認すると次のようにうたわれている。

自古無殉死　古より死に殉うこと無し
02 達人共所知　達人　共に知れる所なり
秦穆殺三良　秦穆　三良を殺す
04 惜哉空爾為　惜しいかな　空しく爾為せり

（『文選』巻二十一、全二十句）

「古」から殉死の規定はないにも拘わらず、穆公が三良を死に殉わしめたものとして、穆公が批判的にうたわれている。これは、次に挙げる『詩経』秦風の「黄鳥」篇に冠せられた毛序の穆公批判に合致したものとされる[*34]。

黄鳥、哀三良也。国人刺穆公以人従死、而作是詩也（黄鳥は、三良を哀れむなり。国人 穆公の人を以て死に従わしむるを刺る、而して是の詩を作るなり）。

秦の民衆が、穆公の三良を殉死させたこと、それを刺るものとして説かれおり、これに対応する『春秋左氏伝』文公六年には次のようにみられる[*35]。

秦伯任好卒、以子車氏之三子、奄息・仲行・鍼虎為殉、皆秦之良也。国人哀之、為之賦「黄鳥」。君子曰、秦穆之不為盟主也宜哉。死而棄民。先王違世、猶詒之法、而況奪之善人乎（秦伯任好卒す、子車氏の三子奄息・仲行・鍼虎を以て為に殉せしむ、皆な秦の良なり。国人 之を哀しみて、之が為に「黄鳥」を賦す。君子曰く、秦穆の盟主為らざるや宜(むべ)なるかな。死して民を棄つ。先王は世を違(さ)りて、猶お之に法を詒(のこ)す、況んや之が善人を奪わんや）。

穆公が覇業をなし得なかったのは、民衆を捨て去って、善人を奪い去ったからという。一方で曹植「三良」

詩では次のようにうたわれている。

功名不可為　功名　為すべからざるも
02忠義我所安　忠義　我が安んずる所なり
秦穆先下世　秦穆　先に下世して
04三臣皆自残　三臣　皆な自ら残(そこな)う

（『文選』巻二十一、全十四句）

「功名」は自己の努力で認められるものではないが、「忠義」を尽くすことこそ、「安」んじ、求めるところであり、穆公が逝去して、三良みずから死を選んだものとうたわれている。何焯が王粲と曹植の「詠史」詩を評して、「此以秦穆殺三良立論……。子建以三良自残立論……（此れ秦穆の三良を殺すを以て立論す……。子建は三良の自ら残うを以て立論す……）」と述べているのは[36]、両者の相違を端的に指摘したものであり、さらに矢田博士氏はより詳細に彼らの「詠史」詩における殉死の態度の相違を次のように纏めている[37]。

阮瑀の詩に「誤哉秦穆公、身没従三良」とあり、王粲の詩に「秦穆殺三良、惜哉空爾為」とあるように、彼ら二人の死は、いずれも三良を殉死に追いやった秦の穆公を批難することに主眼が置かれている。それに対して、曹植の詩では「秦穆先下世、三臣皆自残」とあるように、三良の死を穆公に強要された受動的な死としてではなく、三良自らが選んだ自主的・主体的な死と捉え、三良の忠誠という点に主眼が置かれ

ている。

三良の死が、穆公の死に起因するのは、阮瑀・王粲・曹植の三者においていずれも変わらない。だが、王粲や阮瑀は穆公が三良の殉死を強要したことの批判として、一方で曹植は穆公が三良の殉死を強要したというよりも、三良自身が主体的に死を選び取ったものとして表現している。このように穆公を批判的に捉えず、三良自身が主体的に死を選ぶという発想については、たとえば『漢書』巻八十一・匡衡伝に「臣窃考国風之詩・・・・・秦穆貴信、而士多従死（臣窃かに国風の詩を考うるに・・・・・秦穆　信を貴びて、而して士多く死に従う）」とみえるのや[*38]、後に引用する応劭注などにみられる[*39]。

以上の王粲や曹植における「詠史」詩の相違を踏まえて、淵明「詠三良」詩をみてみよう。

弾冠乗通津　冠を弾いて通津に乗ず
02 但懼時我遺　但だ懼る　時の我をば遺さんことを
服勤尽歳月　勤めに服して歳月を尽くす
04 常恐功愈微　常に恐る　功の愈いよ微なるを
忠情謬獲露　忠情　謬りて露わるるを獲
06 遂為君所私　遂に君の私する所と為る
出則陪文輿　出づれば則ち文輿に陪い

08 入必侍丹帷　入れば必ず丹帷に侍す
　箴規嚮已従　箴規は嚮（さき）に已に従われ
10 計議初無虧　計議は初めより虧くる無し
　一朝長逝後　一朝　長逝の後
12 願言同此帰　願いて言う　此の帰を同じうせんと
　厚恩固難忘　厚恩　固より忘れ難く
14 君命安可違　君命　安くんぞ違うべけん
　臨穴罔惟疑　穴に臨みて惟れ疑うこと罔し
16 投義志攸希　義に投ずるは志の希う攸なり
　荊棘籠高墳　荊棘　高墳を籠め
18 黄鳥声正悲　黄鳥　声正に悲し
　良人不可贖　良人　贖うべからず
20 泫然霑我衣　泫然として我が衣を沾す

第一句から四句は隔句対の構造で捉えられ、出仕して以来、ただ時勢に取り残されることを「懼」れ、ひたすら忠勤に務めたのは、功のわずかなることを「恐」れたためである。やがて穆公から、はからずも「忠情」が認められ、かくして寵愛を受けることとなった。第七句から十句も対偶表現として、外に「出」れば、豪華

な車に同乗し、朝廷の内に「入」っては、真紅の帳に侍っていたこと、つまり穆公と三良の懇ろな関係がうたわれている。そして、三良の穆公に対する諫言は、「嚮」に、受け容れられないことは無く、計略は「初」めより穆公の意を満たすものであったとうたわれており、穆公の三良に対する厚い信頼がみてとれる。

第十四句にいう「君命」の具体は、『漢書』匡衡伝に引かれる応劭注に次のようにみられる。

公曰、生共此楽、死共此哀。於是奄息、仲行、鍼虎許諾（公曰く、生きては此の楽しみを共にし、死なば此の哀しみを共にす、と。是に於いて奄息・仲行・鍼虎は許諾す）。

宴席の場において、穆公から三良に向けて生死を共にしようと発せられたものであり、三良はこれを「許諾」した。このことを踏まえれば、淵明は第十一句から十四句において、三良が穆公の逝去するに及んで、死を共にしようと「願」い、それは穆公から受けた「厚恩」が忘れ難く、どうして生死を共にせんとする「君命」に背くことがあろうか、とうたっているものと解される。なお、王粲「詠史」詩では、三良の殉死の態度が次のようにうたわれている。

臨歿要之死　歿するに臨みて之に死を要むれば
06 焉得不相随　焉んぞ　相い随わざるを得ん

穆公が逝去するに際して、三良に死を共にしようと求めたならば、どうして三良はそれに随わないことができようか、として穆公が殉死を強要したものとする。

このように淵明「詠三良」詩は、穆公を批判的に捉えないという点、また死に対する主体性という点において王粲「詠史」詩と相違し、この二点においては曹植「三良」詩に近しい。改めて、曹植「三良」詩の残りの箇所をみてみよう。

生時等栄楽　生ける時は栄楽を等しくし
06 既没同憂患　既に没しては憂患を同じくす
誰言捐軀易　誰か言わん　軀を捐つること易しと
08 殺身誠独難　身を殺すこと誠に独り難し
攬涕登君墓　涕を攬いて君が墓に登り
10 臨穴仰天歎　穴に臨みて天を仰ぎて歎く
長夜何冥冥　長夜　何ぞ冥冥たる
12 一往不復還　一たび往けば復た還らず
黄鳥為悲鳴　黄鳥　為に悲鳴す
14 哀哉傷肺肝　哀しいかな　肺肝を傷ましむ

第五・六句は、先に引いた『漢書』の応劭注の「生共此楽、死共此哀」と同じように、生死の「栄楽」「憂患」を共にすることをうたいつつも、それに次いで自己を殺すことの困難さをうたっている。つまり、第一句から四句において、「忠義」を希求し、「自残」として、主体的に死を選びつつも、第七句以降においては、一転して死に対する恐れや、躊躇するような情がみてとれるのである。道家春代氏が「作品の前半のはやる気持ちと後半の悲痛な調子との違和感[注十]」があるという指摘も確かに首肯される。

また、第九・十句の「攬涕登君墓、臨穴仰天歎」については、大きく二つに解釈が別れている。第一に、「君」を三良とみて、曹植が三良の墓穴に臨んで嘆いているとするもの、第二は、「君」を穆公とみて、三良が墓穴に臨んで嘆いているとするものである[注十一]。前者は、『詩経』秦風「黄鳥」篇の次の箇所を踏まえた解釈である。

臨其穴　　其の穴に臨めば
08 惴惴其慄　惴惴として其れ慄る
彼蒼者天　彼の蒼たる者は天
10 殲我良人　我が良人を殲くせり

（全三章、第一章、章十二句）

「黄鳥」篇において、「穴」に「臨」むのは秦の民衆であり、三良が生き埋めにされた墓を覗き込み、恐れ戦いている。これに即して曹植詩の「攬涕登君墓、臨穴仰天歎」についていえば、曹植が涙を払って三良の「墓」に登り、「臨穴」して、天を仰ぎ、歎いているものと解される。後者の解釈については、「忠義我所安」（第二

句）に対して、李善が「我、謂三良也（我は、三良を謂うなり）」と注するがごとく、作中の視点人物、すなわち語り手を三良として捉えたものである。これに即していえば、三良が「君」たる穆公の「墓」に登り、「臨穴」しつつも、死の間際において天を仰ぎ、歎いているものと捉えられる。

以上を踏まえて淵明「詠三良」詩における「臨穴」の一幕をみてみると、次のようにうたわれている。

臨穴罔惟疑　穴に臨みて惟れ疑うこと罔し
16投義志攸希　義に投ずるは志の希う攸なり

ここにおいて「臨穴」しているのは、既に第二句の「但懼時我遺」において示された三良の立場の語り手であり、この点については大立智沙子氏が詳細に検討している[注5]。これに従えば、淵明は曹植「三良」詩における「臨穴仰天歎」の一幕を、三良の視点として解していた蓋然性が高い。そして、曹植詩の三良が「臨穴」するに及んで、天を仰ぎ、歎いていたのに対し、淵明詩における三良は、「臨穴」するに及んでも、一切迷わなかったものと表現されている。つまり、曹植詩の作中前半における死に対する主体的態度と作中後半の「悲痛な調子」や、その「違和感」は、淵明詩に至って払拭されているものといえる。

いま改めて、『詩経』秦風の「黄鳥」篇から淵明「詠三良」詩までの「臨穴」の一幕を列挙し、その変化のあり様を確認してみよう。

臨其穴　其の穴に臨めば
08 惴惴其慄　惴惴として其れ慄る

（『詩経』秦風「黄鳥」）

臨穴呼蒼天　穴に臨みて蒼天を呼び
10 涕下如綆縻　涕の下ること綆縻のごとし

（王粲「詠史」）

攬涕登君墓　涕を攬いて君が墓に登り
10 臨穴仰天歎　穴に臨みて天を仰ぎて歎く

（曹植「三良」）

臨穴罔惟疑　穴に臨みて惟れ疑うこと罔し
16 投義志攸希　義に投ずるは志の希う攸なり

（陶淵明「詠三良」）

「黄鳥」篇は、民衆が「穴」に「臨」んで恐れ戦くものとして、王粲詩では、第七・八句に「妻子当門泣、兄弟哭路垂（妻子　門に当たりて泣き、兄弟　路の垂にて哭す）」とあるように、「妻子」「兄弟」が哭泣しているのを踏まえれば、彼らが「臨穴」して、「蒼天」に呼び掛け、大綱のような涙を禁じ得なかったものと解される。一方で曹植詩では、曹植視点の語り手が三良の墓に、あるいは三良視点の語り手が主君の墓に登り、「臨穴」して天を仰ぎ、悲嘆している。淵明詩に至って、三良は「臨穴」しつつも、一切迷わなかったものとして、そ

れは「義」に殉ずることこそ、「志」の向かうところであるからとうたっている。

改めて確認すれば、曹植詩においても「忠義我所安（忠義 我が安んずる所なり）」（第二句）とあるように、「義」が敬慕されていたことは明らかである。だが、曹植詩は、そこから自己を殺す困難さに及ぶという点において生への執着が窺えるのであり、それに対して淵明詩では、生よりも「義」が重んじられている。ここに、「黄鳥」篇と王粲詩はもとより、曹植詩における三良像とも相違した、淵明独自の三良像がみてとれるのである。

以上を要するに、淵明「詠三良」詩は、王粲「詠史」詩の三良のごとく、穆公を批判的に捉えるものではないし、受動的な死としてうたわれるものでもない。その点において曹植「三良」詩における三良の主体的に死を選んだものに合致し、そういった発想それ自体に新しさがみられるものでもはない。しかながら淵明の描く三良は、曹植のそれよりも「義」を重んじて積極的に死を選んでおり、その点において独創性が窺えるものといえる。そして、このような発展的な表現態度こそが、淵明「詠三良」詩における曹植「三良」詩の継承のあり方と看做されるのである。

おわりに

本章では、先学における「詠史」詩を二つに分けて捉える見解について整理し、淵明の伝体の「詠史」詩に注目して検討を加えた。伝体の「詠史」詩は、歴史の一人一事を対象として、その事跡が概括的にうたわれる

ものであり、淵明の「詠二疏」詩、「詠荊軻」詩、「詠三良」詩は、正史に基づき、あるいは基づくところは不明であっても、おしなべてそういった特徴に合致していると考えられた。ただし、正史との比較において、淵明自身の歴史人物の事跡に対する関心は、それぞれ特色的に窺えるものといえる。つまり、淵明の歴史人物に対する志向は、彼らの事跡を選択し、表現していくなかに端的に示されているのである。

また、従来、伝体の「詠史」詩は史実に依拠するばかりで、叙情性が希薄であるということから批判的に捉えられることもあった。確かに淵明のそれも基本的にはそういった特徴に合致しているが、三首おしなべて対偶表現がみられることからすれば、そういった技巧的表現にも、淵明の拘りがあったものと捉えられる。加えて、淵明の「詠二疏」詩における「放意楽余年、遑恤身後慮」、「詠荊軻」詩の「心知去不帰、且有後世名」の一聯などは、『漢書』の二疏、『史記』における荊軻とは相違して、淵明自身の志向を彼らに代弁させているものであった。「詠三良」詩については、曹植「三良」詩に色濃く影響を受けつつも、「臨穴罔惟疑、投義志攸希」の一聯は、従来の三良像とは相違して、「義」を貫くために積極的に死を選んだものとして表現されている。

以上のように「詠二疏」詩と「詠荊軻」詩において、正史とは相違して、淵明自身の志向が表現されているという点を捉え直してみると、歴史それ自体が淵明のものとして、淵明に内在化されていることを意味していよう。淵明は、歴史人物を対象化し、自己の血肉と化した彼らに、主体的に成り変わって表現し得ているからこそ、淵明自身の志向がおのずと顕れて来るのである。したがって、両作はあたかも淵明自身が歴史的世界を巡り、体験していくかのような態度で表現されているものと捉えられる。それと同様に、「詠三良」詩において淵明独自の三良が表現されているのは、三良に成り変わった淵明自身が君主から信頼を得て恩を授かった日々、

そして、殉死そのものを体験することを通じて、淵明の「義」こそ身命を賭するものという志向が、呼び起こされたためである。またそれが、「詠三良」詩を表現していくなかで獲得された、淵明の新たな認識と看做される。以上が淵明の伝体の「詠史」詩における特色である。

それでは、左思や淵明の論体の「詠史」詩と「擬古」詩における表現の特色はいかなる点にあるのか。次章において、本章で論じた伝体「詠史」詩と比較していくことで、その特色を明らかにしていく。

*1『義門読書記』（下冊、中華書局、一九八四年、八九三頁）の「張景陽詠史詩」の条を参照。

*2 引用は『（嘉靖本）古詩紀』第四冊、漢三（汲古書院、二〇〇五年、一四二頁）に拠る。なお、班固の「詠史」詩は、部分的には李善注などにもみられるが、纏まった形でみられるのは明・馮惟訥『古詩紀』においてであり、該書に出典も明示されていないため、その出所自体が疑わしいものとして知られている。しかしながら作品それ自体の存在は、『詩品』序文に「東京二百載中、惟有班固詠史（東京二百載中、惟だ班固の詠史のみ有り）」（曹旭『詩品集注』、上海古籍出版社、一九九四年、十一～十二頁参照。以下、『詩品』の引用は該書に拠る）と確認することができ、さらに吉川幸次郎氏が「班固の詠史詩について」において、比較的早い時期における五言詩であること、上記の一首に止まらない連作詩であったことを考証している（『書誌学論集　神田博士還暦記念』神田博士還暦記念会、一九五七年に所収、後に『吉川幸次郎全集』六巻・漢篇、筑摩書房、一九八四年に所収。本論では後者の二六三頁を参照）。

*3『漢書』巻二十三・刑法志には、「斉太倉令淳于公有罪当刑、詔獄逮繫長安。淳于公無男、有五女、当行会逮、罵其女曰、生子不生男、緩急非有益。其少女緹縈、自傷悲泣、乃随其父至長安、上書曰、妾父為吏、斉中皆称其廉平、今坐法当刑。妾傷夫死者不可復生、刑者不可復属、雖後欲改過自新、其道亡繇也。妾願没入為官婢、以贖父刑罪、使得自新。書奏天子、天子憐悲其意……（斉の太倉の令淳于公に罪有りて刑に当たる、詔獄　逮して長安に繫ぐ。淳于公に男無く、五女有り、当に行きて逮に会わんとして、其の女を罵りて曰く、子を生みて男を生まず、緩急　益有るに非ず、と。其の少女の緹縈、自ら傷みて悲泣し、乃ち其の父に随いて長

安に至る、上書して曰く、妾が父は吏と為り、斉中は皆な其の廉平を称す、今 法に坐し刑に当たる。妾傷む。夫れ死する者は復た生くるべからず、刑せらるる者は復た属すべからず、後に過ちを改め自ら新たにせんと欲すと雖も、其の道は絲亡ぶなり。妾願わくは没入して官婢と為り、以て父の刑罪を贖いて、自ら新たにすることを得しめんことを、と。書 天子に奏す、天子 憐れみて其の意を悲しむ……）」（一〇九七頁）とみえる。

*4「漢魏の詠史詩――その成立と発展」（『論集』十六号、一九八二年）参照。

*5「左思と詠史詩」（初出は、『中国文学報』二十一号、一九六六年に所収。後に『乱世を生きる詩人たち――六朝詩人論――』研文出版、二〇〇一年に所収。本論では前者を用いた）参照。

*6『漢書』巻五十九・張湯伝に、「功臣之世、唯有金氏・張氏、親近寵貴、比於外戚（功臣の世に、唯だ金氏・張氏のみ、親近寵貴し、外戚に比する有り）」（二六五七頁）とあり、また『漢書』巻六十八・金日磾伝に、「金日磾夷狄亡国、羈虜漢庭、而以篤敬寤主、忠信自著、勒功上将、伝国後嗣、世名忠孝、七世内侍、何其盛也（金日磾は夷狄にして国を亡い、羈れて漢庭に虜たるも、篤敬を以て主を寤らしむ、忠信自ら著し、勒功もて将に上り、国を後嗣に伝えて、世に忠孝を名づく、七世 内に侍りたること、何ぞ其れ盛んなるかな）」（二九六七頁）とみえる。

*7『漢書』巻五十・頁馮唐伝に「武帝即位、求賢良、挙唐。唐時年九十余、不能為官、乃以子遂為郎（武帝即位して、賢良を求むるに、唐を挙ぐ。唐 時に年九十余、官と為すこと能わず、乃ち子の遂を以て郎と為す）」（二三一五頁）とみえる。

*8 興膳氏は前掲「左思と詠史詩」において、たとえば酈炎の「見志」詩に「陳平敖里社、韓信釣河曲（陳平は里

社に敖(あそ)び、韓信は河曲に釣る）（第一聯）とあるが、作品全体においては「彼らの事跡がテーマになっているわけで」はないこと、また阮籍の「詠懐」詩其六に「昔聞東陵瓜、近在青門外（昔は聞く東陵の瓜、近く青門の外に在り）」（第一聯）とあるのは、「阮籍の関心が邵平の物語自体にあるのではなく、この物語を通して彼の心情を述べる点にある」と説いている。

*9『袁枚全集』第三冊（王英志校点、江蘇古籍出版社、一九九三年、四五一頁）

*10 楊潔瓊・許華偉氏ら編纂の『詠史詩精華』「前言」（京華出版社、二〇〇二年、二頁）に拠る。

*11 沈徳潜『古詩源』（中華書局、一九六三年、一六六頁）

*12 王気中箋注『芸概箋注』（貴州人民出版社、一九八六年、一六九頁）

*13 前掲『宋書』巻七十三・顔延年伝に「［延之］謂湛曰、吾名器不升、当由作卿 家吏。湛深恨焉、言於彭城王義康、出為永嘉太守。延之甚怨憤、乃作「五君詠」以述竹林七賢（［延之］湛に謂いて曰く、吾が名器の升らざるは、当に卿の家吏と作るに由るべし。湛深く恨みて、彭城王の義康に言いて、出だして永嘉太守と為さしむ。延之 甚だ怨憤し、乃ち「五君詠」を作りて以て竹林七賢を述ぶ）」（一八九三頁）とみえる。

*14 前掲『宋書』巻七十三・顔延之伝（一八九三頁）

*15 前掲『詠史詩精華』（「前言」、二～三頁）に拠る。

*16『文鏡秘府論』南巻には「詠史者、読史見古人成敗、感而作之（詠史とは、史を読み古人の成敗を見て、感じて之を作る）」（『文鏡秘府論校注』中国社会科学出版社、一九八三年、二九八頁）とある。

*17「飲酒」詩其二では、「積善云有報、夷叔在西山。善悪苟不応、何事立空言。九十行帯索、飢寒況当年。不頼固窮節、百世当誰伝（積善 報い有りと云う、夷叔 西山に在り。善悪 苟しくも応ぜずんば、何事ぞ 空言を

立てんは。九十にして行きて索を帯にし、飢寒 当年に況うるも、固窮の節に頼らずんば、百世 当に誰か伝うべけん)」(巻三)とうたわれているように、「善」を「積」み重ねてきた伯夷・叔斉が、それ相応の待遇を受け得なかったことに疑義を投げ掛けており、「擬古」詩其二では、「辞家夙厳駕、当往至無終。問君今何行、非商復非戎。聞有田子泰、節義為士雄。斯人久已死、郷里習其風。生有高世名、既没伝無窮。不学狂馳子、直在百年中(家を辞して夙に駕を厳え、当に往きて無終に至るべし。君に問う 今 何にか行く、商に非ず 復た戎にも非ざるにと。聞く 田子泰なるもの有り、節義 士の雄たり。斯の人 久しく已に死せるも、郷里 其の風に習うと。生きては世に高き名有り、既に没しては無窮に伝えん。学ばざるや 狂馳の子、直だ百年の中に在るのみなるを)」(巻四)とうたわれるように、田疇、字は子泰の「節義」を称え、その精神のあり方が郷里の人々に継承されていることをうたっている。

*18 参考までに前掲の楊潔瓊・許華偉氏らの「詠史」詩の定義を挙げておく(一頁)。

以歴史為題材的詩歌、有很多種名称、諸如「述古」「懐古」「覧古」「感古」「古興」「読史」「詠史」等、有的還直接以被歌詠的歴史人物・歴史事件為標題。這些詩歌都具有一個共同的特徴、即都是以歴史作為詩人感情的載体、史・情是緊密結合的。因此我們以為、它們都属於広義詠史詩的範疇。如果給詠史詩下個定義的話、那麽凡是対歴史人物・歴史事件・歴史遺跡進行叙述・評価・憑弔或借国家興亡寄托個人懐抱的詩歌、都可以称作詠史詩(歴史を題材とする詩歌には、多様な詩題があり、たとえば「述古」「懐古」「覧古」「感古」「古興」「読史」「詠史」などであり、あるものは直接的に詠じる対象の歴史人物・歴史事件を詩題としている。これらの詩歌は全て一つの共通の特徴を備えており、それはみな歴史を詩人の感情を伝達する手段とし、歴史と感情が緊密に結び付いているという点である。このように考えてみると歴史を

題材とする詩歌であれば、広義にはおしなべて詠史詩の範疇に属しているものと看做される。もし詠史詩を定義付けるならば、およそ歴史人物・歴史事件・歴史遺跡に対して叙述・評価・憑弔、あるいは国家の興亡にかこつけて個人の志を托しているものであり、それらはみな詠史詩と称することができる）。

*19 近年における研究として、井上一之氏の「陶淵明「詠二疏詩」について――知足の是非――」（『中国詩文論叢』二四号、二〇〇五）や、大立智砂子氏の「陶淵明の仮託詩における一人称表現――詠史詩および「形影神」を中心として」（『中国文学研究』三三号、二〇〇七年）などがある。

*20 前掲『漢書』（三〇四〇頁）

*21 前掲『漢書』（三〇四〇頁）

*22 前掲井上氏の「陶淵明「詠二疏詩」について――知足の是非――」に拠る。

*23『史記』（中華書局、一九五九年。以下、『史記』の引用は該書に拠

*24 前掲『史記』（二五三四頁）

*25 前掲『史記』（二五二八頁）

*26『芸文類聚』巻五十五、雑文部一、史伝（中華書局、一九七三年、九九二頁。以下、『芸文類聚』の引用は該書に拠る）にみられる。なお、『芸文類聚』では、「阮瑀詩……」とあるばかりで、詩題が明記されていないが、便宜的に逯欽立氏『先秦漢魏晋南北朝詩』魏詩・巻三（中華書局、一九八三年、三七九頁。以下、『先秦漢魏晋南北朝詩』の引用は該書に拠る）に拠って「詠史」詩とした。

*27 前掲『史記』（二五三八頁）

*28 前掲『史記』（二五三八頁）。また淵明「詠荊軻」詩の「心知去不帰、且有後世名」の出句、「去不帰」につ

いては前掲『史記』では荊軻が易水のほとりにおいて、「壯士一去兮不復還（壯士　一たび去りて復た還らず）」（二五三三頁）とうたったのを踏まえていようが、厳密にいえば、そもそもの荊軻にあっては、生きて帰することを固く誓っており、それは荊軻が太子丹に向けて、「何太子之遣。往而不返者、豎子也。且提一匕首入不測之彊秦、僕所以留者、待吾客与俱。今太子遅之、請辞決矣（何ぞや　太子の遣わすとは。往きて返らざる者は、豎子なり。且つ一匕首を提げて不測の彊秦に入る、僕の留まる所以は、吾が客を待ちて与に俱にせんとすればなり。今太子之を遅しとす、請う辞決せん）」（二五三三頁）と述べている点から窺える。荊軻は、死地に活路を開くために友を待ち、旅の仕度を整えていた。そうであるにも拘わらず、丹は荊軻に出立を急かし、かくして荊軻は活路を絶たれてしまった。また荊軻は暗殺失敗後においても、「事所以不成者、以欲生劫之、必得約契以報太子也（事の成らざる所以は、生きながら之を劫（おびや）かし、必ず約契を得て以て太子に報ぜんと欲するを以てなり）」（二五三五頁）というように、嬴政を生きながら脅しつけ、それを丹に報告しようとしている。荊軻にとって、丹の意に背くことなく、それでいて自己の活路を開くには、嬴政を殺さずに脅しつけるに止めるしか、残されていなかったのである。

*29「六朝における律詩の形成」（『日本中国学会報』四号、一九五二年に所収、後に『六朝唐詩論考』創文社、一九九九年に所収。本論では後者の一一頁を参照。）

*30『全漢三国晋南北朝詩』第一冊の「緒言　八　結論」（芸文印書館、一九六八年、一九頁）に拠る。

*31 井上一之氏「陶淵明「詠三良詩」について――忠と済民」（『中国詩文論叢』二五号、二〇〇六年）を参照。

*32 元・劉履『撰詩補注』巻五、明・黄文煥『陶詩折義』巻四、清・陶澍『靖節先生集』巻四などを参照。

*33 矢田博士氏「曹植「三良詩」考――「文帝誄」との関連を中心として」（『中国文学研究』十九号、一九九三

年）に詳細な検討がみられる。

*34 前掲『十三経注疏　附校勘記』上冊の『毛詩正義』巻六（一〇五（三七三）頁）に拠る。

*35 前掲『十三経注疏　附校勘記』下冊の『春秋左伝正義』巻十九（一四二（一八四四）頁）に拠る。

*36 于光華『重訂文選集評』中冊、巻五（国家図書館出版社、二〇一二年、四三頁）に拠る。

*37 前掲の矢田氏「曹植「三良詩」考――「文帝誄」との関連を中心として」に拠る。

*38 前掲『漢書』（三三三五頁）

*39 本章で挙げた三良の事例については、楊伯峻の『春秋左伝注』第二冊の文公六年の注を参照とした。この他にも楊氏は、『毛詩』鄭箋の「従死、自殺以従死（従死は、三良自ら殺して以て死に従う）」を挙げて、「先秦皆謂三良被殺。自殺之説、或起於漢人（先秦　皆な三良の殺さるるを謂う。自殺の説、或いは漢人より起こる）」（中華書局、一九九〇年、五四七頁）と述べている。

*40 前掲『漢書』（三三三五頁）

*41 「建安期の曹植の詩について」（『名古屋女子大学紀要』三六号、一九九〇年）

*42 前者、曹植を視点人物として捉えるのは、伊藤正文氏『曹植』（岩波書店、中国詩人選集三、一九五八年、六七頁）、内田泉之助・網祐次・中島千秋氏『文選（詩篇）』（明治書院、新釈漢文大系十四、一九六三年、六七頁）などである。後者、三良視点から捉えるのは、斯波六郎・花房英樹氏『文選』（筑摩書房、世界文学大系七十、一九六三年、八一頁）などである。

*43 前掲大立氏は「陶淵明の仮託詩における一人称表現――詠史詩および「形影神」を中心として」において、第二句「但懼時我遺」で、「「三良」の視点から」うたい起こされ、第二十句「泫然霑我衣」において、その視

点は「陶淵明自身に還っている」ことを指摘している。

第四章　陶淵明の「詠史」詩と「擬古」詩

はじめに

『文選』巻三十・雑擬類に収録される陸機の「擬古詩十二首」の題下には、五臣・劉良の注が次のようにみられる。

雑、謂非一類。擬、比也、比古志以明今情（雑は、一類に非ざるを謂う。擬は、比なり、古志に比して以て今情を明かすなり。）

劉良は「雑擬」というジャンルの説明として、多種多様な「擬」詩を収録していること、また「擬」とは「古志」に「比」べながら、「今情」を発露していくものとする。

さて、本章で論じる陶淵明「擬古」詩は、全九首の連作であり、其七が『文選』巻三十の雑擬類に収録されている。従来の「擬古」詩に関する見解は、その殆どが模擬した対象となるうたを明らかにすることに終始しており、それでも諸説紛々としていて定説をみないという点において、一般的な「擬」のなぞらえるという意味での擬詩とは全く異なる様相の作品であることが窺える。たとえば、明・許学夷は「靖節「擬古」九首、略借引喩、而実写懐、絶無模擬之跡（靖節の「擬古」九首、略そ引喩に借るも、而るに実に懐いを写し、絶えて

模擬の跡無し）」と模擬した痕跡が見られないことを述べ[41]、清・汪師韓は「今観唐以後詩、凡所謂古風・古意・古興・古詩・与夫覧古・詠古・感古・倣古・紹古・依古・諷古・続古・述古者、都不知其分別。古人名作、惟鮑明遠擬古八首、陶靖節擬古九首、未嘗明言所擬何詩、然題曰擬古、必非若後人漫然為之者矣（今唐以後の詩を観るに、凡そ所謂る古風・古意・古興・古詩・与夫覧古・詠古・感古・倣古・紹古・依古・諷古・続古・述古とは、都（すべ）て其の分別を知らず。古人の名作に、惟だ鮑明遠の「擬古」八首と、陶靖節の「擬古」九首あり、未だ嘗て擬する所何れの詩なるかを明言せず、然るに題に擬古と曰えば、必ず後人の漫然として之を為す者のごとくに非ず）」と述べ[42]、淵明と鮑照「擬古」詩の模擬した対象となるもとうたの不明瞭さを指摘している[43]。淵明の「擬古」詩はその題に「擬」と冠しつつも、模擬した対象となるもとうたが不明瞭であるという点において、その特殊性が最も看取される。

ところで、淵明の「擬古」詩との類似性をしばしば指摘されるのが、左思や淵明の「詠史」詩である。梁・鍾嶸は『詩品』において、淵明を中品に位置づけ、「其源出於応璩、又協左思風力（其の源は応璩に出で、又左思の風力に協（かな）う）」と述べており[44]、これに対して王叔岷氏は「陶詩淵源雖出於応璩、然復時有勁気流露、則非応詩所具。観其「詠田疇」、「詠荊軻」、「少時壮且厲」、「万族各有託」諸篇、直与左思相頡頏（陶詩の淵源は応璩に出で、然して復た時に勁気の流露さるる有りと雖も、則ち応詩の具（そな）うる所に非ず。其の「詠田疇」、「詠荊軻」、「少時壮且厲」、「万族各有託」諸篇を観れば、直に左思と相い頡頏す）」と述べている[45]。ここにいう「詠田疇」とは、「擬古」其二のことであり、「少時壮且厲」は「擬古」其八のことである。また「万族各有託」は「詠貧士」其一の冒頭であり、その連作七首を指して「諸篇」と述べている。王氏はそれらが左思の「風力」に

通底するものとの見解を示しているのである。

改めて確認すれば、淵明の「擬古」詩は、『文選』においては「雑擬」のジャンルに収録されたものであり、そのことは淵明の「擬古」詩も「一類」に括れるものではないことを示唆している。とすれば、淵明の「擬古」詩も作品それ自体に即した、淵明自身にとっての「擬古」という表現方法のあり方を検討してくという立場の研究も必要であるだろう。その検討で本論においてとりわけ重要視するのは、表現主体が作品世界に設定する語り手のあり方である。また「詠史」詩については前章で述べた通り、伝体と論体の「詠史」詩に分けることができる。本章ではそれらの語り手の設定のあり方についても考察を加え、「擬古」詩と比較検討することで、淵明にとっての「擬古」という表現方法の特色を浮き彫りにしたい。

なお、本論にいうところの「語り手」は、作中世界の視点人物ないし進行役としての謂いである。「表現主体」については作者（左思や淵明）が、ある詩歌を創作しようとする際に、まず設定する平生の作者とは異なる創作者としての謂いである。「表現主体」は、厳密には作者と異なるものであるが、無論、作者それ自体に包括されるものであり、作者自身と重なることも多い。それ故に本論で「表現主体」と述べる際には、基本的に作者に当たるものとして用いる。

一　論体「詠史」詩と伝体「詠史」詩

西晋期を生きた左思（生没年不詳）、字は太沖は、史書に拠ると、九品官人法の敷かれた厳しい門閥社会にあって、寒門出身の上、容貌醜く、吃音をも抱えていたとされる[8]。まずは論体「詠史」詩の特色を明らかにする

ために、左思の「詠史」詩其三を挙げよう。

吾希段干木　吾は希う　段干木
02 偃息藩魏君　偃息して魏君に藩たりしを
吾慕魯仲連　吾は慕う　魯仲連
04 談笑却秦軍　談笑して秦軍を却けしを
当世貴不羈　世に当りては羈れざるを貴び
06 遭難能解紛　難に遭いては能く紛を解けり
功成不受賞　功成りて賞を受けず
08 高節卓不群　高節　卓として群れず
臨組不肯絲　組に臨むも　絲(つなが)るるを　肯(がへん)ぜず
10 対珪不肯分　珪に対するも分くるを肯ぜず
連璽燿前庭　連璽　前庭に燿くも
12 比之猶浮雲　之を比(み)ること猶お浮雲のごとし

（『文選』巻二十一）

第一句に登場する段干木について、『史記』巻四十四・魏世家に拠ると、魏・文侯が段干木の住む村を通過する際には、常々車上で厚い礼をした。近隣の諸侯はその文侯の態度をみて、彼を人徳者として称え、魏を侵略

しようとしなかった[*7]。それ故に段干木は、第一・二句において、「吾」から「希」求され、臥し休みながらにして、魏・文侯の「藩」、すなわち衝立（ついたて）となったことが称えられる。第三句に登場する「魯仲連」は、残虐極まる秦将・白起の率いる秦軍が、趙の都である邯鄲を包囲したのを会談のみで却けさせた人物であり、その事跡もまた『史記』巻八十三・魯仲連鄒陽列伝にみることができる[*8]。

第五句以下、執拗に否定詞の「不」を用いるのが印象的であるが、それらの内容は、多く『史記』魯仲連鄒陽列伝に依拠したものである。たとえば、第五句で彼らが世間に「不羈」、すなわち縛られないのを尊んだとうたうのは、同伝において「使不羈之士与牛驥同皁（不羈の士をして牛驥と皁を同じくせしむ）」とあるのを踏まえてうたっており[*9]、第六句において「難」事に遭遇して見事に「紛」乱を「解」きほぐしたとうたうのも、同伝において魯仲連が発した「所貴於天下之士者、為人排患釈難解紛乱而無取也（天下の士の貴ぶ所は、人の為に患いを排し難を釈きて紛乱を解きて取る無きなり）」を踏まえている[*10]。第八句の「高節」、さらには第九・十句において「不肯」を連ねる無骨な対偶表現についても、同伝冒頭に「而不肯仕宦任職、好持高節（而して仕宦任職を首ぜずして、好みて高節を持す）」とあるのを踏まえていよう[*11]。

さて、従来、左思の「詠史」詩は、歴史人物の事跡をなぞる叙事的なスタイルの伝体「詠史」詩とは異なり、叙情性豊かに表現されるものと説明されてきた。ただ、左思のそれも簡潔ではあるが歴史人物の事跡をうたっており、『史記』の語彙を良く踏まえながらうたわれている。また清・何焯はその札記において次のように述べている[*12]。

詠史者、不過美其事而詠嘆之、隠括本伝、不加藻飾、此正体也。太沖多攄胸臆、乃又其変也。叙致本事能不冗不晦。以此為難（詠史とは、其の事を美して之を詠嘆するに過ぎず、本伝を隠括し、藻飾を加えざるは、此れ正体なり。太沖は多く胸臆を攄（の）ぶ、乃ち又其の変なり。叙ぶるに本事に致すも能く冗せずして晦（くら）からず。此れを以て難と為す）。

何氏が左思「詠史」詩の難点として挙げるのは、歴史人物の事跡を述べるにしても無駄を省き、曖昧とならないことである。さらに何氏は、左思の「詠史」詩を評して「題云詠史、其実乃詠懐也（題に詠史と云うも、其の実は乃ち詠懐なり）」とも述べて[*13]、詠懐詩的要素が強いことも指摘している。それでは、論体「詠史」詩は、なぜ、伝体「詠史」詩とは異なって読み手に叙情性豊かな印象を与えるのであろうか。この点に留意しながら、続けて、淵明の「詠貧士」詩其三を挙げよう。

栄叟老帯索　栄叟は老いて索を帯にし
02 欣然方弾琴　欣然として方に琴を弾ず
原生納決履　原生は決履を納き
04 清歌暢商音　清歌して商音を暢う
重華去我久　重華　我に去ること久しく
06 貧士世相尋　貧士　世よ相い尋ぐ

弊襟不掩肘　弊襟　肘を掩わず
08藜羹常乏斟　藜羹　常に斟むに乏し
豈忘襲軽裘　豈に軽裘を襲ぬるを忘れんや
10苟得非所欽　苟しくも得るは欽う所に非ず
賜也徒能弁　賜や徒らに能く弁ずるも
12乃不見吾心　乃ち吾が心を見ず

（巻四）

第一句の「栄叟」は、三楽を唱えたことで著名な栄啓期で、『列子』天瑞編にみられる。彼は老境に至っても、しめ縄を帯とし、楽しげに琴をつまびいていたことがうたわれている。第三句の「原生」は、原憲、字は子思、孔門の門人で、その事跡は『荘子』譲王編にみることができ、破れた草履をつっかけて「清」、すなわち高らかに「歌」いながら、のびのびと「商音」をうたっていた[*14]。

左思「詠史」詩と淵明「詠貧士」詩は、伝体の「詠史」詩のように一人・一事を表現対象とすることに拘らない。詩の前半四句において、歴史上の人物を複数取り上げるのは、こと左思の「詠史」詩其三と全く同様である。このことは既に陳守業氏が左思と淵明の両作を比較して、淵明の「詠貧士」詩について「構造上更精于布置、因而更為成熟（構造上においてさらに配置が精密化しており、したがってさらなる成熟が窺える）」と述べ、その発展的な継承を指摘している通りである[*15]。ただし、詠史詩というジャンルの枠組みにおいて、伝体「詠史」詩とは異なる左思と淵明の論体「詠史」詩の類似点で、より注目すべきは、作中世界の進行役たる語り手

の設定のあり方である。これを明確化するために、まず伝体「詠史」詩の語り手の設定のあり方について確認しておこう。淵明の「詠三良」詩を挙げる。

弾冠乗通津　冠を弾いて通津に乗ず
02 但懼時我遺　但だ懼る　時の我をば遺さんことを
服勤尽歳月　勤めに服して歳月を尽くす
04 常恐功愈微　常に恐る　功の愈いよ微なるを
忠情謬獲露　忠情　謬りて露わるるを獲
06 遂為君所私　遂に君の私する所と為る
出則陪文輿　出づれば則ち文輿に陪い
08 入必侍丹帷　入れば必ず丹帷に侍す
箴規嚮已従　箴規は嚮（さき）に已に従われ
10 計議初無虧　計議は初めより虧くる無し
一朝長逝後　一朝　長逝の後
12 願言同此帰　願いて言う　此の帰を同じうせんと
厚恩固難忘　厚恩　固より忘れ難く
14 君命安可違　君命　安くんぞ違うべけん

臨穴罔惟疑　穴に臨みて惟れ疑うこと罔し
16投義志攸希　義に投ずるは志の希う攸なり
荊棘籠高墳　荊棘　高墳を籠め
18黄鳥声正悲　黄鳥　声正に悲し
良人不可贖　良人　贖うべからず
20泫然霑我衣　泫然として我が衣を沾す

（巻四）

第二句に登場する「我」が「冠」の塵を払って出仕して以来「懼」れたのは、時勢に取り残されることであり、ひたすら忠勤に務めたのは、功績を挙げ得ないのを「恐」れたためである。その忠義心は曲がりなりにも認められ、かくして「君」、すなわち穆公のお側に仕えることが許された。

この第二句に登場する「我」が、三良視点として設定された語り手であることは明らかであり、淵明と重なることは決してない。一方で第十七句以降は、三良の自殺後の描写であり、末聯の第十九・二十句において、「良人」、すなわち三良の自殺を悼む「我」が涙で衣を濡らしている。ここにおける「良人」は三良に当たり、「我」は表現主体の淵明と重なる語り手であるだろう。なお、大立智砂子氏の次の分析が的を射ている[*16]。

詩の冒頭（第二句「但懼時我遺」）で「三良」の視点に立ち、そこから景色、心情を詠っていたはずの陶淵明が、最後に忽然と、陶淵明自身に還っている。まるで、時代を超えて「三良」に憑依していた陶淵明が、

「自分自身」に戻って来たかのようである。

以上を踏まえて、改めて左思の「詠史」詩における語り手についていえば、その語り手は、第一句において「吾希段干木」と登場している。この「吾」に対して、呂向は「吾思自称也（吾は思の自称なり）」（『文選』巻二十一）と述べるように、左思自身と重なる。そして、「詠貧士」詩における語り手は、第五句において「重華去我久」と遥か「重華」、すなわち古の時代へ思いを寄せながら登場する。この古の時代に焦がれる「我」もまた淵明自身と重なるものであり、淵明は「贈羊長史」詩においても次のようにうたっている。

愚生三季後　愚　三季の後に生まれ
02 慨然念黄虞　慨然として黄虞を念う
得知千載外　千載の外を知るを得るは
04 正頼古人書　正に古人の書に頼るのみ

（巻二）

「三季」、すなわち夏・殷・周の後に生まれことに慨歎しながら、黄帝や虞舜の時代に思いを馳せる。謙譲の一人称である「愚」を用いているのは、語り手の、ひいては淵明自身の古の時代への敬意の顕れである。

さらに「詠貧士」詩其四を挙げれば、次のようにうたわれている。

安貧守賤者　貧に安んじ賤を守る者
02 自古有黔婁　古より黔婁有り
好爵吾不栄　好爵も吾に栄せず
04 厚饋吾不酬　厚饋にも吾酬えず
一旦寿命尽　一旦　寿命尽きて
06 弊服仍不周　弊服　仍お周ねからず
豈不知其極　豈に其の極を知らざるなり
08 非道故無憂　道に非ず　故に憂い無し
従来将千載　従来　将に千載ならんとするも
10 未復見斯儔　未だ復た斯の儔を見ず
朝与仁義生　朝に仁義と与に生くれば
12 夕死復何求　夕べに死すといえども復た何をか求めん

（巻四）

ここにおける語り手も第二句に登場する「黔婁」の立場には設定されてはいない。淵明と重なるような語り手が、遥か「古」を生きた黔婁に思いを寄せ、彼が爵位にも手厚い贈り物にも関心を示さなかったことに共感を寄せている。また第十一・十二句において、朝に「仁義」を獲得したならば、夕べに滅んでも構わないとうたっているのは、劉向の『列女伝』賢明篇にみられる黔婁の妻が、「求仁而得仁、求義而得義」（仁を求めて仁を

得て、義を求めて義を得）」と述べるのを踏まえていよう[17]。だが、やはり黔婁の妻の立場からはうたわれていない。語り手としてふるまう表現主体、すなわち淵明自身の思いとして表現されている。

以上にみたように、論体「詠史」詩の語り手は、伝体「詠史」詩の語り手のように歴史人物の立場に設定されておらず、表現主体そのものと重なるものとして設定されている。それ故に、表現主体の視点から展開される論体「詠史」詩は、歴史人物の事跡をうたうにせよ、表現主体の思いとしてうたわれ、叙情的に表現されるのである。この点こそ、論体「詠史」詩が詠懐詩的に捉えられる所以であり、伝体「詠史」詩とは異なる叙情性の豊かさの所以であるだろう。そして、こうした語り手の設定のあり方において、「詠史」詩というジャンルにおける淵明の「詠貧士」詩と左思「詠史」詩との通底が窺えるのである。

二　論体「詠史」詩と「擬古」詩

さて、以上の「詠史」詩における語り手の設定のあり方を踏まえて、淵明の「擬古」詩の特色を浮かび上がらせていくこととしたい。淵明の「擬古」詩其二を挙げよう。

辞家夙厳駕　家を辞して夙に駕を厳え
02 当往志無終　当に往かんとして無終を志す
問君今何行　君に問う　今　何にか行く

04 非商復非戎　商に非ず　復た戎にも非ず
聞有田子泰　聞く　田子泰なるもの有り
06 節義為士雄　節義　士の雄たり
斯人久已死　斯の人　久しく已に死す
08 鄉里習其風　鄉里　其の風に習うと
生有高世名　生きては高世の名有り
10 既没伝無窮　既に没しては無窮に伝えん
不学狂馳子　学ばざるや　狂馳の子
12 直在百年中　直だ百年の中に在るのみなるを

（巻四）

第二句の「無終」は、幽州右北平郡（現在の河北省薊県）に属す地名である[*18]。また、第五句に登場する「田子泰」は、『三国志』魏書に立伝されており、それに拠ると田疇（一六九～二一四）、字は子泰[*19]、彼は幽州牧の劉虞にその才能を見出され、使者として長安へ向かう。役目を果たして長安から帰ってみると既に劉虞は公孫瓚に殺されており、田子泰は劉虞の墓前で慟哭の涙を禁じ得なかった。公孫瓚はそれを理由に田疇を拘束するも、彼の毅然とした反論を受け、人心を失うことを恐れて釈放する。その後、田疇は宗族と追従者数百を引き連れて徐無山に隠棲し、劉虞の仇を報じる決意を胸に躬耕生活を送った。数年にして田子泰を慕うもの達が集まって五千余家に達したという[*20]。

このうたでは歴史上の人物である田疇が登場しており、そうした歴史上の人物を題材とするのは、「詠史」詩

と同様である。それでは、いかなる点で「詠史」詩と異なるのか。

まずこのうたは、第一句において、旅支度を整える様子がうたわれており、その点に行旅詩的要素を見出すことができる。そして、その語り手は、作中にもう一人仮構された人物から質「問」される「君」である。またこの「問君」という表現については一海知義氏が「詩によく使う自問自答のいい方」と解するように[*21]、その語り手は淵明自身と重なる。

このように語り手が表現主体と重なるのは、論体「詠史」詩と同様である。この語り手の設定のあり方において、「擬古」詩は、伝体「詠史」詩よりも、論体「詠史」詩に接近している。ただし、「擬古」詩がいずれの「詠史」詩とも異なるのは、歴史人物の事跡それ自体をうたうことには関心が希薄な点である。第五句から第八句においてうたわれるのは、あくまでも旅の目的として、田疇の「節義」の遺風を残していよう彼の郷里を目指すということである。

しかしながら第九句から第十二句において、田疇の生き様が当世において高く評価され、亡くなった後も不朽に名を残したこと、それとの対比で短い人生の中において名利ばかりを求める「狂馳」の人々の虚しい生き方を非難している。こうした歴史人物との対比において、現実を批判的に表現するという点は、左思の「詠史」詩に通じる。其六を挙げよう。

荊軻飲燕市　荊軻　燕の市に飲み
02酒酣気益震　酒酣にして気益ます震(ふる)う
哀歌和漸離　哀歌して漸離和す

04 謂若傍無人　謂(おも)えらく傍に人無きがごとしと
　雖無壮士節　壮士の節無しと雖も
06 与世亦殊倫　世と亦た倫を殊にす
　高眄邈四海　高眄　四海に邈かなり
08 豪右何足陳　豪右　何ぞ陳ぶるに足らん
　貴者雖自貴　貴者　自ら貴しと雖も
10 視之若埃塵　之を視ること埃塵のごとし
　賤者雖自賤　賤者　自ら賤しと雖も
12 重之若千鈞　之を重んずること千鈞のごとし

（巻二十一）

第一句に登場する荊軻は『史記』巻八十六・刺客列伝にみられるが、左思が対象化する彼の事跡は、極めて特徴的である。それは荊軻が人前であるのを憚らずに「傍若無人」に泣きじゃくった[*22]、見方によっては情けない一幕である。左思は、そのような荊軻を士大夫としての節度が無いものと断じ、しかしながら彼の常軌を逸した志の高さについて、「四海」、すなわち世界を見下ろし、「豪右」、すなわち権勢・富豪を取るに足らないものと否定する。さらに第九句における「貴者」もまた否定の対象として挙げるものであり、それらは当世の無能な貴族への批判が込められているのであろう。

それでは、淵明の「詠貧士」詩はどうであろうか。改めて「詠貧士」其三の末四句を挙げれば次の通りであ

る。

豈忘襲軽裘　豈に軽裘を襲ぬるを忘れんや
10 苟得非所欽　苟しくも得るは欽う所に非ず
賜也徒能弁　賜や徒らに能く弁ずるも
12 乃不見吾心　乃ち吾が心を見ず

上等な衣服の暖かさを知ってはいるが、不正な手段で得たいとは思わない。「賜」、すなわち子貢は弁論の巧みさのみで、私の心が見抜けなかったのだとうたわれており、ここにも子貢のような生き方をする当世の人々への否定的意味合いが窺えようが、左思「詠史」詩や淵明「擬古」詩の露骨な批判的表現とは相違して、どちらかといえば暗示的である。さらに「詠貧士」詩其五を挙げよう。

袁安門積雪　袁安　門に積雪あるも
02 邈然不可干　邈然として干むべからず
阮公見銭入　阮公　銭の入るを見て
04 即日棄其官　即日にして其の官を棄つ
芻藁有常温　芻藁　常温有り
06 採莒足朝餐　莒を採れば朝餐足る

豈不実辛苦　豈に実に辛苦ならざらんや
08所懼非飢寒　懼るる所は飢寒に非ず
貧富常交戦　貧富　常に交ごも戦い
10道勝無戚顔　道勝てば戚うる顔無し
至徳冠邦閭　至徳　邦閭に冠たり
12清節映西関　清節　西関に映ず

（巻四）

大雪のなかで食料を断った袁安、持参金つきの婚姻を理由に、官吏の立場を捨て去った阮修を挙げている。このうたの主眼は現実を直接的に批判することには無い。その主眼となるのは袁安や阮修が目の前に飢えをしのぐ手段や貧窮から抜け出す方法があり、そこから生じる「貧」と「富」との葛藤に対して、「道」のために打ち勝ったのを称えることにあるだろう。

以上のように、淵明の「擬古」詩其二は、「詠史」詩と同様に歴史人物を挙げ、論体「詠史」詩と同じように、その語り手が表現主体と重なるように設定されている。加えて、その語り手が批判的視座の立場に設定されているのは、左思「詠史」に相当に接近しているものといえよう。ただし、淵明は「擬古」詩其二において、歴史人物の事跡それ自体を詳しくうたうことに主たる関心は無い。しかもその冒頭においては、無終への旅支度を整える様子がうたわれ、行旅詩的要素を含んでもいる。こうした論体「詠史」詩との相違に留意し、さらに検討を進めていく。

三　伝体「詠史」詩と「擬古」詩

淵明の「擬古」詩の語り手の設定が論体「詠史」詩と共通していることは、以上に論じた通りである。ただし、その表現方法という点からいえば、その実、伝体「詠史」詩に接近している側面もある。淵明の「詠荊軻」詩を挙げれば次の通りである。

燕丹善養士　燕丹は善く士を養う
02 志在報強嬴　志は強嬴に報ゆるに在り
招集百夫良　百夫の良を招集し
04 歳暮得荊卿　歳暮に荊卿を得たり
君子死知己　君子は己を知るものに死す
06 提剣出燕京　剣を提げて燕京を出づ
素驥鳴広陌　素驥　広陌に鳴き
08 慷慨送我行　慷慨して我が行を送る
雄髪指危冠　雄髪　危冠を指し
10 猛気衝長纓　猛気　長纓を衝く
飲餞易水上　飲餞す　易水の上

12 四座列群英　四座　群英を列ぬ
　漸離擊悲筑　漸離　悲筑を撃ち
14 宋意唱高声　宋意　高声を唱う
　蕭蕭哀風逝　蕭蕭として哀風逝き
16 淡淡寒波生　淡淡として寒波生ず
　商音更流涕　商音　更ごも流涕し
18 羽奏壮士驚　羽奏　壮士驚く
　心知去不帰　心に知る　去りて帰らざるも
20 且有後世名　且つは後世の名有らんと

（巻四・全三十句）

このうたの語り手の設定に関して大立智砂子氏は、その第一句から第四句について、「歴史的な事実を比較的客観的に述べた部分」と分析し、「まだ作者と作中人物との同一化はなされていない」ことを述べ、第五句以降、とりわけ第八句にみられる「慷慨送我行」における「我」に注目し、「荊軻の視点からの描写」に変化すると指摘している。これは、淵明が荊軻に一体化する態度で表現しているものと捉えてのことであろう[*23]。

また第十九・二十句において、荊軻自身の心情描写としてうたわれる「心知去不帰、且有後世名」という不朽の名声への志向は、前章で論じた通り、淵明自身の志向と重なる。改めて「飲酒」詩其二を挙げよう。

九十行帯索　九十にして行きて索を帯にし
06飢寒況当年　飢寒　当年に況うるも
不頼固窮節　固窮の節に頼らずんば
08百世当誰伝　百世　当(は)た誰か伝えん

（巻三・全八句）

「固窮節」を拠りどころとして、「百世」に名を伝えんことうたっており、淵明は「詠荊軻」詩における語り手、とりわけ第四句以下における語り手をあくまで荊軻に設定しているが、荊軻の立場・視点を淵明自身のものとして獲得し、血肉化しているからこそ、淵明自身の志向をも表出させ得る。

淵明は「詠荊軻」詩を表現することを通じて、荊軻の視点、ひいては荊軻の生き様を獲得し、荊軻に成りきって歴史世界を旅をする。これは淵明が語り手として歴史世界に没入する態度で表現しているものといえよう。こうした観点から捉えると、第十一句以下、易水のほとりで開かれた悲壮な送別の宴の一幕がうたわれるが、そのうちの「蕭蕭哀風逝、淡淡寒波生」という一聯は、淵明が語り手として歴史世界に吹きすさぶ寒々とした風を実感的に表現しているものと解される。

こうした淵明の伝体「詠史」詩の表現方法を踏まえて、次に「擬古」詩其八を挙げよう。

少時壮且厲　少き時　壮にして且つ厲し
02撫剣独行遊　剣を撫して独り行遊す

誰言行遊近　誰か言う　行遊すること近しと
04 張掖至幽州　張掖より幽州に至る
飢食首陽薇　飢えては食らう　首陽の薇
06 渇飲易水流　渇しては飲む　易水の流
不見相知人　相知の人に見えずして
08 惟見古時邱　惟だ見る　古時の邱
路辺両高墳　路辺に両つの高墳あり
10 伯牙与荘周　伯牙と荘周と
此士難再得　此の士　再びは得難し
12 吾行欲何求　吾が行　何をか求めんと欲す

（巻四）

語り手は第一句から第四句において、血気盛んに「剣」を引っ提げて孤独に旅をした若き日を回想する。それは「詠荊軻」詩の第六句にみた「提剣出燕京」にも通じる気性の荒々しさを持ち、その旅は遥か「張掖」（現在の甘粛省）から「幽州」（現在の東北一帯）まで至る遠大なものである。

また具体的な旅の様子をうたう第五・六句は、一見して明らかなように、『史記』巻六十一・伯夷列伝にみられる伯夷・叔斉が首陽山で飢え死にした事跡を踏まえ、後者は荊軻が易水のほとりで見送られた事跡を踏まえた典故表現である。ただし、そのうたわれる歴史は、伯夷・叔斉や荊軻の事跡としてではなく、語り手自身の

旅の回想としてうたわれている点で特徴的である。

そして、それは「擬古」詩の表現主体と重なる語り手が、歴史的視座を獲得しているものと捉えることができ、その意味において、伝体「詠史」詩の歴史世界に没入する表現方法に通じていることが窺われるのである。

ところで、「擬古」詩其八の冒頭において、若き日の回想の旅先としてうたわれる「幽州」とは、「擬古」詩其二で向かった田疇の郷里である無終の属す地である。そうであれば、淵明は「擬古」詩其八において、「擬古」詩其二における行旅を回想しているかのようである。それでは、「幽州」の前の旅先としてうたわれる「張掖」とは何を想起しているのであろうか。「擬古」詩其一を挙げよう。

栄栄窗下蘭　栄栄たり　窗下の蘭
02 密密堂前柳　密密たり　堂前の柳
初与君別時　初め君と別れし時
04 不謂行当久　謂わざりき　行　当に久しかるべしと
出門万里客　出門すれば万里の客
06 中道逢嘉友　中道にて嘉友に逢う
未言心先酔　未だ言わず　心　先ず酔う
08 不在接杯酒　杯酒を接するに在らず
蘭枯柳亦衰　蘭枯れ柳も亦た衰う
10 遂令此言負　遂に此の言をして負かしめたり

多謝諸少年　多謝す　諸少年
12相知不忠厚　相い知ること忠厚ならず
意気傾人命　意気　人命を傾く
14離隔復何有　離隔　復た何か有らん

（巻四）

一見する限り、「張掖」は何ら関係のないようにみえる。また、従来、このうたは大きく二つの解釈がおこなわれている。一つには、語り手を旅人として捉えるものであり、いま一つには、第三句の「君」を旅人として捉えるものである。

前者の場合、語り手が邸宅に咲き誇る「蘭」と鬱蒼と生い茂る「柳」を眼前にして、第三句の「君」に見送られ、遙か「万里」の旅人となる。その語り手は旅先において「嘉友」と出逢い、彼と杯を交わすまでもなく心酔した。第九句では邸宅にかつて咲き誇っていた「蘭」、力強く茂っていた「柳」も枯れ果てたことをうたい、歳月の経過と語り手が邸宅に戻ったことを暗に示唆する。第十一句以下、語り手を待ちきれなかったであろう「諸少年」に向けて、彼らの非誠実な態度に慨歎し、非難する。

一方で後者の解釈では、語り手を待ち人として、「君」を旅人として捉える。第五句以下は語り手の想像として、「君」の行旅の様子をうたっているものと解され、「嘉友」との出逢いを皮肉るように否定的に捉えるものである。つまり、杯も交わさぬうちに心酔し、故郷で待つ語り手を裏切って、帰ってこなかったのを第十一句以下において非難していることになる。

したがって、「嘉友」をいかなる人物として捉えるかが解釈の分かれ目となる。そして、古直氏は第八句の「不

在接杯酒」について[24]、『漢書』巻六十二・司馬遷伝の次の司馬遷の発言に由来することを指摘している[25]。

夫僕与李陵俱居門下、素非相善也、趣舎異路、未嘗銜盃酒接殷勤之歓（夫れ僕と李陵とは俱に門下に居りて、素より相い善しきに非ざるなり、趣舎 路を異にし、未だ嘗て盃酒を銜えて殷勤の歓に接せず）

司馬遷は李陵と杯を交わして喜びを分かち合った関係でもないにも拘わらず、李陵のことを庇った。司馬遷が宮刑に処せられた原因となる発言である。この典故表現としての指摘を踏まえたならば、旅に向かった旅人は司馬遷のごとき精神性を有するものとして、「嘉友」は、李陵のごとき人物として、肯定すべきものとして捉えられる。

ただ、この典故表現としての指摘は、近年の日本の訳注書の類においては、全くといってよいほど支持されていない。これは両者、すなわち「不在接杯酒」の句と「未嘗銜盃酒接殷勤之歓」の一文を見比べてみても、類似しているようで必ずしも全面的には一致する訳では無いという点で採用されなかったのであろう。だがしかし、「擬古」詩を連作として捉え、其八における「幽州」と其二における「無終」の連関性を踏まえ、さらに次に挙げる『史記』巻一百九・李将軍列伝に附された李陵の伝を踏まえたとき、その典故表現としての確証性は自ずと高まる[26]。

李陵既壮、選為建章監、監諸騎。善射、愛士卒。天子以為李氏世将、而使将八百騎。嘗深入匈奴二千余里、過居延視地形、無所見虜而還。拝為騎都尉、将丹陽楚人五千人、教射酒泉、張掖以屯衛胡（李陵既に壮にし

て、選ばられて建章の監と為り、諸騎を監す。射を善くし、士卒を愛す。天子以為えらく李氏世よに将たりと、而ち八百騎に将たらしむ。嘗て深く匈奴に入ること二千余里、居延を過ぎて地形を視るも、虜を見る所無くして還る。拝せられて騎都尉と為り、丹陽の楚人五千人を将いて、射を酒泉・張掖に教えて以て胡に屯衛す）。

李陵は最終的には匈奴に囲まれ、抵抗する術をなくして降伏した故に、漢に残した家族・一族もろとも全員処刑された。そうした悲劇の人物として知られる李陵が、漢・武帝に忠義を尽くし、匈奴から護っていた地こそ、「張掖」なのである。淵明が「擬古」詩其八において「張掖」を想起している必然性は、「擬古」詩其一を李陵の事跡と関連づけてこそ浮かび上がる[*27]。そうであれば、「擬古」詩其一の「嘉友」は、李陵のごとき肯定すべき人物であることから、語り手自身を旅人として理解すべきである。また淵明は、その語り手を、李陵の禍における司馬遷のごとくに、主君に諫言することによって自己に降りかかるであろう危機を全く顧みずに、友人を守ろうとする人物として設定しているものと捉えられる。

そして、「不在接杯酒」という句は、「擬古」詩其八における「飢食首陽薇、渇飲易水流」という表現と同様に、歴史人物の事跡がその当事者、すなわち司馬遷のこととしてうたわれるのでなく、表現主体と重なるような語り手、すなわち淵明自身のこととして表現されていることがみて取れる。

以上を踏まえた上で、淵明の「擬古」詩と伝体「詠史」詩とを比較すれば、「詠三良」詩や「詠荊軻」詩の主たる語り手は、あくまで三良や荊軻といった当事者の立場に設定されていたのに対し、「擬古」詩其一と其八の語り手は、表現主体と重なるような語り手として設定されている。その点で両者は異なるが、「擬古」詩もまた

伝体「詠史」詩と同様に、表現主体が歴史に身を寄せ、歴史的地平に降りたって表現している点で通底が窺えるのである。

おわりに

以上のように、淵明の「詠史」詩と「擬古」詩には、どちらも歴史に接近するような態度はあるが、両者の歴史への接近の方法は異なっている。淵明の「擬古」詩は、論体「詠史」詩と語り手の設定のあり方において類似が窺えた。また現実に対する批判的視座からうたわれるのは、左思「詠史」詩に近しい。だが、「擬古」詩は表現主体の淵明と重なるような語り手を設定しつつも、その語り手が歴史的人物に身を寄せ、歴史的地平そのものから歴史と向き合っている。そうした歴史との向き合い方からすれば、論体「詠史」詩よりも伝体「詠史」詩に接近しているものともいえる。

伝体「詠史」詩との相違は、「擬古」詩の語り手が歴史人物の視点に設定されておらず、一方で「擬古」詩は表現主体と重なるような語り手が、自身の行旅としての典故表現を盛り込むことで、歴史に接近しようとしている点であるだろう。すなわち、根本的な語りの方法によって、歴史それ自体に接近しようとするのが、淵明の「擬古」詩なのである。

淵明は「擬古」詩を通じて、淵明自身が語り手として、ときに歴史世界を主体化しながら旅をする。それが淵明の「擬古」詩それ自体から窺える「擬古」という表現方法の特色の一端である。

以上、第二章から本章にかけて、陶淵明の読書の具体的有り様と、淵明の読書の成果として表現された歴史的

題材を扱う作品群に検討を加えた。これらを総括的に捉え、淵明にとっての読書と表現という営みが、いかなる意義を有するのかという点は、結章で論じることとしたい。第五章では、稿者の今後の研究方向を示すべく、『陶淵明集』に散見される異文について検討を加えていく。

*1 明・許学夷『詩源弁体』巻六、二十一則（杜維沫校点、人民文学出版社、一九八七年、一〇四頁）に拠る。

*2 明・王夫之撰『清詩話』所収「詩学纂聞」の「雑擬雑詩之別」（上海古籍出版社、一九七八年、四四四頁）に拠る。

*3 近年においても同様の見解が多く、一海知義氏は「擬古」其二にのみ見解を述べて、「魏の曹植に「僕夫早く駕を厳にし」ではじまる詩（雑詩）があり、それに擬したものか。」（一海知義氏『陶淵明』筑摩書房、一九六八年、一一二頁）と指摘しているが、やはり断定はしておらず、他の「擬古」詩においては何ら見解を示していない。あるいは松枝茂夫・和田武司氏は「擬古（古詩に擬す）とはいっても、実は折り折りの感懐を詠じたもの」（松枝茂夫・和田武司『陶淵明全集』岩波文庫、一九九〇年、八頁）と述べており、「擬古」という詩題を考慮しない観点から見解を述べており、田部井文雄・上田武氏は「古詩になぞらえる九首（の連作）。「擬古」とは古くからある詩の一体で、本来、擬すべき古詩があるはずであるが、この九首の連作にそれを求めることは、今は不可能である」（田部井文雄・上田武『陶淵明全釈』明治書院、二〇〇一年、二〇六頁）と述べているように、淵明「擬古」詩のもとうたが散逸したかのような理解を提示している。

*4 前掲曹旭氏『詩品』（二六〇頁）に拠る。

*5 王叔岷氏の見解の引用は、前掲曹旭『詩品集注』、二六四～二六五頁に拠る。また許文雨は「今人游国恩君挙左思「雑詩」「詠史」、与淵明「擬古」「詠荊軻」相比、以為左之胸次高曠、筆力雄邁、与陶之音節蒼涼激超、辞句揮灑自如者、同其風力。此論甚是（今人の游国恩君は左思の「雑詩」「詠史」を挙げて、淵明「擬古」「詠荊軻」と与に相い比べ、以為えらく左の胸次高曠にして、筆力雄邁、陶の音節は蒼涼激超にして、辞句

揮灑にして自如たる者と、其の風力を同じくす。此の論は甚だ是なり）」（引用は前掲の曹旭『詩品集注』、二六四頁）と述べている。

*6『晋書』巻九十二・文苑列伝の左思の伝を参照。

*7前掲『史記』巻四十四・魏世家に「文侯受子夏経芸、客段干木、過其閭、未嘗不軾也。秦嘗欲伐魏、或曰、魏君賢人是礼、国人称仁、上下和合、未可図也。文侯由此得誉於諸侯（文侯子夏に経芸を受け、段干木を客とす、其の閭を過ぐるや、未だ嘗て軾せずんばあらざるなり。秦嘗て魏を伐たんと欲して、或るひと曰く、魏君は賢人もて是れ礼し、国人仁を称し、上下和合す、未だ図るべからざるなり。文侯此れに由りて誉（ほまれ）を諸侯に得たり）」（一八三九頁）とみられる。

*8魯仲連の伝は、『史記』巻八十三・魯仲連鄒陽列伝に詳しいが、非常に長文であるため、ここでは概括して紹介することとしたい。

秦軍が趙の都である邯鄲を包囲していた際、それを救わんとした魏・安釐王が客将の新垣衍を派遣した。新垣衍は、趙の平原君を通じて、趙の孝成王から秦の昭襄王に「帝」となるように勧めれば、事が収まるであろうことを説いた。しかしながらたまたま居合わせた魯仲連は平原君に願い出て、新垣衍への叱責を約束し、魯仲連は新垣衍に対して、趙を救う最善の方法は、魏と燕、さらには斉と楚が一丸となって秦に抵抗すべきこと、秦王が帝となることの不徳を説明し、それを納得させた。それを知った秦軍は、諦めて兵を五十里引かせ、さらに信陵君が魏軍を率いて秦軍を攻撃を仕掛けたため、秦軍は包囲を解いて撤退した。平原君は魯仲連に褒美を与えようとしたが、魯仲連は拒否した。

*9前掲『史記』（二四七七頁）

*10 前掲『史記』（二四六五頁）

*11 前掲『史記』（二四五九頁）

*12 前掲『義門読書記』巻四十六、「文選 詩」の「張景陽詠史詩」（下冊、八九三頁）の条を参照。

*13 前掲『義門読書記』巻四十六、「文選 詩」の「左太冲詠史詩」（下冊、八九二頁）の条を参照。

*14 栄啓期については『列子』天瑞篇に、「孔子遊於太山、見栄啓期行乎郕之野。鹿裘帶索、鼓琴而歌（孔子 太山に遊び、栄啓期の乎郕の野に行を見る。鹿裘にして索を帶にす、琴を鼓して歌う）」（楊伯峻撰『列子集釈』新編諸子集成、第一輯、中華書局、一九七九年、二二頁）とみえる。また、原憲については『荘子』讓王篇に「原憲笑曰、夫希世而行、比周而友。学以為人、教以為己、仁義之慝、輿馬之飾、憲不忍為也（原憲笑いて曰く、夫れ世に希（こいねが）いて行い、比周して友とす。学ぶは以て人の為にし、教うるは以て己の為にす、仁義の慝（とく）、輿馬の飾りは、憲為すに忍びざるなり）」（『荘子集解・荘子集解内篇補正』（中華書局、一九八七、九七七頁）とみえる。なお、両者を「貧士」というカテゴリーに括る発想は、既に西晋・皇甫謐が『高士伝』において、その序に「高讓之士、王政所先厲濁激貪之務也（高讓の士、王政の先んずる所にして厲濁激貪の務めなり）」（前掲『高士伝』序、一葉）と述べる観点から、両者を巻上に採録している通りである。また『高士伝』が淵明の愛読書であることは、本論の第二章「陶淵明の「集聖賢群輔録」を巡る一考察」の第三節「陶淵明の読書の軌跡」を参照されたい。これは、陶淵明の「貧士」の選定における発想の影響や当時の貧なる生き方の価値の向上など、様々な興味深い問題を含んでいるが、そうした点はひとまず本論では言及しない。

*15 陳守業「試論左、陶詠史詩的歴史地位」（『阜陽師範学院学報』社会科学版、一九八四年）

*16 大立智砂子「陶淵明の仮託詩における一人称表現――詠史詩および「形影神」を中心として」（『中国文学研

究』三三、二〇〇七年）

*17『列女伝』巻二・賢明篇（四部叢刊初編縮印本、〇一五冊、三一頁）

*18 第四句の「非商復非戎」は、従来日本の訳注書の類において、釈清潭氏を除いて「商」字を商売として、「戎」字を戦争と解釈している（『陶淵明集』（『国訳漢文大成』第十五巻、続文学部、第一輯上、日本図書センター、二〇〇〇年、四八頁参照）。否定の対象ではあるが、そもそも中国の士大夫が志向する可能性のあるものとして、商売と解するのはどうか。中国の注釈書の類ではその多くが、程伝の「孔子適宋、老子適戎」（丁福保『陶淵明詩箋』芸文印書館、一九七七年、一三六頁）を引いて、「商」字を孔子に因んだ地とし、「戎」字を老子が関を出て向かった地として解釈していて、商売を連想させるものはみられない。また、たとえば曹丕、字は子桓の「折楊柳行」においては、「老聃適西戎、于今竟不還」（夏伝才・唐紹忠校注『曹丕集校注』建安文学全書、河北教育出版社、二〇一三年、四一頁）とみえる。また、『三国志』巻二十・楚王彪伝にみられる裴松之注には、石崇、字は季倫の「答曹嘉詩」が引用されており、そこでは「孔不陋九夷、老氏適西戎」（中華書局、一九五九年、五八七頁。以下、『三国志』の引用は該書に拠る）とみえるように、「戎」字は当時の用語傾向からも確かに老子を彷彿させるものであり、加えて、孔子と老子を対偶の関係とする例もみられることから、中国の解釈に従うこととしたい。

*19 汲古閣本・曽集本・湯漢本・李公煥本なども、「春」字に作っているが、ここでは現行『三国志』巻十一・田疇伝に従うこととする。

*20 淵明が注目する田子泰の事跡は、概ねここまでとするのが李公煥以来の定説である。ただし、『三国志』巻十一・田疇伝に引かれる「先賢行状」の論功表には、曹操が田子泰の烏桓征討の功績を称えて、「疇文武有効、

節義可嘉（疇文武に効有り、節義嘉すべし）」（三四二頁）とみられ、曹操との関係も含めて捉える見解として、元・呉師道は『呉礼部詩話』において、「按疇始従劉虞、虞為公孫瓚所害、誓言報讐、卒不能践、而従曹操討烏桓、節義亦不足称。陶公亦是習世俗所尊慕爾（按ずるに疇始め劉虞に従うも、虞は公孫瓚の害する所と為る、誓いて報讐を言うも、卒に践むこと能わず、而して曹操に従いて烏桓を討つ、節義も亦た称するに足らず。陶公亦た是れ世俗の尊慕する所に習うのみ）」（『呉礼部詩話（雑説附）・東坡詩話録』叢書集成初編、台湾商務印書館、一九三六年、二頁）と述べている。呉氏は田子泰が曹操に助言して烏桓征討の功績を挙げたことを批判的に捉え、そのような田子泰を取り上げた淵明を世俗的と看做すが、本論では田子泰と曹操の関係に注目することが、淵明の意図を掬い取っているとは考えない。

*21 一海氏前掲『陶淵明』（一一二頁）

*22 前掲『史記』巻八十六・刺客列伝では「旁若無人者」（二五二八頁）に作る。

*23 大立氏前掲「陶淵明の仮託詩における一人称表現――詠史詩および「形影神」を中心として」を参照。また大立氏は同論において、詠史詩における「我」について、「作中人物と作者は、作品の中で渾然一体となっている。一人称「我」の使用は、その一体感の表れでもある」とも指摘している。

*24 古直氏『陶靖節詩箋定本』巻四（『層冰堂五種』国立編訳館中華叢書編審委員会、一九八四年、三五五頁）に拠る。

*25 前掲『漢書』（二七二九頁）

*26 前掲『史記』（二八七七頁）

*27 詳しくは拙稿「陶淵明「擬古」詩其一再考」（『筑波中国文化論叢』第三三、二〇一四年）を参照。なお、こ

の論考の執筆当時は、「擬古」其一と其八における連関には言及できなかったが、その論で試みた私訳に若干の修正を加えたものを挙げておく。なお、語り手が旅から帰り、郷里において、かつての旅の様子を回想しているものと捉えている。

窓の下で盛んに咲き誇っていた蘭、座敷の前でこんもりと茂っていた柳。かつて君と別れた時には、こんなにも長旅になるとはおもいもしていなかったよ。

門を出たわたしは万里をゆく旅人となり、道半ばで（李陵のごとき）よき友に巡り会った。彼が何も言わないうちに真っ先に心酔したよ、酒杯を酌み交わす必要すら無かったね。

そして今となっては、蘭は枯れ果て柳も衰えてしまい、かくして（長過ぎた旅によって）君にはこの一緒に隠棲する誓いに背かせることになったようだ。

挨拶を送ろう　少年たちよ、互いの関係は誠実さを欠いたものであった。気概があって身命を賭した関係ならば、離れ隔たっていたことなど何も問題ないはずだが。

第五章　『陶淵明集』の異文について

はじめに

陶淵明の詩文は、文字の異同が甚だ多い。それは夙に宋代においても問題視されており、蔡寛夫の『詩話』では、次のように述べられている[*1]。

淵明集世既多本、校之不勝其異、有一字而数十字不同者、不可概挙（淵明集　世に既に本多くして、之を校ずるにも其の異に勝えず、一字にして数十字の同じからざる者有りて、概（すべ）ては挙ぐるべからず）。

世に様々な陶集が通行し、「一字」における異同が「数十字」に及ぶものもあって、その全ては挙げ得ないと慨歎している。

現在、その「数十字」に及ぶ異同のあった具体的な作品については知るよしもないが、淵明詩文における膨大な異同を少なからず残しているのが、いわゆる汲古閣本『陶淵明集』であるだろう。これは既に袁行霈氏によって検討が加えられており、汲古閣本に示される異同・異文に関する注の総数は、都合七百箇所の多きに及ぶ。だが、その混乱が生じた根本的な原因を探る研究は、あまり行われていない。こうした観点の数少ない言及として、田暁菲氏は次のように述べている[*2]。

宋人従自己的審美眼光出発、極口称陶淵明「平淡」、而陶淵明的詩文風格也似乎確実符号宋人所謂的「平淡」、但是在很大的程度上、這份「平淡」正是宋人自己通過控制陶集本文異文而創造出来的（宋人は自己の審美の観点から出発して、殊更に陶淵明の「平淡さ」を称えており、陶淵明の詩文スタイルは確かに宋人のいわゆる「平淡」に合致しているが、しかしそれは大部分において、この「平淡」に即して宋人自身の観点から陶集本文を操作しながら異文として創作されたものである）。

宋代の人々にとっての「平淡」を軸とした淵明観のもとで異文が創作されたと見解を示す。淵明がまさに脚光を浴びた宋代において、そういった側面も確かにあり、後に詳述する通り、たとえば、「飲酒」詩其五の「悠然見南山」の句には、蘇軾の創作的側面が窺える。だが、「飲酒」詩其五が『文選』においては「雑詩」と題されている点などは、後人の創作的立場からのみでは説明し得ない。加えて、「飲酒」詩其五における異同・異文に検討を加えてみると、その異同・異文にも淵明独自と看做される表現の要素が窺える場合がある。

さて、本論では、陶集における大量の異同・異文の存在の意味について、一つの仮説を立てることとしたい。それは、後人の創作とする観点とは別に、淵明の手による推敲を要因とすると考えるものである。もとより陶集には、古く梁代以前において、既に六巻本と八巻本という異なるテキストが存在していた。そして、この二つの陶集を古いエディションと新しいエディションとして捉えるならば、陶集における異同・異文の意味もおのずと明瞭化されるように思われるのである。つまり、淵明が既発表の作品に対し、推敲を加え、それが後に改めて通行したからこそ、陶集には大量の異同・異文が存在し、その異同・異文にも淵明らしい表現の要素が窺えるもの

と考える。

本論の最終的な目標は、陶集や『文選』における淵明詩文の異同・異文の意味を根本から捉え直し、新たな視点から陶集成立の過程を立証することにある。本章ではその手始めとして、改めて汲古閣本『陶淵明集』に関する先行研究、またその異同の実態などを整理することから始める。迂遠な方法ではあるが、汲古閣本の異同・異文を検討を加えていく上で、該書がいかなるテキストであるかを検討しておくことは必須の作業であるだろう。その上で「飲酒」詩其五の異文・異同に具体的に検証を加え、その詩歌制作における推敲の過程に迫る。

一　宋版・汲古閣本について

現存する陶集において最も古いテキストの一つで、纏まった体裁を残しているのが、通称、汲古閣本と呼ばれる『陶淵明集』である。このテキストは、全十巻で構成されており、二〇〇三年六月に北京図書館出版社より中華再造善本シリーズの唐宋編・集部に収録されて影印出版された。近年、許逸民氏は汲古閣本に関する疑問点を挙げて、次のように述べている[3]。

今蔵中国国家図書館的宋刻遞修本『陶淵明集』十巻、末附「本朝宋丞相私記」、無疑是経宋庠重新編定。但此本否就是宋庠原刻的遞修本、或他種北宋刻本的遞修本、乃至南宋刻本的遞修本、今人頗存疑問（現在、中国国家図書館に所蔵されている宋刻遞修本『陶淵明集』十巻の巻末に、「本朝宋丞相私記」が附されていることから、これが宋庠によって新たに編成されたものであることは間違いない。ただし、この本が宋庠の

原刻の逓修本であるのか、あるいはそれ以外の北宋刻本の逓修本ないし南宋刻本の逓修本であるのかは、今人が頗る疑問を残すところである）。

宋庠（九九六～一〇六六）、字は公序は、北宋期の宰相であり、弟の宋祁とともに、世に「二宋」と称えられた有力者である。また「逓修本」とは、使用済みの版木を補修し、それで再び印刷されたテキストのことである。

さて、汲古閣本の刊行時期については、巻末に「読山海経」其十の第三句、「形夭無千歳」の「夭」字が「天」字の誤りであることを指摘した「曽紘説」が引用されており、そこに「宣和六年（一一二四年）七月」とあるから、それ以降と考えてよい。ただ、本文にその訂正は反映されていないことから、その内実はより遡る可能性もあるだろう。また『中国版刻図録』が、汲古閣本の諱忌字は北宋期のものではないこと、またその諱忌字や版心にみる刻工名が、南宋初年に浙江で刊行された郭注『爾雅』や『六臣注文選』などと多く一致することから、「因疑此本亦当為明州本（したがって恐らくはこの本もやはり明州本と考えるべきであろう）」[24]と述べるように、汲古閣本は南宋（一一二七～一二七九）期に刊行されたものとみるのが妥当である。

次に、汲古閣本が宋庠の原刻本ないし逓修本であるのか否か、といった点について、本論では汲古閣本の最終的な校訂者ないし編者は宋庠ではないが、しかし無名の編者が宋庠本を参照しながら、あるいは底本としながら校訂したテキストであると考える。さらにいえば部分的には宋庠本の原刻本に由来するものを用いている可能性もあると捉えている。

まず、汲古閣本の最終的な編者が宋庠ではないという点について、汲古閣本において、そのことが示唆される例を挙げよう。

①諧気冬輝［宋本作暄。］（巻一、「贈長沙公族祖」第十一句）

②菊為［宋本作解］制頽齢。（巻二、「九日閑居」第十句）

③率爾［宋本作共。一作共爾］賦詩。（巻二、「遊斜川」序）

④情通［宋本作懐］万里外（巻二、「答龐参軍」第十三句）

⑤歳月相催逼［宋本作従過］（巻三、「飲酒」其十五・第七句）

⑥述酒一首［儀伙造杜康潤色之。宋本云此篇与題非本意。諸本如此誤。黄庭堅曰、述酒一篇蓋闕、此篇似是読異書所作、其中多不可解。］（巻三、題下注）

⑦素礫皛［宋本作襟輝］脩渚（巻三、「述酒」第五句）

⑧「但覓［宋本作念］梨与栗」（巻三、「責子」第十二句）

汲古閣本における七百箇所以上に及ぶ注には、たとえば、巻三の「問来使」の題下に「『南唐本』有此一首」と注されており、巻八の「与子儼等疏」において、「済北泛稚春［『南史』作幼春。『宋書』作汜［氾］春］」と注されているように、具体的な書名を示す場合もある。しかし、この三書と先に挙げた「宋本」の八例以外は、「一作某」「又作某」「一本作某」などで、校勘一本の具体名は示さない。それでは『南史』や『宋書』は二十四史の中のそれであるが、「宋本」は何を意味するのであろうか。

「宋」字の意味としてまず浮かぶのは時代としての意味か、あるいは袁行霈氏が「其所謂宋本者、当是指宋庠本（いわゆる宋本とは、まさに宋庠本を指している）」[45]と指摘している宋庠の意味であるだろう[46]。

上述の「南唐本」のように、南唐、すなわち五代十国（九〇七～九六〇）期に江南に割拠した国名ないし時代を以て、書名とする場合もあるだろう。しかし汲古閣本は遅くとも南宋期に刊行されたものである。同時代のテキストを宋代という時代の意味で「宋本」と称したと解するべきかは疑問が残る。「宋本」とはやはり宋庠本を指しているのであろう。したがって、宋庠本が校勘一本である以上、宋庠を汲古閣本の最終的な校訂者とは看做し難い。ただし、汲古閣本の最終的な編者が、他の「一作某」などとは異なって、敢えて「宋本」と称している点において、該書を特別視していたのは事実である[47]。思うに汲古閣本の編者は、宋庠の編纂したテキストを底本として主軸に据え、宋庠本の本文を採用しなかった際に、もとの形もまた残そうとしたのではないだろうか。

次に汲古閣本が部分的に宋庠本の原刻本に由来すると考える点であるが、汲古閣本の巻二の巻頭には、「陶淵明集　巻第二　詩三十首」と刻されている。だが、実際には三十一首が収録されるという極めて単純な誤りがみられる。この誤りについて、改めていえば「問来使」の題下に「『南唐本』有此一首」と注されており、これは無記名の注であるから、汲古閣本の最終的な編者のものと考えられる。つまり彼が「南唐本」から新たに宋庠本に

「問来使」を組み込んだのであり、そうだとすれば、もともと宋庠本の巻二には「問来使」を除いた三十首が収録されていたのであろう。したがって、「陶淵明集 巻第二 詩三十首」という記述は、宋庠本の名残であると思われるのである。

なお、汲古閣本に残された大量の注が、その無名の編者のみの仕事かといえば、直ちには断じかねる。⑥に挙げた「述酒一首」の題下注に「宋本云此篇与題非本意、諸本如此誤（宋本云う此の篇は題と本意に非ずして、諸本此くの如く誤れり）」とある通り、宋庠もまた陶集の編纂に当たって、注釈を附していたことは間違いない。したがって、宋庠もまた文字の異同を示し、その異同を汲古閣本の編者が反映させた可能性もあるだろう。参考までに宋庠が目睹し得たテキストについて確認しておけば、汲古閣本の巻末に附される「本朝宋丞相私記」に次のように述べられている。

右集、按『隋経籍志』、「宋徵士陶潛集九巻」、又云「梁有五巻、録一巻。」『唐志』、「陶泉明集五巻」。今官私所行本数種、与二志不同。有八巻者、即梁昭明太子所撰、合序伝誄等在集前為一巻、正集次之、亡其録。有十巻者、即楊僕射所撰。按呉氏「西斉録」、有「宋彭沢令陶潛集十巻」、疑即此也。其序並昭明旧序、誄伝等合為一巻、或題曰第一、或題曰第十、或不署於集端。別分「四八目」、自「甄表状」杜喬以下為第十巻、然亦無録。余前後所得本僅数十家。卒不知何者為是、晩獲此本、云出於江左旧書、其次第最若倫貫……（右の集、按ずるに『隋経籍志』に、「宋の徵士陶潛集九巻」と、又云う「梁に五巻、録一巻有り」と。『唐志』に、『陶泉明集五巻』と。今官私の行う所の本数種あるも、二志と同じからず。八巻なる者有り、即ち梁の昭明太子の撰する所にして、序・伝・誄等を合して集前に在りて、一巻と為し、正集 之に次ぐ、其の録は

亡べり。十巻なる者有り、即ち楊僕射の撰する所なり。按ずるに呉氏の『西斉録』に、「宋の彭沢令 陶潜集十巻」と有り、疑うらくは即ち此れなり。其れ序 並びに昭明の旧序、誄伝等 合して一巻と為す、或いは題に第一と曰い、或いは題に第十と曰い、或いは集端に署さず。別に「四八目」を分けて、「甄表状」の杜喬以下より第十巻と為す、然るに亦た録無し。余前後に得る所の本僅かに数十家あり。卒に何れを是と為すかを知らざるも、晩くに此の本を獲れば、江左の旧書に出づると云い、其の次第は最も倫貫あるがごとし……)。

宋庠は「官私所行本数種」のほか、「有八巻者、即梁昭明太子所撰」と述べているように、梁の昭明太子・蕭統の八巻本を参照し、さらに「余前後所得本僅数十家」を参照し得た。これは、当時通行していたテキストを考える上でも重要なものといえる。そして、宋庠が底本としたのは「江左旧書」と伝えられたテキストであり、その伝承過程については唐・呉競の『呉氏西斎書目』に載せる「陶潜集十巻」に由来し、さらに、陽休之の編纂した十巻本に由来すると述べられている。

なお、汲古閣本が陽休之本系統のテキストであることは、巻七所収のいわゆる「五孝伝」や、巻九・十の「四八目」、すなわち「群輔録」などを収録していることからも明らかである。

二　汲古閣本の異同の実態

以上にみたように、汲古閣本には蕭統本などを含め、当時の様々なテキストの反映の可能性が窺われるという

点で興味深いテキストと看做すことができる。汲古閣本の異同に関して、袁行霈氏は次のように述べている。

陶集的異文在今天所能見到的最早的陶集刻本中就已出現了。拠筆者不很精確的統計、汲古閣蔵『陶淵明集』十巻本、以「一作」或「宋本作」標出的異文就有七百四十処之多、平均毎篇有六処。其中有的在「一作」後還有「又作」、没有別算。而在「一作」下、有的是単字的異文、有的是双字或整句的異文、如果按一個個字計算、其異文就更多了。以従「一作」、「又作」（如「和郭主簿」「貯」字下「一作復、又作駐、又作佇」）、「宋本作」等校記看来、它除了底本之外至少還参校了四種本子（陶集の異文は現在見られる最も早い陶集刻本中において既に現れている。筆者の不確かな統計に拠れば、汲古閣所蔵の『陶淵明集』十巻本は、「一作」や「宋本作」などで示される異文は七百四十処の多きに及び、平均すれば毎篇に六処存在する。その中、あるものは「一作」の後にさらに「又作」とあり、それは数えていない。だが、「一作」の下に、あるものは単字の異文を示し、あるものは二字、あるいは一句まるまるの異文を示す場合もあり、もし一字一字を計算すれば、その異文の総数はさらに多くなるだろう。「一作」「又作」や（たとえば「和郭主簿」の「貯」字の下に「一に復に作り、又駐に作り、又佇に作る」）、「宋本作」などの校記よりいえば、底本の他に少なくとも四種のテキストが参校されている）。

袁行霈氏は、一つの文字に対する異同として、「一作復、又作駐、又作佇」とあることから三種のテキストを数え、さらに宋庠本、それらに底本を加えて、都合五種のテキストの反映が窺えることを述べている。

こうした観点から、巻ごとにより具体的に情報を整理したのが、次頁に挙げた「陶集異同表」である。

陶集異同表

	作品様式	作品数	本文（題・序・詩など）	割注箇所	異同比率（概数）	使用版本数
巻一	四言	9	1546字	86	5.5%	～4～
巻二	五言	31	2897字	171	5.9%	～4～
巻三	五言	39	3035字	171	5.6%	～4～
巻四	五言	48	3002字	146	4.8%	～3～
巻五	賦・辞	3	2072字	68	3.2%	～4～
巻六	記・伝・賛・述	13	2253字	39	1.7%	～3～
巻七	伝・賛	5	1917字	11	0.5%	～2～
巻八	疏・祭文	4	1433字	38	2.6%	～3～
巻九	四八目	1	4013字	10	0.2%	2～
巻十	四八目	(1)	1240字	0	0%	1～
総数	十五類	153(4)作	23408字	740	3.0%	

なお、表の「使用版本数」については、底本については宋庠本と捉え、それを含んで「4」本、あるいは「3」本の校訂書を利用したということである。また「使用版本数」は各巻ごとに、厳密にいえば作品ごとに異なる可能性がある。その点について、まず、巻ごとの「使用版本数」の根拠となる例を挙げる。

①ⅰ爰采春花［一作ⅱ華。一作ⅲ爰来春苑。］、ⅳ載警［一作ⅴ散。又作ⅵ驚。］秋霜［一作ⅵ爰采春苑、載散秋霜］。

（巻一「贈長沙公族祖」第七聯）

②櫚［一作門、又作空、或作簷］庭多落葉、慨然知已秋。

（巻二「酬劉柴桑」第二聯）

③盥濯［一作灌］息簷下、升酒散襟［一作劬。又作衿。又作襟］顔。

（巻三「庚戌歳九月中於西田穫早稲」第八聯）

④傾家時［一作特、又作持此］作楽、竟此歳月駛。

（巻四「雑詩」其六・第五聯）

⑤農人告余以春及［一無及字。一作暮春。又作仲春］。

（巻五「帰去来兮辞」）

⑥屋舎儼［一作晏。一作魚］然。

（巻六「桃花源記」）

⑦言思其来而訓［一作謂］之。

⑧倹笑［一作非。又作美］王孫。　（巻七「天子孝伝賛」）

⑨隕丘［一作立］受延嬉。　（巻八「自祭文」）

（巻九「群輔録」）

①の出句は、本文のⅰ「爰采春花」のほか、注のⅱ「爰采春華」に作るテキスト、さらにⅲ「爰来春苑」に作るテキストがあったことが示されており、最後に一聯全体をⅵ「爰采春苑、載散秋霜」と引用しながら異同を示している。これは、順当にⅱとⅴとが結ばれ、ⅲとⅵが結ばれるものと単純に考えれば、最低でも四種のテキストで校勘作業が済む。しかしながらⅱとⅵが結びつくことも考えられようし、それが右に挙げた句以外の句の異同も合わさるとなると、校勘テキストの数量は果てもなく多くなっていく。ただ、実際にはある程度校勘テキストも限定しながら作業していたのであろう。それ故に「陶集異同表」の「使用版本数」については、ひとまず各巻ごとに、最も異同の多い句を挙げつつ、さらに校勘テキストがそれ以上であった可能性、作品ごとにそれ以下であった可能性も考慮して、「～4～」（巻一）と示すこととした。他の巻についても同様の方法で考えている。なお、文字の異同の無い作品は、巻二は「問来使」の一篇のみで、巻四は「擬古」詩九首の其七、「雑詩」十二首の其九、「読史述九章」第一章の「夷斉」の一篇の都合三篇のみである。

また、「五孝伝」や「群輔録」を収録しなかったテキストを参照しながら、他の詩文を校勘していた可能性も

考慮しなければならない。実際、「五孝伝」の文字の異同を示す例は、「天子孝伝賛」において、「言思其来而訓［一作謂］之。」とあり、「諸侯孝伝賛」では「固以［一作已］賢矣」とある。「群輔録」では、「隕丘［一作立］受延嬉」や「陽侯為江海［一本作江湖］」などとあり、これらの例のごとくに一つの文字・語句に対して、複数の異同が示される例は無く、巻十の「群輔録」に至っては、異同を示す注もみられない。つまり、底本ともう一つのテキストの都合二種しか参照し得なかった可能性があるだろう。無論、様々なテキストを参照した上で異同が無かったことも考えられる。だが、蕭統が「五孝伝」や「群輔録」を採録しなかったことの後世への影響も含め、南宋においても等閑視する発想があった[38]。これらを踏まえれば、両作を収録していなかったテキストもまた用いていたと考える方が有力であるだろう。また、以上の巻ごとの比較において、とりわけ巻一から巻四において異同が多いことが窺える。

さて、袁行霈氏は汲古閣本（及び曽集本）の異同については、次の四つの類型があると述べている。

①「音同、音近、形近或異体字（音が同じか、類似しており、字形が近似し、あるいは異体字のもの）」
②「文字顛倒衍奪（文字が顛倒しているか衍奪しているもの）」
③「文字不同意思相近（文字は異なるが意味が接近しているもの）」
④「文字不同意思差異（文字が異なり意味上に相違があるもの）」

①や②の異同の類型は、たとえば、「停雲」の「願言懐人［一作仁］」や「以招［一作怡］余情」、「丙辰歳八

月中於下潠田舍穫」の「悲風愛静夜［一作夜静］」といった例である。これは、一つ一つの例に対して、さらなる考証を要するものであるが、簡潔にいえばテキストが後生に伝承されていくなかで誤刻として生じた異同が多い。本論でとくに注目したいのは④の異同の類型である。袁行霈氏はまた次のように述べている。

一類関係到修辞、如「飲酒」詩其五、「悠然見南山」与「時時望南山」之間的差別早已成為一個重要的話題了。這類例子還可以挙出很多、如「雑詩」其二「日月擲人去、有志不獲騁」、一作「掃人去」。「和郭主簿」其一「藹藹堂前林、中夏貯清陰。」一作「復清陰」、又作「駐清陰」。這類異文很難判断孰是孰非、校注者一般説来是取自認為修辞較好的、但孰好孰差所見又有所不同、于是所取也不同。這類異文只好両存、不必強求一致（一類は修辞に関わるもので、たとえば、「飲酒」詩其五の、「悠然見南山」と「時時望南山」の相違のように早い段階から一つの重要な問題を提起していたことである。こうした例はまだまだ挙げることができ、たとえば、「雑詩」其二の「日月擲人去、有志不獲騁」は、あるテキストは「掃人去」に作っていた。「和郭主簿」其一の「藹藹堂前林、中夏貯清陰。」は、あるテキストは「復清陰」に作り、また「駐清陰」に作っていた。この類の異文は誰が正しく誰が誤っているかを判断するのが非常に難しく、校注者は一般的に修辞上で良いものを採用するが、何を良く何が相違するとみるかは人それぞれ相違し、採用する本文も相違している。この類の異文はただ二つとも保存するがよく、必ずしも敢えて一つに限定しようとすべきではない）。

袁行霈氏が言及する「飲酒」詩其五における異文の「時時望南山」の句は、汲古閣本の本文である「悠然見

南山」の句とも、音的にも字形的にも全く異なっている。つまり、陶集テキストの伝承過程において、口承によって生じた単純な誤りとは考え難い。また手抄され、版刻されるなかで起こり得る魯魚亥豕といった誤りとも看做し難い。これは一体、どのように捉えればよいのであろうか。また、袁行霈氏も述べているように、もとより詩歌作品の校勘者は、修辞的により美しく、より洗練されていると考えられる異同・異文を本文に採用する。だが、留意しなければならないのは、校勘者が敢えて改悪しようとはしないが故に、完璧なる詩句ないし詩構造が、必ずしも淵明の淵源を示しているとは限らないという点である。その点に留意しながら、「飲酒」詩其五の異文に検証を加えていくこととしたい。

三　異文にみる淵明らしさ

（1）

陶淵明の「飲酒」詩其五を汲古閣本によって、注文も含めて挙げれば次の通りである。

結廬在人境、而無車馬喧。問君何能［一作為］爾、心遠地自偏。採菊東籬下、悠然［一作時時］見［一作望］南山。山気日夕佳、飛鳥相与還。此還［一作中］有真意、欲弁已［一作忽］忘言。

（巻三）

これらの異同・異文のうちで注目したいのが、第六句の「悠然［一作時時］見［一作望］南山」と、第九句の

「此還［一作中］有真意」である。まず第九句について確認しておけば、たとえば、近年の訳注書などでは概ね「此中」が採用されている。これは、日本・中国における淵明研究において陶澍の校訂したテキストが大きな信頼を得てきたことが、その所以の一つでもあるだろう。また近年、坂口三樹氏は、「此中」について次のように述べている。[29]

「此中」は、「ここ」の意（入谷義高氏の説）、『世説』には「文学篇45」〈資料14〉をはじめ七例見えるが、すべて会話文中の用例である。詩の例としては、漢の「献帝初童謡」に一例あるのみ。

「此中」は、淵明詩文全体を見渡してみても、本詩に一例しかみられないという点において、「此中」から淵明との内的繋がりは、明瞭に浮かび上がってくるとはいえない。しかし、この指摘は淵明詩文全体にみられる口語表現を挙げる中での一例であり、その点でいかにも淵明らしい要素を含むものであることは間違いない。

他方「此還」は、汲古閣本が本文として採用しており、『文選』とも同様であるが、淵明研究自体においては、あまり言及されていない。

たとえば、『文選鈔』は、「真謂道之本也。鳥日晩還山。是帰栖集息其労倦。故言「有真意」也（真とは、道の本を謂うなり。鳥は日晩れて山に還る。是れ栖に帰りて、集いて其の労倦を息う。故に『真意有り』と言うなり）」[30]と解しており、花房英樹氏は「この鳥の帰る姿にこそ、私の本意にかなうものがある」[31]と訳している。

鳥が夕べに住み処に帰りゆくということ、これは淵明詩文においては、次のような例との通底が窺える。「庚戌歳九月中於西田穫早稲」詩を挙げよう。

開春理常業　開春　常業を理むれば
06歳功聊可観　歳功　聊か観るべし
晨出肆微勤　晨に出でて微勤を肆し
08日入負耒還　日入れば耒を負うて還る

（巻三・全二十句）

淵明は、朝には働き、夕べには住み処に帰るといった、何気ない日常を表現の対象としている。こうした例は、ほかにも次のようにみることができる。

豈無他好　豈に他に好しきなからんや
06楽是幽居　楽しみは是れ幽居
朝為灌園　朝には園に灌ぐを為し
08夕偃蓬廬　夕には蓬廬に偃す

鼓腹無所思　鼓腹して思う所無し
28朝起暮帰眠　朝に起きて暮に帰り眠る
既已不遇茲　既に已に茲に遇わず
30且遂灌我園　且く遂に我が園に灌がん

（「答龐参軍」巻一・全四十八句）

（「戊申歳六月中遇火」巻三・全三十句）

これらの表現は、「擊壤歌」において「日出而作、日入而息。鑿井而飲、耕田食。帝力何有於我哉（日出でて作し、日入りて息ふ。井を鑿ちて飲み、田を耕して食らふ。帝力何ぞ我に有らんや）」[12]とあるような、淵明の尊崇する尚古の人々の生き方に倣ってのことであるだろう。つまり、淵明は「飲酒」詩其五の「此還有真意」において、夕暮れに住み処に帰りゆく鳥に、自己の営むべき生き方を重ね、そこに「真意」を獲得したと捉えられる。したがって、「此中」と「此還」には、両者いずれにもに淵明的要素が内在されている。

それでは、第六句の「悠然［一作時時］見［一作望］南山」はどうであろうか。第六句は、次のⅠからⅣのように作るテキストがあった可能性がある。

Ⅰ　採菊東籬下　菊を採る　東籬の下
06悠然見南山　悠然として南山を見る

Ⅱ　採菊東籬下　菊を採る　東籬の下
06悠然望南山　悠然として南山を望む

Ⅲ　採菊東籬下　菊を採る　東籬の下
06時時望南山　時時　南山を望む

Ⅳ　採菊東籬下　菊を採る　東籬の下

06　時時見南山　時時　南山を見る

Ⅰは近年の日本・中国でも最も馴染み深い作られ方であり、Ⅱは『文選』や『芸文類聚』における作り方である。まずは蘇軾（一〇三七～一一〇一）の言及を確認しておくこととしたい[*13]。

陶潛詩、「採菊東籬下、悠然見南山」採菊之次、偶然見山、初不用意、而景与意会、故可喜也。今皆作「望南山」（陶潛の詩、「菊を採る　東籬の下、悠然として南山を見る」は菊を採るの次に、偶然にして山を見て、初め意を用いず、而るに景と意会す、故に喜ぶべきなり。今皆「南山を望む」に作る）。

淵明は菊を摘みながら、たまたま山を見たのであり、初めから「意」図的に眺めていたのではない。偶然にも山を眺め、（思いがけず）景物と「意」が合致したからこそ、歓んだ。現行本は全て「南山を望む」に作っている、と述べられている。なお、「望」字の意味は、意識的にじっくりと眺めることであり、「見」字は、それよりも受動的で、自ずと目に入ってくるような意味としての眺めるである。

蘇軾の言及した「悠然見南山」の句は、「飲酒」詩其五の全体の動的展開が考慮されているという点で最も美しい作り方であると考えるが、しかし、Ⅰの「悠然見南山」の句は、近刊の川合康三氏らの『文選』において、先の蘇軾の言説を解説した後、「蘇軾以前には「望」の字が通行していたと思われる[*14]」と指摘している。またⅢの「時時望南山」の句は、袁行霈氏が言及するなかで挙げていたものである。ただ、汲古閣本において「悠然」

の異文に「時時」があり、「見」字の異同に「望」字が示されているからといって、「時時望南山」の作りに限定するのは早計である。というのも、右に挙げた川合氏らの指摘からも明らかなように、より古くはⅡの「悠然望南山」のように作っていた蓋然性が高い。そうだとすれば、かつては「悠然」の異文に「時時」があり、「望」字の異同に「見」字があったものとして、Ⅳの「時時見南山」に作っていた可能性も考慮しなければならない。そして、この句を考慮するならば、蘇軾が「悠然望南山」の句の「望」字を「見」字に改めた過程も、今一度捉え直す余地があるものと思われる。

（2）

それでは、Ⅲ・Ⅳにおける「時時」の基本的な意味を確認していく。「時時」は十三経にはみられず、古くは史書にままみられるものである。まずは『史記』から二例みてよう。

高祖為亭長、乃以竹皮為冠、令求盗之薛治之、時時冠之、及貴常冠、所謂「劉氏冠」乃是也（高祖　亭長為りしとき、乃ち竹皮を以て冠と為す、求盗をして薛に之きて之を治めしむ、時時　之を冠して、貴きに及んで常に冠す、所謂る「劉氏冠」は乃ち是れなり）。

（巻八・高祖本紀[*15]）

後聞沛公将兵略地陳留郊、沛公麾下騎士適酈、生里中子也、沛公時時問邑中賢士豪俊（後に沛公　兵を将いて地を陳留の郊に略すと聞き、沛公の麾下の騎士、適たま酈生の里中の子なり、沛公は時時に邑中の賢士

豪俊を問う）。

（巻九十七・酈生陸賈列伝[*16]）

前者の例は、吉田賢抗氏が「時々」、つまり時折・まれにの意味で解しており、一方で後者の例について水沢利忠氏は、「しばしば」の意味で解している[*17]。また『漢書』では次のような例がみられる[*18]。

良多病、未嘗特将兵、常為画策臣、時時従（良　多病にして、未だ嘗て特だ兵を将いず、常に臣と画策を為し、時時従う）。

（巻四十・張陳王周伝[*19]）

ここでは、しばしばと理解するのが適当である。良は常に臣下と作戦を練り、その作戦にしばしば従っていたのであろう。また『三国志』魏書では次のような例もみられる。

其言語与句麗大同、時時小異。漢初、燕亡人衛満王朝鮮（其の言語は句麗と大同にして、時時に小異あり）。

（巻三十・魏書・烏丸鮮卑東夷伝・東夷・東沃沮[*20]）

ここでは、まれにの意味で用いられており、東沃沮（国名）の言語は、高句麗と大体同じで、まれに些細な点で異なることがあるという。

続けて、淵明以前、及びその周辺の詩作に目を通せば、四例ばかりみることができる。まずは「古詩為焦仲卿妻作」並序の例を挙げる[*21]。

人賤物亦鄙　人賤しく物も亦た鄙し
不足迎後人　後人を迎うるに足らず
留待作遺施　留待して遺施と作す
於今無会因　今に於いて会因無し
時時為安慰　時時　安慰を為し
久久莫相忘　久久　相い忘るる莫かれ

（『玉台新詠』巻一）

夫の府吏が母に妻との離縁を迫られ、府吏が咽びつつ、妻にそのことを告げた後の場面である。妻は離縁を受け入れ、自分のつまらぬ持ち物は後妻に全て差し上げたいと伝える。それに次いで、「時時」とあり、ここでは、ときどきは慰めの言葉を寄せて、いつまでも忘れないようにして下さい、とうたわれている。

また、陳琳の「飲馬長城窟行」では次のようにみられる[*22]。

作書与内舍　書を作りて内舍に与う
便嫁莫留住　便嫁して留住する莫かれ
善侍新姑嫜　善く新しき姑嫜に侍り
時時念我故夫子　時時　我が故夫の子を念え

（『玉台新詠』巻一）

長城建設の工事の最中、故郷に何時帰れるかも分からず、生き長らえるかも分からない男が、故郷に残す妻に手紙を出す。彼は妻に向けて、再婚するのがよく、いつまでも我が家に留まることがないようにと、新しい姑によくよく尽くし、ときどきは元の夫の子供のことを思い出せ、とうたわれている。

さらにまた、『晋書』巻四十三・山濤伝に附載されるその子、山簡（生没年不詳）、字を季倫の伝において、童児が彼の様子を諧謔的にうたうなかで次のようにみられる[*23]。

山公出何許　山公　何許に出づ
往至高陽池　往き至る　高陽の池
日夕倒載帰　日夕には倒れ載りて帰す
酩酊無所知　酩酊して知る所無し
時時能騎馬　時時　能く馬に騎す
倒著白接䍦　倒(さか)しまに白接䍦を著く
舉鞭向葛彊　鞭を舉げて葛彊に向いて
何如并州児　何くにか如(ゆ)く　并州児はと

（『晋書』巻四十三）

「白接䍦」は、白鷺の羽で装飾した帽子をいう。「葛彊」は、并州に住む山簡のお気に入りの将であり、「并州児」は、彼に対する愛着を示す呼称である。ここでの「時時」は、酔いつぶれた山簡が、しばしば馬に乗りながら、逆さまに「白接䍦」を被っているとうたっている。

最後に「華山畿」二十五首・其二十二では次のようにみられる[*24]。

松上蘿　　松上の蘿
願君如行雲　願わくは君　行雲の如くして
時時見経過　時時　経過を見よ

（『楽府詩集』巻四六）

このうたは『古今楽録』に拠ると、「華山畿者、宋少帝時懊悩一曲。亦変曲也……」とあるように、宋小、姓は劉、名は義符、彼が劉宋の第二代皇帝の頃の民謡である。これは、悲恋のうちに亡くなった少女を「松上蘿」に見立て、それを「君」と名呼びつつ、どうか空に漂う雲のように、しばしば往来の様子を眺めよ、とうたわれている。

以上のように「時時」は、「いつも」「しばしば」といった意味で解されることもあれば、それとは逆に「ときどき」や「まれに」といった意味で解される場合もある。いずれにしても副詞として動作の頻度を表すが、その意味するところは文脈によって、多いのか、それとも少ないのか、いずれとも理解できるような曖昧さがある。また、史書ではままみられるものの、詩作品における用例はそれほど多くはなく、あったにしても楽府などの民謡的詩作に限定される。これらのことから、「時時」は、詩語としての定着度は希薄で俗語的表現であったのであろう。

それでは、「飲酒」詩其五の第六句の異文は、Ⅲの「時時望南山」のように作るのが妥当なのか、それともⅣの「時時見南山」に作るのが妥当なのであろうか。

まず、Ⅲの「時時望南山」の場合、いつも、あるいは、まれに、南山をじっくりと眺めていると解され、一見する限りでは一句の筋も通っているように思える。だが、そもそも副詞としての「時時」を「望」字にかけて用いるのは、詩的表現の相性として馴染むものなのだろうか。

詩作において「時時」と「望」字が一句中に現れる例は、現存する先秦から南北朝期の詩作においてみられず、晩唐に至って、陸龜蒙（？～八八一）に二例ばかりみられるのみである。「紀事」詩を挙げよう[*25]。

晴来露青靄　晴れ来たりて青靄を露わして
千仞欠尋丈　千仞　尋丈を欠く
臥恐玉華銷　臥しては恐る　玉華の銷くるを
時時推枕望　時時　枕を推して望む

（巻三）

これは烏程県の卞山において病床の身でうたわれた作品である。なお、「玉華」は、氷雪をいう。ここでは、床に伏しつつ卞山に雪崩が起こるのを恐れつつ、その様子を、「時時」に枕を移動させながら「望」、すなわち眺めている、と用いられている。ただ、これは厳密にいえば「時時」が副詞として直接かかるのは「推」字であるだろう。少なくとも「望」字単独にかかる例ではない。次に「贈遠」詩の例をみてみよう[*26]。

妾思冷如簧　妾思う　冷たること簧の如く
時時望君暖　時時　君の暖を望むと

心期夢中見　心に期す　夢中に見ゆるを
路永魂夢短　路永くして魂夢短し

（巻三）

閨怨のジャンルに属すこのうたでは、冷え冷えとした「簧」との対比として、「時時」に、あなたの温もりを「望」む、つまり、求めていると用いられている。

この二つが唐代までの詩作で「時時」と「望」字が一句中に現れる例であるが、眺めるの意味としての「望」字に、直接的に「時時」にかかる例ではない。加えて両例ともに陸亀蒙のものであることからすれば、「時時」が「望」字にかかる措辞自体が一般的とはいえない。そうだとすれば、「時時」を眺めるの意の「望」字にかけるのは、詩的表現として馴染む表現ではなかったことが窺える。したがって、「飲酒」詩其五・第六句の異文もまた「時時望南山」に作られていた蓋然性は低い。

他方「時時」が、眺める意味の「見」字にかかる例は、先に挙げた「華山畿」の一例、また淵明詩においても二例みることができ、さらに唐代までの詩作においても三例ばかりみることができる[*27]。先に後世の用例に目を通すこととしたい。まずは沈佺期（六五六～七一六）の「奉和春初幸太平公主南荘応制」詩の例を挙げる[*28]。

往往花間逢綵石　往往　花間に綵石に逢い
06 時時竹裏見紅泉　時時　竹裏の紅泉を見る
今朝扈蹕平陽館　今朝　扈蹕す　平陽館
08 不羨乗槎雲漢辺　羨まず　槎に雲漢の辺に乗るを

（巻三）

『唐詩紀事』巻九に拠ると、景竜三年二月十一日の作品である。また詩題の「太平公主」とは高宗と則天武后との間に生まれた皇女のことで、「南荘」は長安南郊の楽遊原の別荘のことである。ここでは、その別荘の類い希なる美しさをうたうなかで、「時時」、すなわち、しばしば竹藪の裏で、仙界にあるとされる「紅泉」を「見」るとうたわれている。次に李白（七〇一～七六二）の「草書歌行」の例を挙げよう[29]。

起来向壁不停手　起来　壁に向かいて手を停めず
一行数字大如斗　一行　数字　大なること斗の如し
怳怳如聞神鬼驚　怳怳として神鬼の驚くを聞くが如し
時時只見竜蛇走　時時　只だ竜蛇の走るを見る

（巻七）

長沙の年若い僧・懐素の草書の筆致を絶賛するこの作では、立ち上がって壁に向かって記した草書の様は、まるで恍惚として鬼神の驚く声を聞くようで、「時時」、すなわち、まれに竜や蛇がしなやかに滑りゆくのを「見」るかのようであるとうたわれている。最後に方干（八三六～八八八）の「和剡県陳明府登県楼」詩を挙げよう[30]。

駅路古今通北闕　駅路　古今　北闕に通じ
06 仙渓日夜入東溟　仙渓　日夜　東溟に入る
綵衣才子多吟嘯　綵衣　才子　多く吟嘯し

08公退時時見画屏　公退きて　時時　画屏を見る

（巻六五一）

高殿から景色を眺めるなかで、その街道は古から今に至るまで宮中に通じ、「仙渓」の水は絶え間なく東海に流れ込む。華やかな衣服を身に纏う才子が吟唱するなかで、隠居した老人であろう「公」が、「時時」、いつも屏風に画かれた絵を「見」ているとうたわれている。

このように「時時」が「見」字にかかる例は、それほど多くないにせよ、「望」字にかかる例とは異なって、様々な作者において通時代的にみられるものであり、詩的表現としての相性も違和感の無いものといえる。したがって、「飲酒」詩其五の第六句の異文は、Ⅲの「時時見南山」に作っていた蓋然性が高いのである。

（3）

以上にみたように、「飲酒」詩の第六句の異文が、Ⅲの「時時見南山」に作っていたとすれば、淵明詩の文脈においてどのように理解されるのであろうか。淵明の「時時」の例は、「飲酒」詩其五における異文を除いて、都合三例みることができる。まずは「移居」詩其一の例をみてみよう。

弊廬何必広　弊廬　何ぞ必ずしも広からん
08取足蔽床席　床席を蔽うに足るを取らん
鄰曲時時来　鄰曲　時時に来たり

10抗言談在昔　抗言　在昔を談ず
　奇文共欣賞　奇文　共に欣賞す
12疑義相与析　疑義　相い与に析く

（巻二・全十二句）

淵明が長らく住みたいと願っていた「南村」に引っ越した際のうたである。粗末な廬は寝る所を確保できる程度の広さであるが、隣人たちが「時時」、すなわち、いつも尋ねてきて、昔話や見事な文章の話題に花を咲かせている。ここでの「時時」は、淵明の日常生活の些細ではあるが、歓びに充ち満ちた文脈で用いられている。次に「和劉柴桑」詩の例を挙げる。

　良辰入奇懐　良辰　奇懐に入り
06挈杖還西廬　杖を挈（たずさ）えて西廬に還る
　荒塗無帰人　荒塗　帰る人無く
08時時見廃墟　時時　廃墟を見る

（巻二・全二十句）

ここでは、あちらこちらの意で用いられている。また、その前後、第七句の荒れ果てた道、そこに帰りゆく人も無い閑散とした景色、あるいは第八句の廃れきった家屋などから静寂さや空虚さなど、寂しげな語感を伴いながら「時時」が用いられている。なお、ここでの「見」字は[31]、淵明が「西廬」付近を探索する中で、「廃墟」がおのずと目に入ってくるものとして用いられている。最後に「癸卯歳十二月中作与従弟敬遠」詩の「時時」を

挙げよう。

歴覧千載書　歴覧す　千載の書
14時時見遺烈　時時　遺烈を見る
高操非所攀　高操　攀ずる所に非ず
16深得固窮節　深く固窮節を得たり

（巻三・全二十句）

「歴覧」は、「魏文帝与呉質」に「歴覧諸子之文（諸子の文を歴覧す）」（『文選』巻四十二）とみられるように、様々な書物を通読するの意味である。「遺烈」は、左思「詠史」詩其七に「四賢豈不偉、遺烈光篇籍（四賢豈に偉ならず、遺烈　篇籍に光けり）」（『文選』巻二十一）とあるように、古人の遺業をいう。淵明は様々な「千載書」を読み漁り、尊崇する古人を眺めるなかで、「時時」を用いている。ここでの「時時」は、読書を通じて淵明の生きる指針となる「固窮節」の発見に連なるなかで用いられている点において、少なくとも否定的なイメージは伴わない。また、様々な書物を読むなかで「見」字を用いているのは、じっくりと書物を眺めるというような語感で用いられている訳ではないのであろう。

以上を踏まえて、「飲酒」詩其五の異文、「採菊東籬下、時時見南山（菊を採る　東籬の下、時時　南山を見る）」についていえば、淵明の「時時」は、以上にみたように、まれにの意味よりも、恒常的な、いつも、といった方向で用いられる傾向がある。これにしたがえば、第三聯は、東籬のふもとで菊を採りながら、幾度となく「南山」を眺めていると解される。またそこには「移居」詩其一の「鄰曲時時来」の句にみたような、日常生活における

歓びに充ち満ちた肯定的なイメージを含むものと捉えられる。

さて、改めてこの「時時見南山」という異文の由来は、一体どのように捉えればよいのであろうか。以上に挙げた淵明の「時時」の例と見比べてみたとき、淵明とかけ離れた措辞とはいえない。寧ろ、「時時」は俗語的であるという点で特徴的であり、淵明の生きた時代の周辺において、淵明ほど「時時」を用いた詩人は現存しない。つまり、「時時見南山」の句は、いかにも淵明らしい措辞といえる。

そして、本論では「時時見南山」の句と「悠然望南山」の句、加えて「此中」と「此還」も含め、いずれも淵明自身のものとして考える。淵明は「飲酒」詩の序文で次のように述べている。

既酔之後、輒題数句自娯。紙墨遂多、辞無詮次、聊命故人書之、以為歓笑爾（既に酔うの後、輒ち数句を題して自ら娯しめり。紙墨遂に多く、辞に詮次無きも、聊か故人に命じて之を書せしむ、以て歓笑と為すのみ）。

（巻三）

淵明は、酒に酔いつつ、詩をしたため、自ら楽しんでいた。その後、作品が纏まった数量に達したので、次第も整ったものでは無いが、「故人」にお願いして纏めてもらったと述べている。

淵明はこのような過程を経て、一度、世に詩作を発表した。そして、その後に既発表の作品に対して推敲を加え、それが再び世に通行したのではないだろうか。つまり淵明詩には古いエディションと新しいエディションが存在し、それらのいずれかが注に残されたからこそ、異文にも淵明的要素が含まれているのである。

四　「飲酒」詩其五における推敲の過程

以上の考察を踏まえて、「飲酒」詩其五における古いエディションについていえば、『文選』と同様に「雑詩」と題し、『文選』と同様に次のように作っていたと考える。

結廬在人境、而無車馬喧。問君何能爾、心遠地自偏。採菊東籬下、悠然望南山。山気日夕佳、飛鳥相与還。
此還有真意、欲弁已忘言。

「雑詩」という詩題に淵明的要素が窺えるのは、現行の陶集にも「雑詩」と題する一連の詩群があることから明らかである。さらにいえば蕭統の参照した別集においては、本作もその中に含まれていたのであろう。そして、淵明は新しいエディションにおいて、題を「飲酒」詩其五に改め、次のように推敲したと考える。

結廬在人境　廬を結んで人境に在り
02而無車馬喧　而も車馬の喧しき無し
問君何能爾　君に問う　何ぞ能く爾るやと
04心遠地自偏　心遠かれば地自ずから偏なり
采菊東籬下　菊を采る　東籬の下
06時時見南山　時時　南山を見る

山気日夕佳　山気　日夕佳し
08飛鳥相与還　飛鳥　相い与に還る
此中有真意　此中に真意有り
10欲弁已忘言　弁ぜんと欲して已に言を忘る

さて、『文選』所引のものを古いエディションと捉えたのは、推敲という観点よりみたとき、第八句の「此還」よりも「此中」の方が、詩の構成において練られていると考えたことに拠る。「此還」は、その指示する対象がその前句の「飛鳥相与還」に限定されてしまう。これは前句との繋がりにおいて分かり易くもあるのだが、しかしながら後者の「此中」は、そうした繋がりが排され、寧ろ、非限定的であるが故に、大上正美氏が「五～八句の風景と化す自身の真なる空間が「此中に有り」と指呼され、再びなぞらえて浮かび上がる仕組みとなっている」と述べるような、詩全体に関わる解釈を許容する[*32]。大上氏の見解は、「飲酒」詩其五をより美しく、より豊かな解釈を求める立場のものであるが、淵明が推敲の過程において「此還」の限定性を嫌って「中」字の非限定性ないし余情性を重んじ改めたとすれば、淵明自身も大上氏の指摘に近しいこと、すなわち「還」字を以て敢えて「真意」の存する空間を前句ばかりに限定する必要はない、そのように考えたのではあるまいか。

さらに「悠然望南山」と「時時見南山」の句を比較検討してみると、はるか遠くを意味する「悠然」に比べ[*33]、「時時」の方が「南山」との距離感が近しいものとなる。これは、「見」字が「望」字よりも軽い語感の眺めるであるのも留意すべきであろう。つまり「南山」は、じっくりと「望」まずとも、自ずと「見」ることができた。「南山」は淵明の日常に在り、常にそれに心奪われながら、生活を営んでいたものと理解される。

そして、このように「悠然望南山」から「時時見南山」に、「此還」から「此中」に改めたことによって、「此中有真意」という「真意」の存する空間、すなわち第五句から第八句は、より圧縮された印象を持つ。すなわち、とりわけ「悠然」から「時時」に変わり、「南山」との距離感も排されたことで、「南山」を取り巻く夕日の輝きや、そこに飛び帰る鳥たちまでもが、淵明により密着したものへと変貌を遂げるのである。

ただし、第四句において「心遠」、すなわち心を遥か遠くに寄せるとうたわれており[注14]、それを踏まえれば、第六句の「時時見南山」よりも「悠然望南山」の方が、詩の前半との連関性は強固である。第六句において、はるかに聳える南山への志向をうたったのは、第四句の「心遠」という抽象的な表現の具体化でもあるだろう。

もとより「時時見南山」の句が、後世において全くといってよいほど本文に採用されなかったという点で、客観的にみれば、その推敲は失敗だったのかも知れない。ただ、一つ確認しておきたいのは、「時時見南山」の句への推敲が改悪であれ、淵明自身が「悠然望南山」の句に満足せず、ここに「飲酒」詩其五のさらなる美的追求の可能性を感じ取っていたという点である。そして、こうした淵明の表現の模索に決着をつけた人物こそ、蘇軾その人だったのではないだろうか。すなわち、蘇軾が「今皆作「望南山」」と述べ、現行本の全てが「望南山」に作ると述べていたのは、「悠然望南山」の句に限ってのことであり、「望」字から「見」字へ改めるという着想それ自体は、淵明の「時時見南山」の句より得ていたのであろう。蘇軾は淵明のこれらの両句より思索を深めていくことで、「悠然見南山」を完成させたのである。これが、淵明から蘇軾へと受け継がれ、千年来の伝統を持った「飲酒」詩其五の推敲の過程である。

おわりに

本章では、陶集成立を新たな視点から立証することを目標に据えつつ、その基礎研究としてまずは汲古閣本について検討を加えた。汲古閣本の注には「宋本」とあるように、明らかに宋庠の原刻本ではないが、あるいは汲古閣本の編者は宋庠本を底本とし、部分的には宋庠の原刻本に由来している可能性があることを論じた。またその異同・異文は、汲古閣本全体にわたってみられるが、しかし、その校勘に使用されたテキストは、厳密にいえば、巻ごとに作品ごとに異なっており、その異同・異文は四言や五言の詩歌にとりわけ多いことを明らかにした。

そして、陶集には、古いエディションと新しいエディションが存在していたという仮説のもと、淵明の推敲のあり方について論じた。「此還」と「此中」、「悠然」と「時時」には、いずれにも淵明らしい表現要素が窺うことができた。また「此還」と「此中」の推敲については、前者の限定的表現よりも、後者の余情的表現を重んじていたものといえる。「悠然」から「時時」への推敲は、前半との連関性は希薄となるが、淵明にとっては南山との距離感を排することに主眼があったのであろう。加えて、「時時」の俗語的ないし郷土感溢れる響きを重んじていたようにも思われる。

「飲酒」詩其五の異文には淵明らしい表現の要素が確かに窺えるものといえ、その点に陶集の古いエディションと新しいエディションの存在が示唆されている。第一章で論じた通り、陶淵明の別集は、梁代以前、六巻本と八巻本が通行していた。その内実について、六巻本は『隋書』巻三五・経籍志、集部・別集類に「梁五巻、録一巻」とみられる通りであろう[*35]。八巻本については、次のように構成されていたと考えられる。

Ⅰ集五巻・「五孝伝」一巻・「四八目」二巻　（梁啓超『陶集考証』「旧八巻本」）

Ⅱ集五巻・「五孝伝」一巻・「四八目」一巻・録一巻　（郭紹虞『陶集考弁』「八巻本」）

Ⅲ集六巻・「五孝伝」一巻・「四八目」一巻　（稿者）

六巻本と八巻本は、その収録内容において明らかに異なっており、その異なる二つの陶集の意味も問い直す必要がある。これらこそが陶集の古いエディションと新らしいエディションだったのではないだろうか。

さて、今回論じたのは汲古閣本における膨大な異文の一部に過ぎず、そのことを踏まえて本研究の今後の展望についても述べておきたい。汲古閣本の異同・異文は、次のような観点から分類していく必要がある[36]。

①本文・異文ともに淵明独自

②本文・異文ともに一般的

③本文が淵明独自で異文が一般的

④本文が一般的で異文が淵明独自

本章で検討した「飲酒」詩其五は①に属しつつ、蘇軾の例も含めれば④にもまた属している。また、ものによっては②のように淵明の独自性を見出し難い例もあるであろうし、田暁菲氏が述べていた後人の創作的観点も充

分にあり得る。ただ、その場合にしても、③と④のいずれにも属するかを慎重に見極めていく必要がある。また汲古閣本全体にわたって、①のような例がみられるのであれば、かつて陶澍や橋川時雄氏、郭紹虞氏などが論じた「自定本」の説についても少なからざる進展が期待される。淵明の存命中に、自身の作品が纏まった形で存在しなければ、詩文全体への推敲は為し得ない。本章で取り上げた「飲酒」詩其五も、意図的に「雑詩」から除外し、「飲酒」詩に組み込んだと考えられるならば、淵明自身の別集編纂の意識も少なからず窺えるものといえよう。まして淵明の生きた時代には、個人の別集が多く編纂されていた。その影響から淵明自身も、後世に自己の詩作を伝えることを通じて、その生き様や思想を残したいと考えるのは、自然発生的な欲求と考えられるだろう。

以上、新たな視点の陶集成立の可能性を提示し、詩文推敲という新たな観点からの淵明の表現の模索を明らかにすることを目標に据え、本章を結ぶこととしたい。

*1 前掲『苕渓漁隠叢話』巻三（前集、一六頁）参照。

*2 田暁菲『陶淵明与手抄本文化研究』（前言、中華書局、二〇〇七年、一二頁）参照。

*3『中華再造善本総目提要』唐宋編（中華再造善本工程編纂出版委員会編著、国家図書館出版社、二〇一三年、四九四～四九六頁）参照。

*4『中国版刻図録 増訂本』（北京図書館編、文物出版社、一九六一年、二一～二二頁）参照。

*5 袁行霈氏は「如「和郭主簿」「貯」字下「一作復、又作駐、又作佇」、「宋本作」等校記看来、它除了底本之外至少還参校了四種本子、而其所謂宋本者、当是指宋庠本。此外還有拠『宋書』与『南史』等校記（「一に作る」、「又作る」（たとえば、「和郭主簿」詩に「貯」字の下に「一に復に作り、又駐に作り、又佇に作る」、「宋本作る」等の校記よりいえば、底本を除いて少なくとも還参校了四種のテキストを参照しており、いわゆる「宋本」とは、宋庠本を指している。この他にもさらに『宋書』と『南史』なども校勘対象としている）」（『陶淵明研究』北京大学出版社、一九九七年所収の「宋元以来陶集校注本之考察」、二〇五頁）と指摘している。

*6 なお、橋川時雄氏は直接には汲古閣本を参観してないが、汲古閣本の後裔である曽集本や湯漢本などの割注においても、同箇所で同様にみられる「宋本」に注目しており、それについて時代としての宋ではなく、「曾・湯各本所注之宋本、蓋即為宋庠之本也（曾・湯の各本注する所の宋本、蓋し即ち宋庠の本と為すなり）」（前

掲『陶集版本原流攷』四五七頁）と指摘している通りである。

*7 宋庠本が尊重されていたであろうこと、宋・思悦もまたその題記において十巻本を編纂するに当たって、「近永嘉周仲章太守枉駕東嶺、示以本朝宋丞相刊定之本、於疑闕処甚有所補。其楊僕射「序録」、宋丞相「私記」存于正集外、以見前後記録之不同也。時皇宋治平三年五月望月思悦書（近く永嘉の周仲章太守枉 東嶺に枉駕して、以て本朝の宋丞相の刊定の本を示す、疑闕の処に於いて甚だ補う所有り。其れ楊僕射の「序録」、宋丞相の「私記」は正集外に存す、以て前後の記録の同じからざるを見るなり。時に皇宋の治平三年五月望月思悦書す）」と述べており、曽集『陶淵明詩』もまた（おそらくは汲古閣本と殆ど同様のテキストを参照しながら）、陶集を編纂し、その題識において、「淵明集行于世、尚矣。校讐巻第、其詳見於宋宣徽「私記」、北斉陽休之「論載」（淵明集 世に行われて、尚ばる。巻第を校讐し、其の詳びらかなるは宋宣徽の「私記」、北斉の陽休之の「論載」に見ゆ）」（『続修四庫全書』集部・別集類、九八頁参照）と述べている通りである。

*8 曽集の『陶淵明詩』には「与五孝伝以下四八目雑著、所為犯是不韙、非敢有所去取、直欲嚅嚅真淳、吟詠情性、以自適其所適（五孝伝以下と四八目は雑著にして、犯を為す所にして是れ不韙なり、敢えて去取する所有るに非ざるも、直だ真淳を嚅嚅して、情性を吟詠し、以て自適して其の適く所を欲するなり）」（前掲『陶淵明詩』、九八頁）とあるように、「五孝伝」と「四八目」を「雑著」と捉えて、その集から除外している。

*9「陶詩の用語に関する一考察」（田部井文雄・上田武『陶淵明集全釈』明治書院、二〇〇一年、四三六頁）を参照。

*10『唐鈔文選集註彙存』第一冊（上海古籍出版社、二〇〇〇年、四七二頁）

*11『文選（詩騒編）』四（全釈漢文体系二九、集英社、一九七四年、三六八～三六九頁）

*12 逯欽立氏前掲『先秦漢魏晋南北朝詩』巻一、先秦詩（一頁）

*13 前掲の胡仔『苕渓漁隠叢話』巻三（前集、一五頁）を参照。また蘇軾は「陶淵明意不在詩、詩以寄其意耳。采菊東籬下、悠然見南山、則既采菊又望山、意尽於此、無余蘊矣、非淵明意也。采菊東籬下、悠然見南山、則本自采菊、無意望山、偶挙首而見之、故悠然忘情、趣閑而景遠、此未可於文字精粗間求之、以此碔砆美玉不類（陶淵明の意不在の詩、詩以て其の意を寄するのみ。菊を采る 東籬の下、悠然として南山を見れば、則ち既に菊を采りて又山を望む、意 此に尽く、余蘊無し、淵明の意に非ざるなり。采菊東籬下、悠然見南山、則ち本自ら菊を采り、意無くして山を望む、偶たま首を挙げて之を見る、故に悠然として情を忘る、趣閑に趣きて而して景遠し、此れ未だ文字の精粗の間に之を求むるべからざれば、此の碔砆美玉を以て類せざるか）。」（前掲『苕渓漁隠叢話』前集、巻三、一六頁）とも述べている。

*14『文選』（岩波文庫、二〇一九年、三〇～三一頁）参照。

*15 前掲『史記』（三四六頁）

*16 前掲『史記』（二六九一頁）

*17『史記』新釈漢文大系三九（明治書院、一九七三年、五一一頁）参照。

*18『史記』新釈漢文大系九〇（明治書院、一九九六年、二七八頁）参照。

*19 前掲『漢書』（二〇二九頁）

*20 前掲『三国志』（八四六頁）

*21 吴冠文・談蓓芳・章培恒彙校『玉台新詠彙校』上冊（中国古典文学叢書、上海古籍出版社、二〇一四年、七八頁）に拠る。なお、宋・郭茂倩の『楽府詩集』では巻七三・雑曲歌辞十三（中華書局、一九七九年、第三

冊、一〇三四～一〇三八頁）に所収。

*22 前掲『玉台新詠彙校』（上冊、一〇七頁）に拠る。なお、『楽府詩集』では巻三八、相和歌辞十三、瑟調曲三（前掲書第二冊、五五六～五五七頁）に所収。

*23『晋書』（中華書局、一九七六年、一二二九頁）に拠る。『楽府詩集』では、巻八五・雑歌謡辞三、歌辞三に「襄陽童児歌」（前掲書第四冊、一二〇一～一二〇二頁）の題で収録。

*24『楽府詩集』巻四六、清商曲辞三、呉声歌曲三（前掲書第二冊、六六九～六七〇頁）に拠る。また『古今楽録』の引用も該書に拠る。

*25 何錫光氏『陸亀蒙全集校注』（鳳凰出版社、二〇一五年、三〇〇頁）参照。

*26 何錫光氏前掲『陸亀蒙全集校注』（二九一頁）参照。

*27 白居易「春暮寄元九」（巻九・全十句）には次のようにみられる。

唯与故人別、江陵初謫居。時時一相見、此意未全除（唯だ故人と別れ、江陵に初めて謫居す。時時一たび相い見えんとす、此の意は未だ全くは除かれず）。

親友の元稹が江陵府の士曹参軍に貶謫された元和五年の作。彼に向けて、ただ古馴染みの友人と別れ、（あなたが）江陵に貶謫されてしまい、何かについてあなたのことに会いたいと願っており、この気持ちはすっかりと取り除くことができないでいる、とうたわれている。なお、柳川順子氏は「時時」について、「しばしば。当時の俗語。」（『白氏文集』新釈漢文大系・一〇六、明治書院、二〇一八年、四七二頁）と述べる。また「見」字は、那波本では「見」字に作り、金沢本や管見抄本では「念」字に作る。

*28 引用は陶敏・易淑瓊氏の『沈佺期宋之問集校注』（上冊、中華書局、二〇〇一年、一五〇頁）に拠る。

*29『李太白文集』（『唐代研究のしおり』第九、平岡武夫編『李白の作品:資料』京都大学人文科学研究所、一九五八年に収録の静嘉堂文庫本、十一葉、五五頁）に拠る。

*30『全唐詩』巻六五一（中華書局、一九七九年、七四八二頁）所収。

*31なお、ここでの「見」字には、「一作有」と注されており、そうであれば、あちらこちらに「廃墟」が「有」、すなわち存在していると解される。

*32大上正美氏「「飲酒其五」試解」（『阮籍・嵇康の文学』東洋学叢書、創文社、二〇〇〇年所収の第Ⅳ部「陶淵明の文学をどのように考えるか」の第三章、三六二頁）参照。

*33「悠然」については、井上一之氏が『詩経』から東晋ないし劉宋における「悠」や「悠悠」、さらには「悠然」などの例を挙げて詳細に検討しており、結論として、「一つは、悠然を憂い、あるいは永く思い続けるさまとして、やるせない思いで南山を見る解する。もう一つは、悠然をはるか、遠くという意味の、「見」を修飾する副詞として、遠くに南山を見ると解する。二者択一的にいえば、後者の方がより自然であろう。」（『中国詩文論叢』第九集、一九九〇年）と述べている。本論でも「悠然」の解釈については後者の解釈を支持し、「はるか、遠くに」といった意味で理解することとしたい。

*34「心遠」については、加藤文彬氏「陶淵明詩に於ける「遠」字とその展開」（『筑波中国文化論叢』三一号、二〇一二年、後に『陶淵明受容研究』第一部・第一章「陶淵明詩文に於ける「遠」字とその展開」、筑波大学博士（文学）学位請求論文、二〇一五年に所収）に詳しく論じられている。

*35前掲『隋書』（一〇七二頁）

*36なお、この分類については、日本文学の曽倉岑氏の「人麻呂の異伝推敲説概要・補説」（『上代文学』第五八

号、一九八七年）を参照した。

結章

本論文は、陶淵明の読書の具体的有り様と、淵明の読書の成果として表現された歴史的題材を扱う作品群に注目し、淵明にとっての読書と表現という営みが、いかなる意義を有するのかを明らかにするのを目的として、検討を加えたものである。

第一章では、淵明の読書の有り様を考える上で重要な作である「群補録」を、偽作と断じた『四庫全書総目』の主張について、近年の研究成果を踏まえ、またより慎重な態度で再検証を加えていった。『群輔録』提要、及び『陶集』提要の偽作説は、確信的な根拠に裏打ちされた主張とは捉えることができないものの、全面的には否定し得ない側面もあった。だが、根本的な論証のあり方として、引用文献を意図的に改竄するなどがみられた。四庫館臣は乾隆帝に指示されたが故に、偽作であるのを前提に論じなければならなかった。もとより四庫館臣らも偽作説を成立させることなど不可能であるのを知っていたのである。

そうした観点からいえば、「群補録」や「五孝伝」を収録していたであろう初期陶集の八巻本は正統性を持つ。また必ずしも蕭統が「群輔録」や「五孝伝」を参照していなかったとはいえない。蕭統が参照していたにせよ、していなかったにせよ、両作を捉え直し、淵明にとっていかなる意味を持つかを検討するのは、蕭統の文学観を明らかにする上でも、淵明の全体像を考えていく上でも重要な意味を持っているのである。

第二章では、淵明の「群輔録」について、淵明の読書札記と捉える先学の見解に注目しながら、検討を加えていった。淵明は、生活のために政界に出仕するも馴染めず、貧しい暮らしを営む中で、読書を楽しみ、学問的

研鑽に励んでいた。そして、そうした学問的研鑽の名残ともいえよう「群輔録」では、四十種の多きを数える淵明の愛読書を具体的に確認することができた。加えて、淵明の書物を入念に読み込む態度や古人を正しく伝承しようする記述姿勢が窺われた。なお、こうした淵明の記述姿勢を踏まえたとき、「群輔録」における資料的価値も自ずと高くなるものといえよう。「群輔録」は、散逸した書物の復元にも資する極めて貴重な資料と意義づけられるのである。

ただし、引用文ばかりで構成される「群輔録」の文学的興趣は極めて希薄である。その意味で蕭統が『陶淵明集』を編纂する際に、仮に「群輔録」を参照していたとしても、敢えて採録してなかったであろう意味が示唆されている。「群輔録」は、淵明自身の性情の発露が殆ど皆無であるが故に、文学作品としては認め得ず、採録しなかったのであろう。

そして、淵明の「群輔録」の編纂動機として、先学が我が子のために、彼らの見聞を広げるために編纂したと意味づけるのは、充分に首肯される。だが、その根底には、淵明の古人への尊崇の念、古の世界への憧憬の念が底流していたのであった。淵明自身にそうした古人への思いがあったからこそ、我が子にも古人のことを学んで欲しいと願ったと捉えるべきである。

第三章では、「群輔録」を踏まえて浮かび上がった、古人を尊崇し、古の世界に憧憬の念を抱く淵明像を踏まえて、古人ないし歴史を題材とする「詠史」詩に検討を加えていった。「詠史」詩は、古くより一般「詠史」詩と左思「詠史」詩とで分けて捉えられてきた。その認識は、明代や清代に至っても変わらず、劉熙載は『芸概』詩概篇において、「伝体」と「論体」と称した。本論ではそれを引き継ぎ、淵明の伝体「詠史」詩である「詠二疏」詩、「詠荊軻」詩、「詠三良」詩について検討を加えた。

伝体「詠史」詩は、従来、史書に基づき、叙事的になり過ぎるが故に、批判的に捉えられることもあった。淵明の伝体「詠史」詩は史書との比較において、淵明の歴史人物への関心が、そのうたわれる事跡の選択によって特色的に窺うことができた。そして、淵明はときに歴史人物に仮託して、自己の志向を表現することもあった。とりわけ「詠三良」詩では、曹植とは異なって「義」の精神を貫く独自的な三良像を構築していた。加えて、建安期にみるような素朴かつ力強い対偶表現などもみることができた。これは、淵明の生きた当時の美文志向の対偶表現とは合致しないが、淵明が古人の視点を獲得し、歴史世界を巡るような態度でうたっているのを踏まえれば、より歴史人物の生きた時代の措辞に接近するような、臨場感溢れる表現といえる。

第四章では、論体「詠史」詩と伝体「詠史」詩、そして「擬古」詩における、語り手の設定のあり方の相違に注目し、それぞれの作品の表現方法の特色を明らかにした。

従来、論体「詠史」詩は、叙事的な伝体「詠史」詩とは相違して、歴史人物の事跡を端的にうたいつつ、叙情性豊かに表現されるものと評されてきた。この所以は、淵明の伝体「詠史」詩に即していえば、その語り手は歴史人物の視点に設定されているのに対し、論体「詠史」詩は、表現主体と重なるような語り手が設定されていることに由来する。表現主体の視点からうたわれる論体「詠史」詩は、歴史人物の事跡を取り上げるにせよ、表現主体の主観的な思いとしてうたわれ、その性情が直接的に発露されることとなるのである。

そして、淵明の「擬古」詩は、語り手の設定のあり方において論体「詠史」詩と共通しており、さらに左思「詠史」詩の露骨な現実批判にも通じる力強い表現が窺われた。この点について附言しておくと、鍾嶸が『詩品』において淵明を評して「又協左思風力（又左思の風力に協(かな)う）」と述べた際、その脳裏に強く浮かんでいたのが、

「擬古」詩だったのではないだろうか。淵明の「擬古」詩に孕む諷諫性に、左思「詠史」詩との通底をみたものと思うのである。

また「擬古」詩其一や其八の語り手は、歴史人物の事跡を、自分自身の過去の経験として表現している。その意味で「擬古」詩の語り手は、歴史人物の生き様そのものを自己のものとして感得し、語り手自身が歴史的地平そのものに降り立っているかのような態度で表現している。そうした歴史との向き合い方からすると、淵明の「擬古」詩は論体「詠史」詩よりも、伝体「詠史」詩に接近していることが明らかになった。淵明の「擬古」詩は、表現主体と重なるような語り手が、歴史的視座・立場から現実批判を行うという特異な表現方法を取っていたのである。

さて、以上の行論を踏まえみると、淵明は書物と向き合うに当たっては、様々な価値観のもとで対峙していたことが浮かび上がってくる。

淵明は故郷を離れる際には、かつて読書に耽っていた自己の姿を名残惜しそうに想起することもあれば、読書を快楽主義的に楽しむことを述べてもいる。また、粗末なあばら屋で、ときに友人たちと読書談義に花咲かせ、ときに孤独に書物と格闘している姿もうたわれてもいた。加えて、その読書の具体的な有り様として、正しい人名を求めて書物を渉猟している姿は、まるで清朝考証学者の事実求是の体現のごとく、周到かつ詳細なものであった。

淵明にとっての読書という営みは、その日常にあり、日頃から真摯な態度で向き合っていたからこそ、多様な価値を備えていたのであろう。その多様な読書への思いの根源にあるのは、淵明の純粋な古人への、ひいて

は古の世界への限りない愛好心に由来する。

また、そうした淵明の古への限りない愛好心は、歴史を題材とする詩作を表現することで昇華されている。淵明は伝体「詠史」詩を表現することを通じ、古人の視点、ひいては古人の生き方を獲得し、古の世界を自在に巡ることができたものといえよう。「擬古」詩を表現することを通じては、淵明が尊崇する古人、具体的には司馬遷、あるいは伯夷・叔斉や荊軻などの生き方を自己のものとすることで、淵明は古人の歩んだ道を淵明自身の人生として歩み直すこともできた。

こうした淵明の読書と表現の営みから、淵明の書物への、古人への不動の信頼感がみてとれる。ただし、古人に信頼を寄せるというのは、逆からいえば淵明が自身の生きる現実に対して、何らかの憤懣を抱えていたとも捉えられる。淵明には我々の想像を絶するような、貧窮極まる生活苦や、晋宋革命の政治的動乱期の厳しい現実があって、そのために書物、ひいては古の世界へと逃避していたのかも知れない。

だが、淵明は書物を読むに止まらず、それを表現もし続けた。つまり、淵明は書物、古の世界を愛好しつつも、その世界に耽溺するのではなしに、現実を見据え、表現するのを目的とした読書を行っていたといえる。

そうした読書態度は、逃避的ではない。寧ろ、挑戦的と捉えるのが相応しい。表現することを見据えた読書であったからこそ、淵明は古人の生き方を獲得することができたのである。

淵明は読書を通じて古を学び、それを表現することを通じて新たな生のあり方を獲得していく。そのように生きていくことで、淵明は厳しい現実に立ち向かっていったのである。つまり淵明の現実、ひいては淵明の生そのものを支えていたものが、淵明にとっての読書と表現という営みなのであった。これこそが、淵明にとっ

ての読書と表現の意義である。

第五章では、稿者の今後の研究方向を示した。その目標は陶集成立を新たな視点から立証することである。その基礎研究としてまずは汲古閣本について検討を加えた。汲古閣本の注には「宋本」とあるように、明らかに宋庠の原刻本ではないが、あるいは汲古閣本の編者は宋庠本を底本とし、部分的には宋庠の原刻本に由来している可能性があることを明らかにした。またその異同は、都合七百箇所以上に及び、汲古閣本全体にわたってみられるが、しかし、その校勘に使用されたテキストは、厳密にいえば、巻ごとに作品ごとに異なっており、その異同は四言や五言の詩歌にとりわけ多いことが明らかになった。

それでは、なぜ、『陶淵明集』にはこれほど多くの異文が存在しているのか。この点について、淵明は、まず六巻本としての詩集を発表し、その後、推敲を重ねたものが、新しいエディションの八巻本として通行し、それらが『陶淵明集』に反映されたからこそ、異同・異文が多く存在するものと考える。

その具体的な論証として、淵明の「飲酒」詩其五の第五句の「悠然望南山」と「時時見南山」、第九句の「此還有真意」と「此中有真意」の異同に検討を加えていくと、いずれにも淵明的要素が含まれていた。そして、淵明の推敲の過程からは、淵明の美的可能性を求め続ける躍動的姿が窺われるものであった。

こうした淵明詩文に残された大量の異文には、その検討を通じて陶集テキストの成立の過程や、さらには淵明の表現者としての動的な詩作営為の有り様、また思想的変遷の有り様などを明らかにし得る可能性がある。今後は『陶淵明集』全体の異文に対して考察を加えていく必要があるだろう。いま改めて陶淵明という詩人の全体を捉え直す決意を表明し、本論の結びとしたい。

參考文獻

一、陶集版本

・『陶淵明集』（汲古閣藏本、中華再造善本）
・『陶淵明詩』（曾集本、続古逸叢書）
・『陶靖節先生詩注』（湯漢本、続修四庫全書）
・『箋注陶淵明集』（李公煥本、四部叢刊）
・『古詩紀』（馮惟訥）
・『古詩類苑』（張之象）
・『陶元亮詩』（黄文煥折義、四庫全書存目叢書）
・『漢魏六朝百三名家集』（張溥）
・『東山草堂陶詩箋』（邱嘉穗評注、四庫全書存目叢書）
・『陶詩彙注』（呉瞻泰輯、四庫全書存目叢書）
・『陶詩彙評』（温汝能、順徳鄧氏）
・『陶淵明集』（蘇東坡書、京江魯氏藏本、中華再造善本）
・『陶靖節先生集』（陶澍集注、続修四庫全書）

二、和文（以下、五十音順。同一執筆者の場合は、出版年順。）

・安藤信広・大上正美・堀池信夫編『陶淵明――詩と酒と田園――』（東方書店、二〇〇六年）
・安藤信広『庾信と六朝文学』（創文社、二〇〇八年）
・伊藤虎丸・横山伊勢雄『中国の文学論』（汲古書院、一九八七年）
・石川忠久「史家としての陶淵明」（『桜美林大学中国文学論叢』第一号、一九六八年）
・石川忠久『陶淵明とその時代』（研文出版、一九九四年）
・市川桃子「漢魏の詠史詩――その成立と発展」（『論集』十六号、一九八二年）
・一海知義・興膳宏『陶淵明　文心雕竜』（筑摩書房、世界古典文学全集二五、一九六八年）
・一海知義「陶淵明の孔子批判」（『文学』四五号、岩波書店、一九七七年）
・一海知義『一海知義著作集』（藤原書店、二〇〇八年）
・伊藤正文『曹植』（中国詩人選集三、岩波書店、一九五八年）
・井上一之「「悠然見南山」考」（『中国詩文論叢』九号、一九九〇年）
・井上一之「陶淵明「詠二疏詩」について――知足の是非――」（『中国詩文論叢』二四号、二〇〇五年）
・井上一之「陶淵明「詠三良詩」について――忠と済民」（『中国詩文論叢』二五号、二〇〇六年）
・宇賀神秀一「四庫全書総目提要　陶淵明集　訳注」（『文教大学国文』四一号、二〇一二年）

・宇賀神秀一「陶淵明「擬古」詩其一再考 」（『筑波中国文化論叢』三三号、二〇一四年）
・宇賀神秀一「陶淵明詠史詩試論――詠史詩における「伝体」とその特色――」（『筑波中国文化論叢』三四号、二〇一五年）
・宇賀神秀一「陶集偽作説小考」（『筑波中国文化論叢』三五号、二〇一六年）
・宇賀神秀一「陶淵明の読書の軌跡――「集聖賢群輔録」を中心として――」（『日本中国学会報』第六九集、二〇一七年）
・大立智砂子「陶淵明の仮託詩における一人称表現――詠史詩および「形影神」を中心として」（『中国文学研究』三三号、二〇〇七年）
・大上正美『阮籍・嵇康の文学』（創文社、二〇〇〇年）
・大上正美『六朝文学が要請する視座――曹植・陶淵明・庾信――』（研文出版、二〇一二年）
・岡村繁『陶淵明――世俗と超俗――』（NHKブックス、一九七四年）
・大矢根文次郎『陶淵明研究』（早稲田大学出版社、一九六七年）
・小田健太「『文選集注』江淹「雑体詩」訳注（八）殷東陽（興矚）仲文」（『筑波中国文化論叢』三三号、二〇一四年）
・加藤敏「陶淵明「詠貧士七首」小論」（『中国文化』七十号、二〇一二年）
・加藤文彬「「擬古」詩九首考――其三の表現を手がかりに――」（筑波大学博士（文学）学位請求論文『陶淵明受容研究』第一部・第四章、二〇一五年度）

・川合康三『中国の自伝文学』（創文社、一九九六年）
・川合康三・富永一登・釜谷武志・和田英信・浅見洋二・緑川英樹『文選』（岩波文庫、二〇一九年）
・稀代麻也子「『宋書』隠逸伝の陶淵明」（『中国文化』五十九、二〇〇一年）
・稀代麻也子『『宋書』のなかの沈約――生きるということ――』（汲古書院、二〇〇四年）
・興膳宏「左思と詠史詩」（『中国文学報』二十一号、一九六六年）
・興膳宏『中国の文学理論』（筑摩書房、一九八八年）
・興膳宏・川合康三『隋書経籍志詳攷』（汲古書院、一九九五年）
・興膳宏『六朝詩人伝』（大修館書店、二〇〇〇年）
・興膳宏『乱世を生きる詩人たち――六朝詩人論――』（研文出版、二〇〇一年）
・興膳宏監修、横山弘・斎藤希史編『（嘉靖本）古詩紀』（汲古書院、二〇〇五年）
・斎藤希史「「悠然」の時空――陶淵明にいたるまで――」（『未名』二十八号、二〇一〇年）
・坂口三樹「陶詩の用語に関する一考察」（田部井文雄・上田武『陶淵明集全釈』明治書院、二〇〇一年に所収）
・斯波六郎『陶淵明詩訳注』（北九州中国書店、一九五一年）
・斯波六郎『中国文学における孤独感』（岩波書店、一九五八年）
・釈清潭『陶淵明集』（『国訳漢文大成』、国民文庫刊行会、一九二九年。後に日本図書センター、二〇〇〇年に所収）
・新釈漢文大系『文選（詩篇）』（十四、明治書院）

・新釈漢文大系『史記』（三九、明治書院）
・新釈漢文大系『史記』（九〇、明治書院）
・新釈漢文大系『白氏文集』（一〇六、明治書院）
・鈴木虎雄『陶靖節詩解』（東洋文庫、一九九一年）
・鈴木修次『漢魏詩の研究』（大修館書店、一九六七年）
・全釈漢文体系『文選（詩騒編）』四（二九、集英社）
・曽倉岑「人麻呂の異伝推敲説概要・補説」（『上代文学』第五八号、一九八七年）
・高木正一『鍾嶸詩品』（東海大学出版会、一九七八年）
・高木正一『六朝唐詩論考』（創文社、一九九九年）
・田部井文雄・上田武『陶淵明全釈』（明治書院、二〇〇一年）
・都留春雄・釜谷武志『陶淵明』（角川書店、一九八八年）
・道家春代「建安期の曹植の詩について」（『名古屋女子大学紀要』三六号、一九九〇年）
・戸倉英美『詩人たちの時空――漢賦から唐詩へ――』（平凡社、一九八八年）
・斯波六郎・花房英樹『文選』（筑摩書房、世界文学大系七十、一九六三年）
・沼口勝「陶淵明「擬古」九首〈其三〉の詩の寓意について」（『中国文化』五十八号、二〇〇〇年）
・沼口勝「陶淵明「擬古」詩考」（『立命館文学』五九八号、二〇〇七年）
・永田拓治「『汝南先賢伝』の編纂について」（『立命館文学』六一九号、二〇一二年）
・橋川時雄『文字同盟』全三巻（汲古書院、一九九一年）

・平岡武夫編『李白の作品：資料』（『唐代研究のしおり』第九、京都大学人文科学研究所、一九五八年）
・本田成之『陶淵明集講義』（隆文館、一九二一年）。なお、国立国会図書館デジタルコレクション（http://kindai.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/964992/77）に無料公開。
・松枝茂夫・和田武司『陶淵明全集』（岩波文庫、一九九〇年）
・向嶋成美『漢詩のことば』（大修館書店、一九九八年）
・向嶋成美「鮑照模擬詩考」（『森野宗明教授退官記念論集 言語・文学・国語教育』三省堂刊、一九九四年）
・森野繁夫『文選雑識』（第一学習社、一九八二年）
・安居香山・中村璋八『緯書の基礎的研究』（国書刊行会、一九八六年）
・矢田博士「曹植『三良詩』考――『文帝誄』との関連を中心として」（『中国文学研究』十九号、一九九三年）
・柳川順子『漢代五言詩歌史の研究』（創文社、二〇一三年）
・吉川幸次郎「推移の悲哀――古詩十九首の主題 上」（『中国文学報』十号、一九五六年）
・吉川幸次郎「班固の詠史詩について」（『書誌学論集 神田博士還暦記念』神田博士還暦記念会、一九五七年）
・吉川幸次郎「推移の悲哀――古詩十九首の主題 中」（『中国文学報』十二号、一九六〇年）
・吉川幸次郎「推移の悲哀――古詩十九首の主題 下」（『中国文学報』十四号、一九六一年）
・吉川幸次郎『吉川幸次郎全集』六巻（筑摩書房、一九六八年）
・吉川幸次郎『吉川幸次郎全集』七巻（筑摩書房、一九六八年）

三、中文

・曹旭『詩品集注』（上海古籍出版社、一九九四年）
・于光華『重訂文選集評』上・中・下冊（国家図書館出版社、二〇一二年）
・袁行霈『陶淵明集箋注』（中華書局、二〇〇三年）
・閻若璩『尚書古文疏証』（上海古籍出版社、一九八七年）
・王英志『袁枚全集』（江蘇古籍出版社、一九九三年）
・王応麟『玉海』（江蘇古籍出版社、一九八七年）
・王夫之『清詩話』（上海古籍出版社、一九七八年）
・王叔岷『陶淵明詩箋証稿』（芸文印書館、一九七五年）
・王先謙・劉武『荘子集解・荘子集解内篇補正』（中華書局、一九八七年）
・王孟白『陶淵明詩文校箋』（黒竜江人民出版社、一九八五年）
・王瑤『陶淵明集』（人民文学出版社、一九五六年）
・欧陽詢、汪紹楹『芸文類聚』（上海古籍出版社、一九八二年）
・王利器『文鏡秘府論校注』（中国社会科学出版社、一九八三年）
・郭維森・包景誠『陶淵明集全訳』（貴州人民出版社、一九九二年）
・郭紹虞『照隅室古典文学論集』上・下冊（上海古籍出版社、一九八三年）

・郭茂倩『楽府詩集』全四冊（中華書局、一九七九年）
・何焯、高維『義門読書記』上・下冊（中華書局、一九八四年）
・何錫光『陸亀蒙全集校注』（鳳凰出版社、二〇一五年）
・夏伝才・唐紹忠『曹丕集校注』（建安文学全書、河北教育出版社、二〇一三年）
・魏正甲『陶淵明集訳注』（文津出版社、一九九四年）
・龔斌『陶淵明集校箋』（上海古籍出版社、一九九六年）、『陶淵明集校箋（増訂本）』（里仁書局、二〇〇七年）
・許学夷、杜維沫『詩源弁体』（人民文学出版社、一九八七年）
・侯爵良・彭華生『陶淵明名篇賞析』（北京十月文芸出版社、一九八九年）
・呉冠文・談蓓芳・章培恒『玉台新詠彙校』上・下冊（中国古典文学叢書、上海古籍出版社、二〇一四年）
・黄仲崙『陶淵明作品研究』（帕米爾書店、台北、一九六九年）
・胡仔、廖徳明『苕渓漁隠叢話』前・後集（人民文学出版社、一九八一年）
・呉師道『呉礼部詩話（雑説附）・東坡詩話録』（叢書集成初編、台湾商務印書館、一九三六年）
・呉沢順『陶淵明集』（岳麓書社、一九九六年）
・古直『陶靖節詩箋定本』（『層冰堂五種』国立編訳館中華叢書編審委員会、一九八四年）
・章学誠、葉瑛『文史通義校注』（中華書局、一九八五年）
・斉益寿『黄菊東籬耀古今――陶淵明其人其詩散論――』（国立台湾大学出版、二〇一六年）
・謝先俊・王勛敏『陶淵明詩文選訳』（巴蜀書社、一九九一年）

・周勛初『唐鈔文選集注彙存』（上海古籍出版社、二〇〇〇年）
・周祖謨『広韻校本：附校勘記』上・下冊（中華書局、一九八八年）
・沈徳潜『古詩源』（中華書局、一九六三年）
・錢謙益・季振宜、屈萬里・劉兆祐『全唐詩稿本』（中華書局、一九七九年）
・孫鈞錫『陶淵明集校注』（中州古籍出版社、一九八六年）
・中華再造善本工程編纂出版委員会『中華再造善本総目提要』唐宋編（国家図書館出版社、二〇一三年）
・中華大典工作委員会・中華大典編纂委員会『中華大典――魏晋南北朝文学分典』（鳳凰出版社、二〇〇七年）
・趙在翰、鍾肇鵬・蕭文郁『七緯』（中華書局、二〇一二年）
・丁福保『陶淵明詩箋』（芸文印書館、一九六四年）
・丁福保『全漢三国晋南北朝詩』（芸文印書館、一九六八年）
・田暁菲『陶淵明与手抄本文化研究』（中華書局、二〇〇七年）
・陶敏・易淑瓊『沈佺期宋之問集校注』上・下冊（中華書局、二〇〇一年）
・唐満先『陶淵明集浅注』（江西人民出版社、一九八五年）
・藩重規「聖賢群輔録新箋」（『新亜書院学術年刊』第七期、一九六五年）
・北京大学中文系・北京師範大学中文系『陶淵明資料彙編』上・下冊（古典文学研究資料彙編、中華書局、二〇〇四年）
・北京図書館編『中国版刻図録（増訂本）』（文物出版社、一九六一年）

・方祖燊『陶潛詩箋註校証論評』（学海出版社、一九七七年）
・楊潔瓊・許華偉『詠史詩精華』（京華出版社、二〇〇二年）
・楊慎『丹鉛雑錄』（国学基本叢書、台湾商務印書館、一九六八年）
・楊伯峻『列子集釈』（新編諸子集成、中華書局、一九七九年）
・楊伯峻『春秋左伝注』全四冊（中華書局、一九九〇年）
・姚振宗『後漢書芸文志』（『二十五史補編』中華書局、一九八六年）
・李華『陶淵明詩文賞析集』（巴蜀書社、一九八八年）
・李華『陶淵明新論』（北京師範学院出版社、一九九二年）
・李梅訓「司馬貞生平著述考」（『安徽師範大学学報』人文社会科学版、第一期、二〇〇〇年）
・劉熙載、王気中『芸概箋注』（貴州人民出版社、一九八六年）
・梁啓超『飲冰室合集』（中華書局、一九三六年）
・逯欽立『陶淵明集』（中華書局、一九七九年）
・逯欽立『先秦漢魏晋南北朝詩』（中華書局、一九八四年）
・楊勇『陶淵明集校箋』（香港興記書局、一九七一年）

初出一覧

序　章　新稿

第一章　陶集偽作説小考

『筑波中国文化論叢』三五号、二〇一六年収録の「陶集偽作説小考」を改稿。

第二章　陶淵明の「集聖賢群輔録」を巡る一考察

『日本中国学会報』第六九集、二〇一七年収録の「陶淵明の読書の軌跡――「集聖賢群輔録」を中心として――」（原題）を改稿。

第三章　陶淵明の伝体「詠史」詩

『筑波中国文化論叢』三四号、二〇一五収録の「陶淵明詠史詩試論――詠史詩における「伝体」とその特色――」（原題）を改稿。

第四章　新稿　陶淵明の「詠史」詩と「擬古」詩

第五章　新稿　『陶淵明集』の異文について

結　章　新稿